夢幻回航
1巻
酎ハイ呑兵衛

「夢幻回航」第一巻　酎ハイ呑兵衛 著

「夢幻回航」第一話

その夜は、月が血のように真っ赤に滾っていた。

風は無く、夏だというのに、空気は妙に冷たく感じられた。

空は赤い月明かりで照らされて、真っ赤な雲で覆われていた。血の色のような赤が、空一面ににじんでいた。

草原に虫も鳴かず、田んぼにも畑にも、森にも土や植物の臭いすらなく、用水路に流れる水の音も聞こえなかった。

上空にも風がないのか、雲の動きも見ることが出来なかった。

音も無く、ただ漫然と時間だけが過ぎて行く。
いや、その時間さえも止まっているようであった。

赤い月明かりに照らされた建物や木々の影は、赤黒く見えていた。

ねっとりとした密度で、その場の空気が淀んでいる。

そんな空間に、少しばかり場違いとも思える声が、辺りに響いた。

「こんな時は鬼が出るぞ！」どこからともなく現れた老人が、真っ赤に照らされて血に染まったように見える身体をよじりながら、ゆっくりと月を見上げる。

誰に言ったのか、誰も居ないその場所で、独り言だったのか、それを聞きつけた者が居た。

これもまた、どこからともなく現れて、老人の3メートルほど後ろに立つ若者の姿があった。

身の丈は180㎝ほどであったろうか。
痩せすぎもせず、かといって無駄に筋肉が付いている訳でもない。トレーニングウエアに下駄履きという、一風変わった姿の青年だった。

顔には金属製とは違う、黒縁のメガネがかけられていた。

顔立ちはと言われると、どこか印象の薄い、どこにでも居そうな平凡な作りと言った所だろうか。
美男子ではないが、そう悪くも無く、ごく普通の男前である。

「鬼、ですか、出ますかね」
まるで鬼が本当に居るような言い方で、青年が尋ねた。
「出るな」
老人が答える。地の底から響くような低い声で、ゆっくりと口を開く。

ゆっくりと振り返る老人の姿が、少しずつ変わり始めた。

身体全体が大きくなり、筋肉が盛り上がり、貧相な体つきだった老人が、隆々とした体型へと変わって行く。

それにつれて、顔や頭も変化していった。

化け物じみた、おそろしげな表情になったが、古の伝説上の、いわゆる鬼とは違った形相だった。

老人の皮膚は土気色に代わり、口が大きく裂けて、全ての歯が、まるで犬の歯のように鋭く尖って、青年を威嚇する。

青年は老人の様子を見ても、大して驚かずに、ゆっくりと構えを取った。

「オレのこの姿を見ても驚かないのか」
元老人だった鬼も、青年に対して攻撃の態勢を取る。

青年はニヤリと笑って、「来いよ」と掌で相手を誘った。

異形の鬼も心なしか笑ったように見えた。

「ふん」鬼の鼻息。

鬼の右手がいきなり伸びて、３メートルの距離をとっていても、彼の間合いだったことを知る。

鬼の太く大きく伸びた腕が、青年の側頭部をとらえたかに見えた。

青年はさすがに攻撃を真正面から受けることはせずに、身体を少し後方に下げて、相手の手の甲を軽く叩いて攻撃をいなした。

軽く叩いたように見えたのだが、鬼は大きくバランスを崩して、前方に蹌踉ける。

「貴様、何をした」
お決まりの文句に、青年はまたしても顔を少しゆがめて笑うだけだった。

怒りにまかせた鬼の一撃が、さらに青年を襲う。
青年は今度は襲ってきた左腕を両腕で押さえつつも、繰り出された拳の方向へ、斜めに少し下がりながら躱した。

その時に、青年は相手の腕にひねりを加えて、手首を折りにかかる。

嫌な音がして、鬼の手首がおかしな方向へ曲がった。

だが、鬼の方も顔一つゆがめない。
左腕を引っ込めて、一振りしただけで、折れた部分が治ってしまった。

「なめるな人間」
少しだけ感情のこもった声に、青年はさらにニヤリと笑う。

不敵な笑み、と言うよりも、こちらの方も何か戦いを楽しんでいるような、そんな不穏な雰囲気を漂わせた狂気に満ちた、寒気を感じる笑みだった。

青年の方からの攻撃が開始された。

鬼の方から見ると、青年の身体が沈んだように見えたに違いない。
青年は前方に体重を移動させると、一気に鬼の胸部を両手の平で掌打した。

青年の踏み込みも体重の乗せ方も完璧だった。
表面の肉が歪んだように見えた。
そして鬼の肋骨が折れた。
内臓まで打撃が届いたのだろう、鬼は吐血して、苦しげに身を折った。
青年の攻撃はこれで終わりではなかった。
鬼の身体が打撃で吹き飛ぶのに合わせて、更に強い踏み込みと打撃を繰り返す。
鬼の身体が宙に浮いた状態で、打撃を繰り返しながら、１０メートルも移動した。
青年は細身に見合わずに、たぐいまれな筋力を身に付けているのだろうか。
最後の攻撃が決まった瞬間に、青年は白い歯を見せて、狂気の笑みをさらに酷くした。

鬼の背中が裂けて、内臓が千切れて飛び出した。
鬼も赤い血をしていることがわかった。
血しぶきを上げて、鬼が崩れ落ちる。
鬼は何か喋っているように見えたが、青年にもその声を聴き取ることが出来なかった。
何と言ったのか、狂気の青年はそんなことは気にも留めずに、鬼の身体から離れた。

青年の身体には、返り血すら付いていなかった。

ゆっくりと、鬼はくずおれた。

青年はそれを見てやっとの構えを解く。
鬼の身体は地面の倒れる前に、影が薄くなり始めて、スーッと消えてしまった。
これで本当に鬼が滅せられたのかどうかは、青年にも実はよくわからなかった。
鬼を倒した青年にさえも、その本当の姿、本質はわかって今かった。

戦って、生きている時は物質的であったが、こうして倒してしまえば、まるでなかったもののように消えてしまうのだ。
本当の姿を想像することすらわからない状態であった。

ゆっくりと、鬼は姿を消してしまった。
まるで溶けて無くなるようにスーッと空間に消えていった。

青年はその姿を確認し、さらに大きく顔をゆがめて笑った。

そうして少し落ち着いてから、緊張の抜けた様子になった。
大きく息をして、形相も自然なものへと戻っていた。
狂気の姿はなかった。

赤い光が和らいで、辺りの空気の色が、少しだけ正常に戻った気がする。
青年の着ている服の色や、形もはっきりと輪郭を見せて、紺色にストライプのトレーニングウエアであることがわかった。
赤い月の光が、少しだけ薄くなって、妖気のようなものがほんの少し軽くなった気がした。

少しこの青年について行ってみよう。
鬼を倒した後に青年は少しだけ、消えて行く鬼に手を合わせて祈った。

成仏でも祈ったのか、何を思っての祈りかは、青年にしかわからなかった。それはこの青年が鬼を倒した時に行う習慣のようなものなのかもしれない。
それから姿勢を正して、ゆっくりと歩き始めた。
どこへ行こうというのだろうか？
青年が歩を進める度に、まわりを覆っていた空気が、瘴気のような重苦しい空気が、少しづつ晴れるように軽くなっていった。

ここは住宅街の中にある、空き地というか小さな公園と言った所だろうか。
住宅街も、時間が経ち、青年が歩みを進めていく度に、ぼんやりとしていた景色のピントが合っていくように見える。
辺りは現実味と実感を取り戻していった。
だが、赤い光はまだまだ一向に消えない。
少しだけ薄くなったとはいえ、不気味な赤い光はまだまだ世界を包んでいた。

青年が歩みを進めると、いつのまのか人通りの多い大きな通りに突き当たった。
視界に入るだけで20人はいるだろうか？子供もいる。
「こんなところで騒ぎは良くないな」
青年は初めて言葉を発した。

騒ぎという事は、まだあの鬼のような怪物が出てくるとでも言うのだろうか、あのようなものがまだ他に居るとでも言うのだろうか。

青年は立ち止まって、ゆっくりと視線を動かす。

何かを探しているようである。
やはりあのような鬼がまだ近くに居るのだろう。
ただ、不思議なことに、この青年からは殺気のような張り詰めた雰囲気は感じられなかった。

すぐにアテが出来たようで、青年は方向を定めると、またゆっくりと歩き始めた。

今度は歩道を右方向に進んで行く。

銀杏の木の街路樹が点々と植えられたレンガ模様の歩道を進んで行くと、大きな廃ビルが左手に見えてきた。

不意に人並みが切れる瞬間があった。
青年は瞬間を見計らってか、しゃがみ込むと、徐に路面に掌を翳す動作をした。

何か納得したようにため息をつき、「今日はこれまでだな」と言ってから、また立ち上がると、ポケットから通信端末を取り出して、近くの駅を探し出し、其処へ向かって歩き始めた。

ついでにメッセージをチェックする。

何通かのメールと、５つばかりメッセージが入っていた。
更に着信記録があった。
留守電にもメッセージが２つ入っていた。
青年は留守電のメッセージは後で確認することにした。

街路樹の脇にベンチがあったので、そこに座ると、メールのチェックをはじめた。

メールはどれも仕事のことばかりで、つまらない内容であった。

青年の仕事は、表向きはライター、で、本業はと言うと、術師と呼ばれる異能集団の一員で先程の鬼のようなモノなどを倒して食い扶持を稼いでいるのだ。

鬼に対しての戦い方や、どうやって倒すのかは術者の個人個人で個性が出るところではある。

青年は格闘術を得意としていた。
体術と呪術を組み合わせて戦って行くのである。

だから、この青年の技は、現代に残るスポーツ武術とは、少し違っている。
呪術や気功とか、そう言ったものを上手く駆使しながら肉体を強化して戦って行くのである。
だから、青年は翌チャクラを回すイメージトレーニングをしたりしていた。
だが、これらの術とは根本的に何かが違っているようである。
これらの術よりも、青年の繰り出す技は禍々しい物のように見受けられる。

だが青年の表情には、そう言った禍々しい雰囲気は微塵も感じ取ることが出来なかった。
恐ろしく厳しい修行の成果か、若しくは青年の持つ気質の様なモノなのかは分からなかった。
恐らくはその二つであると想像できる。

一通のメールに視線が止まった。
件名は、例の件、とだけある。
彼の注意を引いたのは、この件名ではなかった。
差出人。
夜羽　沙都子と記されていたのだ。
沙都子は彼の公私共にするパートナーだった。
要は仕事上のパートナー出あり、恋人とでもいう関係だった。

メールの本文を開いてみる。

神憑　魔太郎君、と、出だしが記されていた。
神憑（かみつき)は、青年の名字で、魔太郎は幼少時代の渾名（あだな）である。
青年の本名は世機（せき）と言うのだが、彼の幼少時代のあだ名を知っているということは、夜羽沙都子（よるはさとこ）と、神憑世機（かみせき）は相当に長いつきあいだということになる。
腐れ縁？

小林陽太郎さんの家だけれど、矢っ張り怪しいみたい。
妖気とか、そう言った気配じゃないけれど、何かが隠れている気がするんだよね。
鬼？

違うな、もっと違う狡猾な知性のある何かよ。
たぶん同業者が仕掛けているんじゃないかな。
もう少し探って見るけれど。

それから、槇（まき）のことだけれど、ありがとう。
彼女も喜んでいたよ。

これが全文である。
小林陽太郎さんと言うのは、神憑達のもう一人のクライアントである。
そして槇と言うのは、夜羽沙都子の妹であると同時に二人の仕事仲間で、夜羽槇の事であった。
槇も沙都子も、まあ、美人という程ではないにしても、それなりの容姿だと神憑は思っていた。
ただ、二人ともに頬から首筋にかけて、大きくて赤い痣があった。
沙都子が右頬で、槇が左側である。
手術で取ってしまえばいいのだろうけれど、この大きな痣が、二人の霊力に大きく関係しているのである。
そう言った類の、マークのような痣であった。
二人ともに体術で鍛えて居るので、スタイルもいいし、それなりに身長だってあるから、顔に痣さえ無ければ、ファッション雑誌の読者モデルくらいには・・・無理かな？
神憑はそんな事を考えながらも、スマートフォンをポケットに仕舞って、帰路を急いだ。

神憑達の裏の仕事は、最近は特に忙しくなっていた。
本業をやっている暇もないくらいに、1日1件は仕事があった。
神憑は本業は技術系のライターをやっていた。
夜羽沙都子はその助手として、いつも神憑の傍に居るものだから、別行動の出来る副業の方を好む傾向にある。

槇の方はネットで手芸教室等を開いて生計をたてていた。

神憑は自分の事務所兼自宅に帰ってきた。
事務所に入ると、そこには夜羽沙都子も来ていた。

神憑（かみつき）が部屋に入ると、夜羽沙都子は小型の冷蔵庫から缶入りのお酒を出して、勝手に飲んでいた。

神憑はなかばあきれ顔で、沙都子に言った。
「まだ5時だぞ？」
酒を飲むには早すぎる時間だとでも言いたいのだろう。
沙都子も十分承知していて、わざと美味しそうに喉を鳴らした。
この女！神憑は微笑した。
こうした掛け合いが、彼の心を救ってくれるのだ。
彼らが術師として生きる人生を選択しなければならなかったのは、人に語るには重く、辛いものであった。

沙都子と神憑はともに同じ歳の同じ月、同じ曜日で、同じ時間帯に生まれたと言う関係性があるのだが、違いは性別と、生まれ落ちた土地が違っていた。

沙都子は、新潟県湯沢という、雪深い土地で生まれた。
神憑も新潟県だったが、長岡というところで生を受けた。
二人の共通点は他にもあり、母親の実家が新潟県の南魚沼市にある八海山の麓に近い村の出身らしいと言う事だった。

“だった”というのはどう言う事かというと、二人ともに一歳の時に両親を事故で亡くしていたのだ。

生まれた土地柄や血筋だけで呪術が出来るようになるわけではない。
だが、二人の母の出生に関わった人物が呪術師だったこともあり、二人の才能を見いだして、引き取り、育て上げたのである。

その人物は二人に自分の事を親と呼ばせる事はせずに、先生と呼ばせていたので、二人は今もその人物のことを、先生と呼んでいる。

その人物、先生、は、別に二人に対して冷たかったわけでもない。
時には可愛がりもしたし、甘えさせてくれることもあった。
なぜ先生は自分の事を親と呼ばせなかったのか。
それは、修行に甘えが出てはいけないという配慮もあった。
それに、先生自身の心情もあった。

先生は女性である。
家庭を持っていた事もあった。
だが、自分が留守の間に凶悪な殺人者に3人の子供を殺されて、それ以来夫とは不

仲になって離婚。
そんな人生を歩んでいたので、子供に対しては特別な感情があったのだろう。
あえて愛情を注ぎすぎることのないように、距離を置くために、自分を先生と呼ばせた。

さらに先生は本名を二人に教えてくれなかった。
術師の世界は複雑で、通り名やペンネームみたいな偽名で呼ばれるのが普通だった。
先生の術士名は稜華（りょうか）である。意味は教えてもらえなかったが、自分で名乗ったのだという事だけは教えてくれた。
多分亡くなった子供の名前にでも由来するのではないかと、沙都子と世機は密かに思っていた。

先生の修行は、二人にとっては辛いことも多かったが、それ以上に楽しいことも多かった。

先ず先生は、理論は後回しにして、実践テクニックをよく教えてくれた。

子供相手なので、その方が二人の興味を引くと思ったのだろう。
更に、呪術ではあるが、呪い殺す技など、暗いイメージのつきまとう術は教えないようにしていた。
人を幸せにする呪法、人のために役に立つ呪法を重点的に教えてくれた。
それと、実戦での体力をつけて、身を守る術を身に付けるという意味もあって、体術を、格闘術を教えてくれた。

この格闘術は、世機にとっては天賦の才を発揮できるまたとないものだった。
沙都子も弱かったわけではないが、男女の体力的な差だけではなく、攻撃や受けに対する発想力で、世機には今一歩及ばなかった。

反対に、術は沙都子の方が筋が良かった。
特に札を使った技が得意であった。

世機は術に関しては、体術を織り交ぜた技を鍛えた。
その方が性格にも合っていたし、自分自身その方が向いているという自覚もあった。

高度な術は沙都子が全て覚えていった。
世機も使えなのではなく、いつも沙都子よりも技の発動が遅れてしまい、いらだたしくも沙都子をうらやむことになる。

二人の修業時代の関係はこんな感じだった。

今は亡き先生を思い出しながら、神憑世機は中をぼんやりと見詰めた。

神憑世機が回顧に浸っていると、缶酎ハイを半分ほど体内に取り込んだ沙都子が、テーブルの上に缶を置いて、手近にあった椅子を引いて座った。

世機は沙都子の襟元からのぞく、まだ張りのある胸元にチラリと視線を走らせたが、すぐに離した。
今はそんな時ではなかった。
沙都子はそれに気が付いて、意地の悪い微笑を浮かべた。

沙都子は女性にしては高身長の175 ㎝はあったが、世機は更にその上の巨漢である。
並んで歩くにはちょうど良い二人である。
二人ともに、モデルをやれるほどにスマートではなかったが、そうかと言って太りすぎと言うほどでは無かった。

沙都子は和装に近いデザインの、変わった衣服を愛用していた。
そう言った服だから、余計に胸元が強調されているのだ。

沙都子曰く、動きやすいのだとか。

術者は人に会う時でも、奇抜な格好を好む傾向にある。

大きくて長い数珠を首に提げているなど、ごく当たり前の姿だった。

二人の先生はスタイルを気にする女性であったために、彼らはそう言ったいかにもと言う格好だけはしなかったが、常人とは変わったスタイルであることは見てわかる。

沙都子は依頼主の小林氏の現状と、自分の調査したかぎりのことを神憑世機に話し始めた。

沙都子は窮屈そうにテーブルから椅子を離して移動させてから、足を組んで神憑から視線を落とした。
そして缶のお酒を少し口に含んで、ゆっくりと飲み込んだ。

「小林さんだけれど、あんな感じの人だけれども、相当にうらまれているようだよ」

神憑世機も夜羽沙都子の話を聞きながら、依頼人の小林氏の顔を思い浮かべた。
とても人の良さそうな人物に見えた。
恨みを買うようなところは見受けられなかった。
だが、沙都子が言うのだから、本当に恨まれているのだろう。

依頼人小林陽太郎（こばやしようたろう）、何があるのやら。

「まず仕事の関係」
沙都子が話し始める。
「小林陽太郎さんは一般企業の一介のサラリーマンだけれども、実は株で財テクして、かなり稼いでいるの」
よくある話だな、と、世機は思った。
「ここまではよくある話。もう一つよくある話なのだけれど、借金の申込みが多数あるの」
それもたしかによくある話。
「ここからがちょっと複雑」
沙都子は間を置くと、意味有りげに微笑む。
このあたりが沙都子の維持の悪いところだ。
世機は沙都子の意地の悪さに、思わず自信もニヤリと顔を歪めた。
次の言葉が予想できたのだ。
そして、こいつ！と思ってしまったのだ。

「借金の申込みはほとんどが同僚や彼の知人なんだけれど、一人だけ違う立場の人がいたの」
やっぱりな、と、世機は腑に落ちた。予想があたった瞬間である。

沙都子は更に間をおいて離し始めた。
「彼の勤める企業の経営陣の一人が、借金を申し込んでいたのよ」
世機は沙都子の言葉には大して驚かなかった。もちろん予想通りだったからである。

「で？」
世機が促す。
沙都子は口をとがらせて、つまらなそうに話を続けた。

「会社のお金を５千万ほど使い込んだらしいのよ」
「それで、補填しきれなくて、借金か」
沙都子は本当に口を曲げてしまった。
「あなたと話していると、本当につまらない！」
今回はオレの勝ちか？と、世機は鼻で笑ってみせた。
沙都子はつまらなそうに、それでも話を続けた。
「いくら財テクで、株で稼いでいる小林さんでも、５千万は流石に大金なので、断ったらしいの。それで、嫌がらせを受けたりしていたらしいのだけれども、それでも応じてくれないので、どうやら同業者を雇ったらしいの」
なるほどな、そういうことか。
世機も納得である。

「で、相手は誰かわかっているの？」
世機は沙都子にたずねた。

沙都子は首を大きく横に降って否定した。
沙都子の調査能力は世機や他の仲間も認めているほどの実力である。
高位の術者が、沙都子に調査を依頼することもあるほどだ。
その沙都子が、相手がわからないというのだ。
世機は不安になると同時に、少しばかり楽しくなってきた。
久しぶりに沙都子に格好いいところを見せられるとか、そういったことではない。
沙都子が苦戦する相手に興味が大きくなったのだ。

「他にもいるんだよね？」
世機は聞いてみた。

沙都子は頷くと、話し始めた。
「同僚というのは女性で、星野よしの、さらに如月純子、これはなんと先の使い込み専務の高橋健吾の愛人なのよ。二人共にね」
相手は一人ってわけか。
世機は単純な構造に拍子抜けしたが、事件が簡単になってよかったと、少しがっかりした。

世機は小林さんの身に起こった出来事を思い返してみた。
立て続けに自動車で事故を起こしてしまい、５度目の事故で人を怪我させることになってしまった。

その事故というのが、たったの２週間で５回である。
さすがに疑いを持って、知り合いの伝で世機たちに連絡を取ってきたのである。

最初は世機たちの組織につながる神社に連絡があったのだ。
そこから世機達のところへ仕事が回ってきたのだ・

世機は沙都子の言葉を待った。

「貴方もご存知だけれども、術者ってのは自己主張の強い人たちばかりでしょ？普通ならば自分がやったという証拠の術なり品物なりを残すはず。ソレがない」
自己主張が強いので、奇抜な格好をしたりするのだ。

「全く痕跡がない？」
世機が聞くと、なぜか沙都子はまた、首を横に振った。
「痕跡がないわけではないと」
「痕跡がないわけではないの。たくさんの痕跡があり過ぎるの」
「どういうこと？」
「５回の事故がそれぞれ呪術の手口が違うの」

小林氏の依頼に関しては、今の所沙都子に任せきりで。世機はノータッチなので、彼女の言うことは気になった。
「５回ともか」
「そう、５回とも」
「５人が関与しているとか」
「ソレも考えられるね」
沙都子は言ってから、足を組み直す。
残念ながら、パンツスタイルなんだよな、と、世機は余計なことを考えながらも、自分なりに考えを巡らせてみた。
5 人が関与しているということは、別々の雇い主が居て、たまたま方法がかち合っただけとか、な？
世機はその考えが、それなりにいい線を突いているのではないかと思った。
沙都子もそのくらいは考えているだろうから、彼もあえて言わないことにする。

「他にそう言うのを雇いそうな相手が見当たらないの」
沙都子にしては珍しいなと、世機は意地悪くにやつく。
沙都子は突っかかりもせずに、世機の態度を無視して何かを考えている様子だ。

世機は乗ってこないのね？と思ったが、今は仕事の話。
じゃれ合いはいつでも楽しめる。
「オレも暇になったし、探ってみるよ」
真面目に答える。
沙都子はお願いするよと言って、残りのお酒を一気に呑んだ。
世機は沙都子に向かって、
「食べて行くんだろ？」
普通逆なんだろうけど、と、世機は思っても口にはしない。
沙都子は世機の言葉を待っていた様子で、視線が頷いている。
世機が料理を作り始めると、沙都子はそのまま座って考えに耽った。

小林陽太郎邸
小林氏は質素な暮らし向きで、とても株で儲けていると言う風体ではなかった。
どちらかと言うと、風采の上がらない普通の親父という出で立ちで、小肥りの体格もあって、優しそうな見てくれである。
そんな小林氏がどうして呪術者に狙われることになったのだろう。

小林氏は、畳の部屋にローテーブルを置いて、テレビを見ながら安いウイスキーを飲んでいた。
甘くない炭酸で割って、ハイボールにしてチビリチビリと飲んでいるのだ。
成金趣味とは程遠い。
酒を飲みながら、片手にはタブレットで、何かを凝視していた。
いったい何を見ているのだろう。
白い筐体に、黒縁の液晶画面の端末である。
小林氏は耳にブルートゥースのイヤホンをはめているところを見ると、動画でも見ているのだろうか。
いったいなんの動画なのか興味のあるところだが、彼の顔から漏れる下卑た笑みから予想すると、あまり褒められた内容では無いのだろう。
動画はやはりその手のものであった。
若い男女が重なりあっている。
女の方はまだかなり年齢が若いように見うけられた。
小林氏の人に言えない趣味の一つなのだろう。

そうした画像を小林氏は凝視していると、タブレットの調子が悪くなったのか、引っ切り

無しに画面をつついたり、スイッチを何回か押してみたりし始めた。
そして突然の大音量でも出てしまったのだろうか、耳にはめたイヤホンを急いで外し、テーブルの上に投げ出した。
タブレットの画面は乱れて、突然ブラックアウトした。
そして音もなく、突然に画面のガラスが割れて、二度と使い物になら無くなってしまった。

小林氏は驚いて、わっ！と大きな声をあげてタブレットを畳の上に落としてしまった。
タブレットは煙を吐き出し始めたので急いでつまみ上げると、台所に持っていくとシンクの中に 投げ入れた。
多少のやけどを負った程度で済んで良かったというべきか。
小林陽太郎にとってはそうではなかった様子で、ひどく怯えた様子で今にも震えだしそうに顔を引きつらせていた。
青ざめた顔で、シンクを見詰めている。

それにしても、タブレットのガラスに罅割れが入るような場合というとどんな原因が考えられるだろう。
煙が出て壊れたということは、熱で割れたのだろうか。
ハードウエアの故障なのだろうが、小林陽太郎氏は違った考えを持っていた。
自分が呪われているということは承知していた。
もちろんそういった思い込みなのかもしれないが、小林氏は思い込みなどとは思っていない。
呪われたと思っているから、神憑世機と夜羽沙都子に依頼したのだ。
二人のことをどうやって知ったのかというと、今の時代意外ではないだろうが、二人は仕事の依頼を、ウエブサイトから受けていた。
二人の属する団体がホームページを設けていて、二人もそのページに名前を出して仕事を受けているのだ。

神憑世機と夜羽沙都子の所属する団体の名前は「全日本呪術者連盟」と言った。
その名のとおりに呪術者の集団だ。
呪術を生業とする旨が、ホームページにも書かれている。
小林陽太郎氏は自身に立て続けに起こった自動車事故を不審に思い、そういったところへ連絡を撮ってみたのだ。
もっとも最初から呪われているなどと思っていたわけではなかったのだ。
最初はもちろん警察に相談に行ったのである。
だが、警察では取り合ってもらえなかった。
さすがの警察も、気質の小林氏が命を狙われているなどとは思わなかったのだ。

それでもやはり恐怖を感じていた小林氏は、ネットを探って神憑たちの所属する組織のページへと行き着いたというわけである。

辺りはもうすっかり暗くなっていて、月も出ていなかった。
小林氏の家のある辺りは中心地から外れた、どちらかといえば田舎の方に属する街であるので、夜も更けてくると人通りもなくなり、本当に静かで暗い世界が覆い尽くす。
小林氏がタブレットから意識を離して席に戻ろうとすると、窓の外が光り、雷鳴が轟いた。
「ひいぃ！」頭を抱えてうずくまる。
別段雷が恐ろしいわけではないのだが、今は精神的に負担が大きいのだろう。
なにかから逃げるように見を低くして、うずくまっている。
三度めの雷鳴が鳴り響いたときに、ザッという音とともに雨が降り注いだ。
小林氏は身を屈めながら自室へと引き籠もり、ベッドへ潜り込んだ。

小林氏は神憑たちに連絡を取るべきかどうか迷っていた。
こんな些細なことで、連絡してもいいものかどうか、呪術師という手合を、今ひとつ信用できていない。
余計な金を請求されるのではないかとか、知られたくないことまで探られてしまうのではないかとか、様々に心配の種は尽きないのだろう。
誰だって、霊能師や呪術師などの得体のしれない者には必要以上に関わり合いになりたくないものだ。
小林氏は悩んだ挙げ句にスマホでメールを贈るだけにとどめた。
そしていつの間にか眠ってしまった。

朝3時。
まだ暗い空に星も瞬いている。
神憑の住んでいる街の辺りだと、この時間は、まだ月の見える時間だ。
雲もなく、辺りは澄んだ空気がまだ春先の冷気をはらんで、肌寒ささえも感じる。
神憑の吐き出す息で、彼のメガネが少し曇る。
吐息はもう白くはないが、まだメガネを曇らせるだけの冷気が包んでいる。

神憑は先生から習った体術の型を一通りやってから、自分の考え出した技の練習をするのが朝の日課となっていた。
3時から1時間半かけて毎日行っている。
彼は普段の格好や言動が軽い印象を与えるが、格闘術や技の練習は高熱でふらついているとき以外はほとんど毎日行っている。
よほど仕事で時間のないときには練習できないこともあるが、それが彼の強さを支えて

いた。
天才など居ないというのが先生の言葉でもある。
神憑もそう思っていた。

夜羽も技の練習に対してはストイックな面があるが、彼女はき6時間以上寝る。
美容のためなんだとか。
そのくせ神憑よりも呪術はうまいのだから、神憑も沙都子にだけは恋愛感情以外の尊敬に近い思いも抱いていた。
だが、彼にもプライドがあるから尾首にも出さなかったが、負けたくないとも思っている。

両手のひらに念をこめて、掌打を放つ。
こういう技の練習は実際に打ち込んだほうがいいのだが、彼ほどになるとイメージだけでもトレーニングになる。
感覚のある人ならば、彼の手が白く見えているはずである。
気の一種なのだろうかと先生に尋ねたことがあったが、先生が言うには呪術師は気を別のものに変質させているのだとか。
神憑は何年も考えてみてはいるが、未だにその意味がよくわからないでいる。
先生からの最後の宿題なのだろうかと思うときもある。
その辺の質問も沙都子に対して行ったこともあるが、沙都子の答えでも神憑は感覚的には理解できずにいた。

トレーニングが終わると、沙都子が顔を出した。
沙都子はフェイスタオルを投げてよこした。
「ご飯作ってよ～」
沙都子の言に世機はおいおいこの女！などと思いつつもいそいそとご飯を作るために戻る支度を始めた。
この辺りが世機の優しさというか人の良さだった。
別に沙都子だってご飯の支度くらいは出来る。
ちょっとした料理などは一通り出来るはずである。
世機が教えたのだから、こなせるようにはなっているはずなのだが、彼女は一向に作ることをしない。
作るのが嫌なのか、本当に世機の作る料理が美味しいと思っているから作らないかは、彼には判断しかねた。
珍しく、可愛らしく微笑む沙都子に、彼は嫌々手を降ってみせた。

世機は部屋へ入ると、まずPCの電源を入れた。

彼の PC は特別性で、自分好みに組み立てたものだった。
世機の凝り性は、ここでも発揮されていた。
彼の本業はライターであるので、とことんキーボードにはこだわっていたし、画像の編集などもするので、ペンタブやその他ツールもそれなりに良いものがつけてあった。
その PC に電源を入れて、メールをチェックする。

いつものDMが 100 通程度と、本題である仕事のメールが 3 通あった。
3 通のうち 1 通は表の仕事のメールであった。
2 通は呪術師としての仕事のメール。
更にその 1 通は連盟からの呼び出しである。
もう１通は小林氏からのメールだった。

小林氏からのメールには、件名などは入っていなかった。
アドレスだけで小林氏からとわかった。
メールには、怖い、とだけあった。
何かあったら連絡をくださいとは言ってあったが、やはり連絡しづらかったのだろうと世機は思った。
それにしても気になるな。後で行ってみよう。
世機はそう思うと、今度は連盟からのメールに目を通した。

連盟からは、神憑や夜羽を管理する、会社で言えば上司とでも言うような、担当係の署名があった。
山田正広という男であるが、実直なだけのつまらない男に見えるが、付き合ってみるとそうではないことがわかる、面白い男である。
山田さんが何だろう？
世機は文字をなぞる。
要件を簡単にまとめると、山田さんは世機たちに小林氏の件から手を引けと言ってきたのだ。

理由はなかった。
とにかくヤバイから手を引けというのである。
山田さんにしては珍しいな、理由もなしなんて、今までになかったのにな。
世機は山田さんに連絡を取るべきだろうなと思った。
PC の時計を見る。
まだ６時にもなっていない。
流石に朝の６時にもなっていない時間に電話とは行かないだろうな。

世機は朝食を作る準備のためにPCの電源を落とした。

沙都子はテーブル脇の椅子に腰掛けて、世機が食事の準備をするのを今か今かと言った様子で待っていた。
世機はフッと笑いながら、こういったところが子供の時から変わっていないなと思った。

沙都子は世機の日課をよく知っている。
食事の準備前にメールのチェックをする癖のあることも、重々承知である。
だからメールについて尋ねた。
「ねぇ、なにか来ていた？」
世機も隠すこともなかったので、答える。
「協会の山田さんからのメールと、小林さんからのメールだよ」
「小林さんなんて？」
「怖いってさ」
「そうか。そうだよね、初めてなんだしね」
「うん」
世機は少し口ごもった。
「山田さんはなんて？」
沙都子は世機の様子に察するものがあったが、それでも確かめたかった。
「山田さんは、小林さんの１件から手を引けってさ」
世機は何事もない様子で答える。
「どうしてよ？」
沙都子は尋ねた。
「理由は書いてなかった。後で聞いてみようと思う」
世機は答えた。
沙都子は少し不審げな表情で、世機を見つめる。
そしてそれ以上は聞かなかった。

世機は話をしながらも手際よく、簡単な朝餉（あさげ）の支度を終えていた。
味噌汁とご飯と漬物だけの質素な朝食だったが、これだけ出来れば大したものだろう。
世機は時間さえあればもっと手の混んだ料理も可能であるが、朝はいつもこんなもので、最も軽く済ませていた。
沙都子は用意された朝食に手を合わせて食べ始めた。
きちんと食べておかないと、今日は長い一日になりそうな予感がした。
世機は今日の予定を頭に中で組み立てると、食事をしながらではあるが、記憶の中にとどめおいた。

沙都子はというと、今日は何も考えずに、世機の支持に従っていれば良い気がしていたので、食事に専念して、終わってから予定を尋ねることにした。
今は食事、二人はゆっくりと食べ始めた。

「夢幻回航」第二話

世機はまず、小林氏に連絡を取ってみた。
なんにせよ、依頼主である。
山田正広に言われても、今はまだ正式に本人から断られたわけではない。

小林陽太郎氏のスマートフォンを何度呼び出しても、応答はなかった。
電話を４回かけ直して４回目のコール音が１５回目で諦めて通話を終了した。
嫌な予感がした。
こういう予感は大概当たるものだ。
世機は確信していた。
小林陽太郎氏に何かあったのだ。
そして最も悪い予感があたっていたとしたら、すでに小林氏の命はないのではないだろうか。
呪術なのだから命のやり取りもあるのだが、今回はなにかいつもと違っていた。
何が違うのか世機にもわからなかったが、違和感のようなものが胸の奥にあった。
その感覚、外れてほしいと思っても、今までも外れたことはない。
夜羽を呼んで支度を済ませると、部屋を出た。

今回は急いでいたのでタクシーを使った。

術者は、特にこの業界に長い世機達のようなベテランは、移動に自家用車を使うことは滅多にない。
世機も沙都子も免許はあった。しかし車は購入していない。
理由はちゃんとある。
それは車に術を仕掛けられた時に命取りになる恐れがあるからだ。
更に術以外で殺されることもありうるから、乗り物は自分のものは使用しないのだ。
殺意のこもった相手から術をかけられたり、殺人のための手段として機械を破壊されたりすると命に関わる。それがベテラン術者の見解である。
それなので、歩いていけるところは歩いてゆくし、電車やバスが利用できるところは利用する。

それにはもう一つ理由があって、人に発見されると効果を失う術もあるから、人目につくほうが呪術で狙われにくいのだ。
こういった細かい注意点が、鬼のような存在は別として、術者同士の戦いでは重要になってくるのだ。
だから術者はひと目を避けて術をかけるし、防御のために人目のあるところを好んだ。
世機も沙都子もそのことは先生から教わっていたので、しっかりと守っていた。
もちろん槇もそれは守っている。

それは一見人を盾にする行為のように見えるが、人が多く集まるようなところでは効力を発揮できない術も多いのだ。
だから一概に人を盾にしているとは言い難いのだと、世機たちの先生は教えていた。
世機は疑いを持たなかったわけではないが、先生の言うことは実践している。

タクシーは沙都子が電話で呼んでくれた。
自宅の前に来たのは、世機たちがよく使う会社のものだった。
オーソドックスな中型のタクシーであった。
体の大きめな世機と沙都子が乗ると、後部の座席は一杯になった。
二人が乗り込んで、ドアが閉まると車は軽快なエンジン音を立てて走り出した。

沙都子はタクシーの座席で、１５センチ四方ほどの大きさの木の板を取り出した。
沙都子の服には大きな隠しポケットがあって、いつも道具を３個ほど隠し持っていたが、そのうちの一つを手に取ったのだ。
この一見するとただの木の板だが、どのような効能効果があるのだろう。
当然ながら世機にはわかっていた。
この木の板は、本当にただの木の板だったが、沙都子が集中するのに必要なアイテムなのだ。
沙都子は集中力を高める時にこの板を使う。
この木の板に特別ないわれでもあるわけではなく、沙都子には必要だというだけである。

この１５センチ四方の木目の板は、子供の頃に世機が沙都子と遊ぶのに使っていたものである。
世機と沙都子と槇は特殊な環境で育ったのもあって、子供の頃に子供らしいゲームなどで遊んだことはなく、呪術のトレーニングが遊びのようなものであった。
沙都子が集中を欠いて練習にならないスランプに陥った時に、集中力を高められるアイテムとして、世機が沙都子にこの板に念を込めてみたらいいと手近にあったものを渡したのだ。

この板はもともと日本人形の固定台だった。
世機が近くにあった人形の台を外して沙都子に渡したのだ。
世機はその板を見て、当時のことを思い出した。
こんなものしかやれない自分を情けなく思ったものだ、と。

沙都子が集中に入った。
そして沙都子の口から言葉が出てくる。
「準備して」
世機にはなんのことかわからなかったが、準備とは戦う準備かなと予想できた。
手にできる武器はポケットに念をこめた木の棒しかない。
世機は体術に呪術をこめて相手を払うので、札のようなものは持ち合わせていない。
戦闘準備は常にその身一つ。
世機も体中の気を高める。
オーラの見える人がいたら、世機の周りにエネルギーの膜が燃え上がるのが見えるはずである。
もちろん沙都子の周りにもエネルギーの炎がまとわりついている。
「来る！」
沙都子が叫んだ。
世機は車を止めるように言った。
タクシーが路肩に寄って止まる。
辺りを確認してドアを開けて、二人は外へ出た。

タクシー会社と契約しているので、料金は後で連盟を通して送られてくる。
二人は物陰へと走り出す。
タクシーはというと、二人の仕事をわかっている運転手なので、もうその場を離れていた。
相変わらず早いな、と、世機は思った。

辺りに人気はなかった。
タクシーに乗っている時に違和感があったから、おそらくは結界術でも使っているのだろう。
人払い。
基本的な技だが、これがやれないと戦えない。
なんせ、人に見られただけで効力をなくしてしまう術が多いのだ。
当然神憑や夜羽にとっても具合がいい。
相手が術を維持してくれる。

ただし結界術は術をかけた方に有利にはたらく。
相手の技が少しだけ強くなったり、こちらの技が少しだけ弱くなったりする。
だが、術を維持する体力が、気力が必要になる。どっちもどっち、神憑や夜羽ほどになると、さほどの苦にならないのだ。

世機は辺りにレーダーのように気を飛ばしてみる。
２人、いや、３人か？
異質な気配が２つ。
異質な気配の正体はだいたいわかっていた。
多分だが、連盟が鬼と呼んでいる奴らである。
そしてもう一つが術者本人。

「どうする？」
夜羽が言う。
彼女も敵の正体に気がついたようである。
「どっちを先にしようかな」
楽しんでいるような口調だが、声は少し緊張しているようだった。

「オレが２体やる」
世機は、やれるかなと思いながらも、現状で最良と思われる選択を口にした。
「たのむ」
夜羽も頷く。
世機はため息をついて両腕と両足に気合をこめた。

夜羽が敵の術者に念を飛ばす前に、向こうから先制攻撃があった。
沙都子はそれを片手で弾いてみせた。
弾いた攻撃が、２ついるうちの鬼の片方に中たる。
世機はさすが！という感嘆の声を上げる前に、その攻撃を合図に飛び出していた。

１６メートルの距離を、どうやってか、たったの７歩で詰め寄る。
相手も人間ではないが、こちらも人間業ではない。
攻撃を受けた方の鬼、左側の、呪術者のいる方向に近い方の鬼を蹴りつける。
開戦時の判定は五分と言ったところか。
鬼は世機の攻撃を咄嗟にガードはしたが、衝撃で１メートル後方に押し下げられた。
鬼の攻撃。
鬼は世機に向かって左足をロウ気味に素早く放つ。

世機はヒラリと飛び上がる。
格闘の基本からすれば、空中戦などあまり褒められたものではないが、相手は鬼である。
一撃でもくらえば致命傷は必至だ。
それに世機は次の一撃を狙っていた。
飛んだ瞬間に身を捩って、鬼の顔面に右足の踵を打ち下ろす。
更に顔面を踏み台にして上方へ飛び、落下の衝撃を利用しつつ体重を載せて思い切り踏みつける。
これにはさすがに鬼もたまらずに仰け反る。
鬼の鼻から血のようなものが流れ出る。

沙都子の方も戦闘開始していたが、こちらは攻められていた。
相手は札に載せた念を飛ばしてくるようだ。
呪符を使うのである。
沙都子も相手の攻撃は受けずに躱すようにしていたが、相手の攻撃は沙都子の想定よりも早かった。
攻撃を繰り出す手が早く、沙都子が攻撃を繰り出しても避けるのが非常にうまい。

沙都子はチラリと世機の方を見た。
善戦している様子を見て、悔しさがこみ上げてきたが、そんな感情に心を揺すぶられる暇すら与えてはもらえなかった。
「よそ見ですか」
敵の術者の声、女！沙都子は少し驚いた。
気配が男に近いと思っていたのだが、声が女っぽい。
「わたしが女だからってなんですか」
この術者、思考が読めるのかな。
沙都子はそうだったら厄介だなと考えながら札を投げつける。
負けられないな。
沙都子はすっくと立ち上がる。
「来な！わたしの方がいい女だってわからせてあげる」
相手の術者も挑発に答えてきた。
「ほざけ！ドブス！」
沙都子から仕掛けた。
相手はサラリと避けると、斜に構えた。いわゆるパニ立ちだ。
「ドブス！名乗ってあげる！よく覚えときな！」
「里神翔子だ。鈍い頭に叩き込んどきなよ」

里神翔子（さとがみしょうこ）という名前に、沙都子は聞き覚えがあった。
沙都子の考えが合っていれば、この女には二つ名がある。
つまりそれほどの手練だ。

里神翔子、二つ名は黒鉛龍の翔子という。
呪術で国家転覆を狙ったとか、ある国の軍事政権打倒に力を貸しているとか、とにかく政治的な活動をやる呪術活動家、とにかく裏の世界での超有名人だ。
沙都子と同じ年くらいに見える。
「もし本人なら、相手にとって不足なしだな」
沙都子は里神に向かって言う。
「残念ながら本人だよ、あんたの最後の相手だ」
「やってみたかったんだよね、あんたとは」
沙都子は相手を睨み据えてフッと微笑む。
沙都子の表情を見て、里神も微笑む。
「良いね、久しぶりだよ、オレの名前を聞いても怯まない相手はね」
里神も沙都子を見据える。
「名前、聞いてやる。あんたにとって最後の相手だけどね！」
沙都子は更にひどい微笑みを引きつらせて口を半開きにする。
「夜羽沙都子！冥土に行くのに覚えとけよ」
印を素早く組んで札を飛ばす。
思い切りの本気で念を込めた。
里神は身を躱すが、札はホーミングミサイルのように後を追いかけて飛んでゆく。
里神が躱すたびにスルスルと追いかけてゆく。
逃げ切れない！
里神は思ったが、態度にも口にも出さなかった。
思い切り掌に念を込めて札を打ち据える。
掌がしびれるくらいに痛かった。
里神は少し顔を歪めた。里神翔子はそれが悔しかった。

沙都子はそれを見て、息を荒く吐き出して笑った。
「やれそうとか思ってないだろうね」
里神は言ってから、沙都子と同じ術を連発一度に放った。
10 枚の札が大きく弧を描きながら四方八方から沙都子を目指して飛び交う。
沙都子は右へ左へと飛び回り、跳ね回って札を躱してゆく。
体を使って受けたら、確実にダメージが来ることは想像できた。
体の一部に触れれば、一気に念が流れ込んでくるタイプの攻撃であることが、沙都子

には想像できた。
沙都子はポケットから札を適当に掴んだ。
攻撃を躱しながら枚数を見ると8枚あった。
沙都子はその3枚に念を込めて、狙いをつけて放つ。
ヒラヒラと札が舞い、一枚が相手の札の一枚に中って弾けた。
沙都子はニヤリと笑う。
残りの2枚が一度に各1枚ずつ、相手の札2枚に中たる。
同時に弾け飛ぶ。
更に適当にポケットから札を取り出す。
枚数を見て舌打ちする。
4枚！
沙都子はまた同じように投げる。
今度は立て続けに中たる。
里神はその様子を見ていて、全てかわされる前に5枚ほど追加を放った。
当然放ってから自分の位置を移動する。
「クソッ」
沙都子は唸って、近くの壁を蹴り上げて、建物から出た突起物、パイプなどを掴んで一気に天井まで駆け上がる。
そして壁を蹴り、一気に里神に近づく。

里神の札が沙都子の足元近くに迫る。
沙都子は足に念を込めて、ふわりと体重を乗せる。
バランスを取り、さらに札を蹴り、上に飛ぶ。

「どうした？」
里神が叫ぶ。
里神翔子の札が1点に集まり、沙都子の足元へ狙いをつける。
来た！
沙都子は足に念を集中させて札を一気に踏みつけた。
さらにポケットから札を何枚か取り出して、里神の方へ投げる。
里神翔子はスキを突かれた形となって、防御が遅れてしまった。
沙都子の手から放たれた札は4枚。
うち2枚は弾かれたが、残りはすべて里神翔子にヒットした。
思わず里神が仰け反る。
右腕から血しぶきが上がり、苦い表情を浮かべる。
里神の動きが止まった。

どちらか先に動いたほうがやられる。
そういった気配が3人を包んだ。
2人は睨み合ったまま動けなくなってしまった。

一方神憑世機と鬼2人の攻防である。
鬼は連携攻撃を仕掛けてくる。
一撃をくらっては消し飛ぶ程度の防御力の人間には、躱すだけでも命がけである。
世機は大きく躱しながらも、鬼の一方だけを削ってゆく。
だがやはり限界が来たか。
鬼が放った一撃が中ってしまった。
鬼の繰り出す右腕の一撃に、念を送って対処するのが精一杯の抵抗だった。
鬼の右手を吹き飛ばす代わりに、自分はダメージを喰らってしまった。
チラリと沙都子の方を見る。
あちらも余裕なしか。
仕方がない。
世機はこれだけは使いたくないと思っていた最後の一撃を放った。
鬼二体に向けて同時に渾身の念を放ったのだ。

鬼の心臓が破裂し、神憑は膝を折った。
神憑世機の呼吸はもう限界だった。
ただ、鬼は時間が経てば回復してくる。
万事休すかと思ったその時に、突然に結界が晴れた。

「これまでか」
里神翔子が呟いた。
「夜羽沙都子と言ったか、覚えておくよ」
言い残して、里神翔子は姿を隠した。
２体の鬼も同時に消えた。

「辛勝ってところかしら？」
沙都子の評価に、世機は苦笑いしかできなかった。

神憑世機の体調はしばらくは治りそうもなかった。
沙都子はどこかに待機している先程のタクシーを呼び戻した。
このタクシーは全日本呪術師連盟の系列企業が経営している会社のもので、こういった術師の事情に詳しいスタッフによって運営されていた。

だから連盟の者はこの会社をよく使った。
この会社のタクシーには、連盟の者が霊的な手傷を負ったときの治療キットなどが積まれている。
車が来てくれるのを待って、沙都子は世機の手当をした。
沙都子の方は大した怪我ではなかったので、治療などはぜずに済ませた。

小林氏の家に着くまでに20分ほどかかったが、その間に襲われることはなかった。
敵もあきらめたわけではないからまた来るだろうなと、沙都子も世機も思っていた。
それにしても手強い相手だった。
あのような手合いが何人も居るのか、それとも彼女だけで、後は有象無象なのかそれさえもわかっていないのだから、最悪の事態を想定しておかなければならない。
最悪の事態。全員が強敵であると言うこと。

沙都子は頭を降った。嫌な考えを弾き飛ばそうと思って取った行動だった。
神憑の方を見ると、こちらは怪我のせいばかりではなく、ほんの少しだけ沈み込んだ様子である。
神憑世機は次に今日の敵と出会ったときのために頭の中でシミュレーションを繰り返していた。
根っからの格闘馬鹿であるから、負けたというよりも勝てなかったのが悔しかったのだろう。
そのために先程から黙り込んでいて、沙都子には落ち込んでいるように見えたのだろう。
沙都子も世機の様子から察したのか、頬って置くことにした。
今は自分の考えに集中した。

里神翔子、呪術を使ってテロリストや半政府組織などを支援する、裏世界の有名人だ。
なぜたかだか一市民でしかない小林さんのトラブルに関わってくるのか？
単純に、ただ雇われただけなのか？
小林さんに政治的な背景でもあるのかな、それとも、借金を申し込んだ中にそういったものにつながるものがいるのだろうか。
いくら考えてもわからなかった。
まだ何も見えていない。
何もピースが揃っていない。
事件を読み解くための材料が、決定的に不足している。
まだ何もわかっていない。
気をつけなければ命取りになる。
山田正広がこの事件から手を引け、関わるなというのはそういうことかと沙都子は思っ

た。

世機とわたしだけでは手に余るということか。
沙都子はその考えに達して悔しさと、それとは別のなんとも言えない複雑な感情が湧いてきた。
やれるかな？沙都子はこの事件からは、離れたくても離れられない、関わりたくなくても関わらないわけには行かない因縁のようなものを感じていた。
抜けたくてしかたがないと思う危機感を感じていたが、また、何かの力で引きずり込まれるような、霊的な因縁があるとも思っている。
世機はどう思っているのだろうか。
世機ならどうする。
今考えても仕方がない、とりあえずは小林さんのところへ行ってみてからだ。
それにここで襲ってきたということは、すでに小林氏の安否も怪しいものだ。
世機が何度か電話をしているようだが、小林氏とはまだ連絡が取れないようだ。
考えれば考えるほどに不安材料が増えるばかりだ。
沙都子は拭いきれない不安を追い払おうとしてか、顔を両手でパンと一回叩いて気合を入れ直した。
そして世機を見てから、タクシーの運転席に視線を移す。
頭の中の考えを、リセットするつもりで追い出してみる。
瞑想とまでは行かないが、沙都子の思考方法である。
ゆっくりと深呼吸をし、気持ちを落ち着かせて頭の中身をクリアにしてゆく。
焦ってポカをやったら命取りになる。沙都子はそういった事件に巻き込まれてしまったことを感覚的に理解して、もう少し注意してかからないといかないと、改めて思った。
世機の意見が聞きたかったが、彼の様子を見て、今早めたほうが良いのではないかと思ったので、口に出すことはしなかった。

思考がまとまらないうちに、タクシーは目的地に着いてしまった。
沙都子と世機が車から出ると、運転手は「待っていますよ」と言って声をかけて来た。
世機は「ああ、頼みます」と答えると、辺りを見回す。
閑静な住宅街と言ったところだが、都会のそれと違って、高級な住宅地というわけではない。
沙都子は大きく伸びをして、縮こまったからだと精神を解そうとした。
世機は首を鳴らして、肩を回したりした。

世機と沙都子は小林陽太郎さんの家の前にいた。
家にはその家特有の精気のようなものがある。

住んでいる人や動物、草木などが発する気が溜まり、そのような雰囲気を作り出すのだ。
前に世機と沙都子が来たときよりも精気が無いように感じられた。
もっとあたたかい雰囲気に包まれた家だったはずだ。
嫌な予感が当たったかなと世機は直感した。
沙都子も顔を曇らせて、眉間に眉を寄せる。

世機は玄関の前に行くと、ドアを確認してから呼び出しベルを押した。
ドアの鍵は掛かっていなかった。
合間をおいて何回かベルを押したが、中から声がしたり、人が出てくる気配すらなかった。
ドアを開けて中へ踏み込んだ。

玄関は物も少なく、綺麗に整理されていた。
靴などは置いてなかったから、仕舞ってあるのだろう。
普通の日本家屋だ。
玄関の先は廊下になっていて、正面に障子張りの引戸があった。
廊下も綺麗に整理されていたから、これだけでも小林氏の几帳面さが伺えた。
それにしても何かあったのならばもう少し荒らされていても良いのではないだろうか。
だが、呪術による呪殺ならば、周りに影響を与えずに綺麗なままで殺せる。

今度は沙都子が声を掛けてみた。
だがやはり反応はなかった。
靴を脱いで中へ上がり込む。
まずは世機が廊下へと上がる。
すぐに障子戸を開けてみた。
テーブルに焼酎の瓶が出ていた。
中身はまだ半分ほどあって、蓋が閉まっていた。
その脇にグラスがあって、その中身は殻だったが、使われた後がある。
小林氏はここで酒でも飲んでいたのだろう。

沙都子が台所へと向かった。
ここも綺麗に整理されていた。
とても男の一人暮らしとは思えなかった。
シンクに壊れたタブレットが投げ込まれていた。
焦げて外装が溶けているように見える。

沙都子でなくても不審に思うだろう。
これが媒介になって呪いが発動したのか。
だが、怪しいと思っても呪術の痕跡は感じることが出来なかった。
最近はこの手のアイテムにハッキングを掛けて、催眠暗示やそういった仕掛けを使った、呪術とはまた違った手段を使う殺し屋のような術者も増えていると聞く。
沙都子はタブレットの残骸をつまみ上げてよく調べてみる。

世機はと言うと、ほかの部屋を捜索しようとしていた。
先ずは居間の隣りで台所とは違う方向の引き戸を開け放った。
やはりきちんと整理された部屋であった。
世機の開けた引き戸は、寝室の入り口だった。
部屋の角にパソコンデスクとベッドが置かれている。8畳間には少々邪魔な気がする。
ベッドの上には毛布があり、人が寝ているように形が浮かんでいた。
世機は毛布を捲って中を確認した。

世機が毛布をめくると、凄まじい腐乱臭が部屋中に立ち込めた。
「なにコレ」
沙都子がいつの間にか世機の近くへ来ていて、悪臭に苦情を言う。
「たぶん小林さん」
世機もさすがに顔をしかめる。
死体を見ると、肉は溶け腐り、骨が見えていた。

連絡が取れなくなったのは昨日だ。
小林さんから電話が来たのが昨日。
小林さんは昨日の電話をかけてきてから今現在までの時間のあいだに殺された事になる。
それにしてもこの腐乱状態になるには、真夏で1週間は掛かるのではないだろうか。
身体を腐らせながら死に至らしめる呪術か。
だが、死体を腐らせる事に意味があるのだろうか。
世機も沙都子もこのよく掴めない状況を理解するために頭をフル回転させながら、何か呪術的な痕跡でも残っていないかと、辺りを探し回った。
手掛かりと言えそうなものは壊れたタブレット端末だけのようだった。
だが、沙都子も世機も諦めきれずに２階の部屋までくまなく捜索した。
しかし、なにも見つからなかった。

沙都子は台所へ戻ると、壊れたタブレット端末を手持ちの透明な袋に入れて持ち帰る

ことにした。
そして警察へと連絡を入れた。
沙都子達の所属する全日本呪術師連盟は警察組織とのつながりはないが、仕事の度に死体が出てしまうこともあるので、顔見知りの警官くらいはいる。
沙都子や世機にもそう言った間柄の警官は居た。
だが、事件現場で声をかけられる事はあっても、それ以上の仲にはならなかった。
よく会うねと疑わしい目で見られるのが関の山である。

しかし事件を知らせないわけにも行かないので、電話をした。
この場からそっと逃げ出すという選択肢はなかった。
後から死体が見つかって、二人のことを目撃した者でも現れれば、妙な嫌疑を掛けられかねないのだ。
したがって、死体をそのままにして逃げ出すわけにも行かないのだ。
沙都子は警察が来る前に壊れたタブレット端末を入れた袋を、タクシーの中へ置いてきた。

暫くすると、パトカーが２台と黒塗りの、おそらく覆面パトカーが１台サイレンも鳴らすことなくやってきた。
それと警察の紋章入りのシルバーグレイのバンが１台。
パトカーからは制服の警官が２人ずつドアを開けて出てきた。
黒塗りの覆面パトカーからは背広姿の男が３人と、シルバーグレイのバンからは別の制服というか作業服姿の男女が６人降りた。

背広姿のうち、背の高い方が神憑たちに近付いてきた。
私服警官はあまり目立たないシックな色の服を好む。
この男も、そしてもう１人もそういった色合いの服を羽織っていた。
「またあんたか？」
背の高い方の男は、世機を見ると言った。
「お久しぶりですね、高田さん」
世機は高田を見据えて言う。
高田と世機は同程度の身長で体格をしていた。
筋肉の着き方はどうか。
世機の方が少ししまって見える。
それに肩幅が広かったが、骨格が似ているのだろ、並んでみるとよくわかった。
世機は高田に死体発見の経緯を語った。
もちろん仕事のことはほんの少しぼかした状態で伝えた。

自分たちが呪術師だなんて言ったら、それこそいろいろ突っ込まれて面倒なことになる。

事情聴取には40分ほどかかった。
終わったら2人は開放された。
連絡先は聞かれなかった。
なぜならば、すでに高田たちが連絡先を知っていたからだ。
この高田という警察官と、相棒の哀川という警察官とは仕事現場でよく顔を合わせた。
だがしかしそれだけだった。
あまり警察官とは深い関係にはならないというのが世機や沙都子の関わり方だった。

それでも世機と沙都子は捜査状況が気になったので、しばらく居てみることにした。
警察が自分たちの見落とした何かを発見するのではないかと思ったからだ。
だが警察が何かを発見しても、自分たちに教えてくれるとは限らないわけだが、それでもなにかわかるかもしれないという淡い期待を込めて、しばらく成り行きを見守っていた。

「なんにもないみたい」
沙都子が呟いたのは、捜査もあらかた終わり、捜査員が引き上げ始めた時だった。
世機は期待が外れたのに、気分が落ち込むことはなかった。
むしろかえってやる気が出てきた。
証拠と言えるものは沙都子が隠してしまったタブレットだけか。
死体の状態をスマホに撮影しておかなかったのは世機の手落ちだったが、死体の状態を見ただけで呪殺だというのはわかる。
亡くなってから1日足らずであれだけの腐乱状態になっているのだ。
真夏の暑いに日だってこうはならない。
問題はどんな術を使ったのか。
世機は肩を回し、軽くストレッチをしながら、今まで待っていてくれたタクシーに乗った。

珍しくタクシーの運転手が世機と沙都子に話しかけてきた。
ボックスから取り出した缶コーヒーを2人に1本ずつ渡してから話し始めた。
「お疲れ様です」
運転手の声を聞いた時に、てっきり男だとばかり思っていた観察眼のなさを、世機と沙都子は思い知った。
「ああ、ありがとうございます」
「ありがとうございます」
2人は缶コーヒーを受け取りながらお礼を言った。

コーヒーの銘柄は2人のお気に入りのメーカーのものだった。
狙って？
まさかな、と2人は思った。
そんなに気を使う間柄でもない。
だがこの運転手はそう思っていなかったようだ。
2人の好みを把握して、缶コーヒーを用意していたのだ。
「今日はお二人の仕事だというので、無理に組み入れてもらったのです」
沙都子も世機も、あらためてこの運転手が女性だということを認識した。

「どうして？」
沙都子が尋ねる。
「実はわたし、術師見習いなんですよ。このタクシー会社のバイトなら、術師の仕事を見ることが出来るかなって思ってやっていました。今日は偶然2人の仕事があるって知ってお願いしてお２人の運転手に立候補しました」
運転手の顔が少しだけ赤らんでいるのが分かった。
照れているんもだろう。
まだ二十五歳前後というところか。
おそらく３０にはなっていまい。
その年にしてまだあどけなさの残るいい笑顔を向けてくる。
術師になろうというものは人生に挫折し、かなりねじ曲がった性格のものが多い。
壮絶な生活を送ってきたものが多いのだ。
それなのに、かわいい笑顔だな、と、世機も沙都子も思った。

人生がねじ曲がりすぎて真っ直ぐになったか。
それとも上っ面だけのものなのか。
世機や沙都子には推し量れなかったが、彼女の笑顔には暗い部分を感じなかった。
強靭な、前向きな精神力の持ち主なのかもしれない。
「お名前はなんていうの」
沙都子は楽しそうに話しかける。
雰囲気が似ているような・・・
世機は２人を見て、緊張感が少し薄れていくのを感じた。
霊的な予感とでもいうか、この運転手とは長い付き合いになりそうだと、世機は直感した。

「吉住猶（よしずみなお）って言います。よろしくお願いいたします」
吉住はこちらを振り返り、軽く頭を下げた。

「よろしくね」
沙都子も微笑みを返す。
「今日はどうでした」
遠慮気味に吉住猶が沙都子に聞く。
沙都子はどこまで話して良いものかと思ったが、少しだけならとそう思って話すことにした。
普段ならばごまかして、話をはぐらかすなどしてしまうところなのだが、この吉住猶という人物には変な魅力が有った。
ひょっとしたら沙都子は親心でも出して世話をしたくなったのかもしれない。
「呪殺の証拠らしいのはこの壊れた端末だけ」
吉住猶は沙都子が持ってきた時からその残骸を観察していた。
吉住にも呪殺の気配はわかるはずもなかったが、彼女は電子機器には多大な興味が有った。
「良ければわたしにその残骸を任せてもらえませんか、知り合いに修理屋がいるのですが、なにかわかるかも知れないです」
沙都子と世機は唐突な彼女の提案に少しだけ戸惑った。
彼女の事をどこまで信用したら良いのか判断できなかった。

世機が迷っていると、沙都子は彼女に対する考えを決めたらしい。
「貴方のことをすぐに信用できないの」
沙都子が言うと、吉住猶の表情は曇った。
「そんなに落ち込まないで」
そう言ってコーヒーを口にした。
吉住猶は下を向いて黙り込んだ。
「落ち込まないでって言ったよね？」
沙都子の言葉に吉住は顔を上げた。
沙都子はスマホを手に取ると、差し出す。
「連絡先の交換」
吉住は「え！」と言って驚き戸惑った。
沙都子は「さ、早く」と促した。
吉住もスマホを取り出して、相手のスマホに翳した。
画面を触ると、ピッと音がして、互いのプロフィールの交換が終わった。
「次の休みはいつなの？遊びに来ればいい」
沙都子の言葉に、吉住の表情が明るくなった。
「いいんですか？」
「いいけど、事務所にいないかも知れないから、電話してからにして」

沙都子の考えていることはよく理解できた。
世機はそう思った。
おそらくこの後輩を気に入って、指導でもしてやろうとかそういうことなのだろう。
「わかりました」
吉住猶は嬉しそうに返事をして、車をスタートさせた。

全日本呪術師連盟の事務所に着くまでの間に、吉住猶と夜羽沙都子はずっと話していた。
だが流石に沙都子は事件のことについてはあまり話さなかった。
当たり障りのないところを話したに過ぎない。
それでも猶はよく沙都子の言葉に耳を傾け、自分なりの意見を言ったりした。
いい弟子が出来たように見える。世機は二人を見ていてそう思った。
目的地に着いたので、車は止まった。
吉住猶は窓を開けて手を振る。
沙都子も軽く手を振ってやると、「じゃあ」と言って去って行った。

全日本呪術師連盟の事務所は14階建てのビルの最上階にあった。
沙都子は階段を使ってゆくと言って聞かなかったが、時間がないので世機は沙都子をエレベーターに押し込んだ。
そして最上階のボタンを押した。

最上階、フロアの全てが呪術師連盟のものだった。
事務的なことをやる区画と、呪術師の勉強のための資料室などがあった。
呪術師になるための認定試験もここで行われる。
呪術師になれる素養を持った人間はそう多くはない。
その中で呪術師になろうというものは更に少ない。
毎年試験は行われるが、受験者は３～４人くらいが平均的な数だった。
沙都子と世機の時は特別に人数が多かったのだと、先生から聞いたことがある。
あのときは20人位居たな、と、世機は昔を思い出していた。
こんなことを思い出したのは、あの猶という呪術師見習いの影響だろうか。
沙都子と世機は全日本呪術師連盟と書かれたガラスの自動ドアの前に立っていた。

「なんかここに来るとさ」
沙都子が言った。なんだか顔つきが引きつったように見えるのは、機のせいばかりではないようだ。
「なんかここへ来ると、いつも怒られてばかりいる気がする」

沙都子の表情を見ていると、世機は吹き出してしまった。
「お前がいつもやんちゃをするからな」
「どういう意味」
沙都子は少々殺気を孕んだ目付きで世機を睨んだ。

ドアを入ったところの受付で挨拶する2人は勝手に奥へ入っていった。
担当の山田正広の居る場所はわかっている。
事務区画は一般の会社よりも更に整然としていた。
荒事になることの多い業界であるから、事務所も戦闘に巻き込まれる事もある。
だから、いつも戦いやすいように余計なものを整理しておくのだ。
仕事のやりやすさとか、資料を整理しておくとかそういった事務的なことではなく、戦闘のための備えである。
更に事務員も、実践要員ではない低クラスの術者たちである。
そこかしこに武器というか呪術のための得意の柄モノを隠し持っていた。
まるでヤクザの事務所、口の悪い沙都子などはそう言っていたが、武闘派集団であることは否めない。

何人居るのだろう。
正確な人数は確かめたことはないが、70人位は居そうだなと、世機は思っている。
だが、驚くべきことに、武闘派集団であるこの団体の事務系職員の半数が女性であるように見えた。
もちろん呪術者にも女性が多い。
これは女性の方が呪術師としての適性があることが多いからだが、どうして女性の方が適正がいいのかわからないのである。
陰陽の関係とかいろいろと言われているが、実のところよくわかっていないのだ。
世機や沙都子の先生のそのまた師匠も女であったらしい。
呪術に関しては世機よりも沙都子のほうが適性はあるのだ。
世機が戦闘力に特化した体術を織り交ぜた技を突き詰めてきたのも、偏に沙都子の才能に叶わないと思ったためでもあった。
世機はプライドのある戦士であるから、才能に直面したときに味わった挫折を忘れたわけではない。
世機は沙都子を超えるための訓練は怠らなかったし、これからもそうなのだろう。
だがそれと男女の関係は別なのかも知れない。
沙都子と世機は実に中の良いいいコンビである。
ここに来るとあまりいい思いはないな、世機は思う。
思いながらも山田正広のところへ向かった。

山田は椅子に腰掛けて、机の上に置かれた4 個ある携帯電話のうちの一つを使って話をしていた。
年齢的には2 人と同程度で、体格は柔道でもやっていそうな体つきである。
よれた背広によれたネクタイ、だがしかし不潔さやだらしなさを感じさせない不思議な男である。
山田がなんの話をしているのかはわからなかったが、いつもの調子で唾が飛ぶくらいの勢いで怒鳴っていた。
怒鳴っていたわけではなく、普通に話しているのだが、端から見ると怒鳴っているように見えるのである。
山田本人はそのように言っているが、世機や沙都子は怒鳴っているだろうって心の中でいつも思っているのだ。

山田は2 人に気がついた。
「休憩室で待っていてくれ」
と言って、あっちへ行けと手を振って2 人を追い払う。
休憩室と言っても、きちんとした部屋になっているわけではない。
フロアの角に自動販売機が2 台あり、その脇に長いすが置かれていて、仕切りで区切られた一角が休憩室であった。

休憩所だろう？沙都子は思いながらも、自販機で世機の分の缶コーヒーも一緒に購入した。
自販機は珍しくルーレット付きのものである。
2 本目の缶コーヒーを購入したときに、音がして、ルーレットが当たった事を知らせてくる。
「ラッキー」
沙都子は喜びながらも、余計な1 本をどこに仕舞っておこうかと考えているときに山田がやってきた。
山田は「ありがとう」と言って、沙都子の手からおまけの1 本を取り上げた。
「やまだ～」
沙都子は言ったが、おまけの缶コーヒーが惜しかったわけではない。
スキンシップとでもいうか、山田の性格的なところもある。
この男は誰とでも仲良くなれるタイプの、交渉役としてはうってつけの人材。
沙都子や世機との仲も良好で、なんでも話せる間柄、良きチームといったところか。

「山田さん、小林さんが殺された」

世機が言った。
そういえば電話連絡は入れていなかったな。猶との話に夢中で、すっかり忘れていた。
怒鳴られるかとも思ったが、山田は「そうか」と言っただけだった。
先程の経緯を、世機の方から山田に報告した。

「夢幻回航」第三話

「なるほどな」
山田は沙都子から奪った缶コーヒーに口をつけた。
世機は今までの事件の経緯と、里神翔子が相手の中にいることを話した。
「里神翔子か、札付きじゃないか」
さすがの山田も驚いて、コーヒーの缶を落としそうになる。
里神とはそういう術者である。
「山田さんは手を引けって」
沙都子が山田に切り出す。
「ああ、なにか呪術者協会の方から依頼が有ったらしい」
山田は言った。
「協会絡みですか」
世機は、呪術者協会の事を思い出していた。
協会は、世機の属する連盟とは別の団体である。敵対しているわけではないが、それほど中が良いわけではない。

「何て言ってきたの？」
と、沙都子である。
「興味有るなぁ」
と、こちらは世機である。
「いやぁ何て事はない。仕事のじゃまをするな、とか」
山田は答えた。
「なんだいそれは」
世機は至って普通の反応で、大して驚きもしない。
詳しい理由は山田にも聞かされていないのだろう。
「納得できないな」
沙都子は足を組んでふんぞり返る。
鼻息が荒いな、と、神憑世機は下を向いてプッと吹き出す。
人が亡くなっているのに不謹慎と思われるかも知れない。

こう言った仕事をしていると、感覚が鈍くなっていくのだろう。

沙都子は「なに？」と言って世機を睨む。
山田は探ってみようかと言って、スマホに何か入力した。
沙都子と世機は興味深げにそのようすをみていた。
山田はメッセージを送り終えると、スマホをポケットにしまった。
「心当たりに調査を依頼しておいた。少し癖のある人だからな、しばらくかかるかも」
山田は言ってからコーヒーを最後の一口まで流し込んだ。
誰に頼んだのだろうか。
山田が名前を出し渋っているところを見ると、沙都子や世機の知り合いではないのかも知れない。

世機は今日起こった出来事を、順を追って整理してみた。
まず襲ってきた場所だ。
よく考えてみると予め待ち伏せていたのかも知れない。
通り道にそんなに都合よく出食わせるわけはない。
襲ってきたタイミングと言い、予め狙っていたとしか思えなかった。

そうなると、通り道を知っていたことになる。
ということは、タクシードライバーの吉住猶が怪しいということになる。
しかし世機には彼女がスパイだとは思えなかった。
確証はなかったが、霊的な直感とでも言うところだろうか。
おそらく沙都子も彼女は違うと言うだろう。
本当に根拠がない信頼なのだ。
吉住猶には何故か信じられるところがあると思えた。

そうなると一体なぜタイミングよく待ち伏せのようなことが出来たのか。
呪術的な技で言うならば、予知予言のたぐいだろうか。
予知や予言をする技や術者は数多いるが、正確さに欠けるし手間のかかることも多い。
だからといって違うという事にはならないが、世機はおそらくこの手の能力ではないと思っていた。
おそらく誘導されたのだ。
操られていたと言ったほうが正解かも知れない。
呪術というよりは、背乗りという人を操るスパイ方法がある。

世機や沙都子は前に一度体験したことが有ったので、その時の操られる感覚に似ていた。
だがこの背乗りという技は特殊な技であるから、そんなに使い手が多いわけではない。
世機も沙都子も忘れてしまっていたのだろう。
背乗りという技は、相手の感覚を共有して視覚などを利用して情報を得る技である。
世機や沙都子たちのような霊感のある者は、嫌な感覚があるので感じ取れるのだ。

里神翔子の技か。
反政府運動やテロ組織などと関わりの深い里神翔子ならば、そういった技を知っている可能性は高い。
自身で使ったか、もしくは別に仲間が居たのかも知れない。

もう一つの謎は何故したいを腐乱させたかであるが、こちらの方は大きく分けると理由があるのではないかと世機は思っていた。
理由１は、使った術の特性。
殺す目的だけならば、死体を腐られる必要はないので、そういった追加の機能のある技を使った可能性だ。
これならば、ある程度の納得はできそうだ。
そして理由２はどうしても死体を腐らせる必要が有った場合だ。
だがこれは、死体を腐らせなければならない理由というのが、世機には解らなかった。
山田もその点については何も言ってこないところを見ると、理解できていないのだろう。
山田正広という男は、態度は横柄なところもあるが、細かいところに気がつく。
仕事も正確だし、世機も沙都子も信頼している男である。
その男がこのことに何も気が付かないということはない。
あるいは気がついていたとしても、言えない何かがあるのだろうか。
今回の依頼から手を引けという指示となにか関係があるのかも知れない。

「お前らも、このまま手を引けと言われても釈然としないのだろう」
山田が言った。
「そうね」
沙都子が返す。
「なにか分かったらあとで連絡するよ」
「それまで待機するか、次の仕事でもやっていてくれ」
山田は言ってから、殻になった缶をゴミ箱に捨てた。

世機と沙都子は来たときとは違って、エレベーターに乗って１階まで下がった。

途中で、見た目が小学生くらいの男の子が１人乗って来て降りた他は、誰も乗ってこなかった。
沙都子は男の子が降りて行くところを見て、違和感を覚えた。
「ねぇ？あの子」
「あの子は此処の名物だよ」
世機は少年の正体を知っている様子だった。
「あの子、ふぅん」
沙都子はまだよくわからない様子だったが、世機の言葉で納得した。
「幽霊さんか」
「気が付かなかったか？」
沙都子も世機も霊感とでも言うような能力はもちろん持っている。
霊感が無くても技術としての呪術は誰にでも使えるが、霊感が優れていた方が、術や技の威力が圧倒的に強くなるのだ。
エレベーターが１階に着いた。
沙都子は周りに誰も居ないのを確認してから、３歩ほど進むと、両手を頭の上で組んで大きく伸びをした。
「あの子、なんか感じが違ったよ。普通の幽霊じゃないの？」
「あいつはここの守り神さ。座敷童のようなものかな」
「座敷わらし？こんなところに」
「正確に言うと違うけれど、あの子は神霊だよ。神様さ」
「神」
「見られただけでラッキーなんだよ。運が付いたかもな」
世機は事件のことを考えながら、心ここになしという態度も隠さずに答えた。

「世機、あんたまさか」
続く言葉を飲み込む。
「それほど馬鹿じゃないよ」
沙都子が言いたいことは分かっていた。
世機もその事を考えないわけではないのだが、今回は相手が悪そうだ。
里神翔子、厄介な相手だ。
こちらが降りたと言っても、向こうからなにか仕掛けてくるかも知れない。
まあそんなことはないとは思うが、それでも用心に越したことはない。
考え過ぎかなと世機は思ったが、口には出さないでおいた。
沙都子は「そうなの？」と言ったきりで、それ以上何も追求しなかった。
およそ考えていることは筒抜けか、世機は腕の時計を見た。

世機はスマホの時計以外にも腕時計をつけていた。
荒事の多い業界であるから壊れてしまう可能性があるので、時計をいくつも身に着けているし、スマホもいつも使うものの他に２台持っていた。
いつも実戦には備えているつもりであるが、今回はその備えも霞んで見える。
素直に手を引いたほうが良いのだろうなと思ってしまう自分に、世機は歯噛みした。
今回の相手とはまた戦ってみたい。
世機は自動ドアをくぐって外へ出た。
ここからは駅が近い。
「歩いていこうか」
沙都子に声を掛ける。
「それは駄目そうだね」少し間を置いて、沙都子が答える。
沙都子にそう言われて、世機は辺りに視線を這わせてみる。
吉住猶が車の窓から手を振っていた。

猶は、先ほどのタクシーから自分の車に乗り換えてきたらしい。
吉住猶のイメージとはほど遠い気がするが、彼女の自家用車は白塗りのラリー仕様だった。
「凄いね」
世機は無遠慮に車を隅々まで見まわす。
アイドリングのエンジン音を聞き、良い音だねと誉めたり、マフラーは何処製かとたずねたり忙しく眺め回す。
それに対して猶が自慢げに返すのだが、沙都子には何のことかサッパリ分からなかった。
沙都子はバイクや車の運転は出来るけれど、メカの話は蚊帳の外である。
世機の方は沙都子とは嗜好が違って大のメカ好きだった。
だが、世機は荒事の多い術師をやっているので、車は持たなかった。
運転中に襲われると、どうしても反撃に出るのに遅れがあり、勝機を逸してしまうのだ。
回りの術師達も世機も沙都子もそう思っていた。
だが、猶はそうではないらしい。彼らとは違う考えを持っている。
猶の車を丹念に調べていた世機はこの車には防御の術が幾重にも施されているのに気が付いた。
「そう来たか」
身を低くして調べていた世機が、立ち上がりざまに言う。
「？？？」
吉住猶はなんのことかわからずに、神憑世機を見つめる。

「凄い防禦だね」
世機は本当に感心したというふうに頷きながら褒める。
「あ、わかりました？」
猶は得意げに胸を張り、顔を輝かせる。
こいつも技術バカかな、と世機も嬉しそうだ。
それにしても見事な防禦である。
呪いを防ぐというだけならば、ほぼ完璧な技である。
まあ、完璧と言っても破れないわけではないのだが、それよりも技の使い方である。
彼女はよほど、車の運転が好きなのだろうなと、世機は思った。

「乗ってください」
猶は促す。
「どうして迎えに？」
沙都子は今日知り合った子がどうしてこうも簡単に人懐こく自分たちに寄ってくるのか不思議に感じた。
猶の事を信用していいのかどうかわからなくなってしまった。
「いつの間に、髪を染めたの？」
そういえば猶の髪の色が先程と違う。
ウイックだろうか。
猶の髪の色は仕事中の先ほどは、淡い栗色だった。
今は薄い青、というよりも水色に近い。
「カツラです」
カツラと言うか？沙都子はなんとなくこの人懐こさは猶の性格なのだと思った。
術師になろうという者は、どこかひねくれている。
育った環境が特殊で更に不幸な生い立ちの者が多いので、猶の態度は沙都子にとっても新鮮だった。

だが猶の中にある暗さにも、沙都子は気がついてしまった。
どんな人生を歩んできたのだろう。
興味はあったが、沙都子はあえて勘繰ることはしなかった。

沙都子は車のドアを開けて助手席に乗り込んだ。
世機は後部座席に座り、シートベルトを締めた。
猶がアクセルを踏むと、エンジン音と微かな排気臭が辺りを埋めた。

「電気だとこうは行かないね」

世機はほんの少しテンションが上向いている様子である。
「分かります？」
猶は嬉しそうに答える。
沙都子はそんな二人のやり取りを詰まらなそうに見ていたが、本当に詰まらないのだろう、窓の外の流れ消える風景を眺めて溜め息をついた。
もう辺りは暗くなりはじめて、街灯の明かりが流れ星のように消えてゆく。
沙都子は黄昏時のこの重苦しく感じられる風景がとても気に入っていた。
気持ちが落ち着くのだ。
沙都子は欠伸すら出てくるのではないかと思うくらいゆったりとした顔つきで、外を眺めていた。

世機はまだ猶と話していたが、沙都子は気にしないようにしていた。
日は落ちて、車内のイルミネーションが美しく映える。
猶がアクセルを動かす度に、メーター類の針が動く。
窓の外の景色が見慣れたものに変わって行く。
空には月明かりをまだらに見せる様に雲がいく筋か浮かび、濃淡のある青黒い夜空を彩っていた。
もう少しで住み慣れた家に帰れると安心したせいか、精神が綻び、沙都子に欠伸が出た。

今日は緊張の連続だった。
里神翔子と2匹の鬼との死闘に始まり、依頼者の死体発見から調査して警察に連絡。
事情聴取が終わってからは連盟本部での担当職員である山田正広に報告しなければならなかったから、
かなりハードな1日だった。
沙都子は溜め息混じりに窓から視線を離して、椅子の背もたれに寄りかかる。

里神翔子との闘いが、頭をよぎる。
あの戦いにおいては、里神は全力を出していなかったのは、沙都子にもわかっていた。
様子見に来たのかな。
そんな予感がした。
何のために、いったい何に対しての様子見なのか。
沙都子や世機もそうだが、呪術師は霊感直感が鋭いためか、物事の感じ方が特殊だった。
感が働いて、それに向けて答えを組み立てると言った順序で思考が進むのだ。

この思考方法は、気をつけなければいけない点が幾つかある。
最大の注意点と言うか、この嗜好手順が危険な点は、感が外れる事がある点である。

術師の感は神憑っているので、はずれることなど滅多に無いのだが、世機のように戦闘型であっても熟慮して行動するように自分を戒めている者もいる。

何の目的で襲ってきたのか？
小林さんを殺すのが目的ならば、自分達を襲撃する意味がないのだ。
里神翔子はこの世界では実力者で有名人だ。
ほかに目的が有ると勘ぐるのは当然だろう。
沙都子は途中で思考を打ち切らなければならなかった。
猶は沙都子と世機の事務所件自宅にしている集合住宅の入り口前に車を着けたのだ。

「晩ご飯、たべていく？」
沙都子は猶に聞いた。
猶は二つ返事で誘いを受けた。
猶は憧れの先輩から誘いを受けた女子高生のように、少しドキドキしながらも喜んで誘いを受けた。

「車はどこに止めておけば良いのですか」
猶はたずねた。
「どこでも良いよ、通行の邪魔にならなければ、どこへ止めてもいい」
世機は言い、沙都子とともに車を降りた。
「本当にどこでも良いのですか」
猶の問いに世機はフッと笑った。
「このマンションは、同盟の持ち物なんだよ。同盟の社宅のようなもので、術師ばかりが住んでいるんだ」
「？？」
「だからそんなにうるさくないから、大丈夫だよ」
世機は猶に言う。
猶は車を入り口脇の邪魔にならないところに止めると、車を降りて二人の待つところへ戻ってきた。

世機も沙都子も猶が来るまで、中へ入らずに待っていた。

里神翔子は沙都子や世機との戦いを終えた後に、誰も居ない町並みを眺めながら歩いていた。
鬼達は次元に隙間に隠してある。
正確に言うと、彼女の身につけている指輪の中に次元の隙間を作って、鬼を閉じ込めてあった。

翔子は作戦が予定通りに進んでいることに安心してなどいなかった。
なんだか嫌な予感しかしなかった。
世機や沙都子と同じように霊感の類いなのだが、翔子の方はこの直感をかなり信じていた。

考え事をしながら歩いていると1人の男がこちらに歩いてくるのがわかった。
人払いの結界をしているのになぜ？
男はパーカーを着込んでいて、フードをかぶって顔を隠していた。
霊気は感じなかった。
薄い、赤みがかった紫色の地に、背中にはダークレッドでドラゴンが描かれていた。
ドラゴンの輪郭や陰のところは黒く縁取られていて、中はダークレッドの布地が使われていた。

翔子は付近のビルに入っている、不動産屋のガラスに映ったドラゴンを見ていたのだが、このガラスが鏡のように鮮明に映像を映し出すのである。
綺麗な色彩のドラゴンだが、翔子の好みではなかった。
背中にドラゴンなど、彼女には似合いそうもない。

男が翔子の脇で止まる。
翔子も歩みを止めて、男の方に顔を向けた。
フードの下の男の顔が、かろうじて確認できた。
男は彫りが深く、鋭い眼光を放つ瞳と、逆タマゴ型の輪郭の為に、かなり神経質そうに見えた。
体つきは痩せていた。
そうは言っても貧相な体つきという訳ではない。
長い袖やフードの下から露出する素肌は、黒っぽい色をしていた。

男は翔子のよく知った人物だった。
「なんだ、アンタか」
翔子は気軽に声をかける。

男は少し顔を歪ませたが、別に翔子に対して含むところが有るわけではない。

「相変わらずだな」
男は言いながら、チラリと翔子を見る。
眼光が鋭いので、相手によっては自分を睨んでいるように感じるかもしれない。

「何の用だ」
翔子も、仕事用の顔つきに戻っていた。

「なんであいつ等に接触したか聞きたがっているようだ」
男は口早に言うと、翔子の返事を待った。
「本部に来いって事ね」
辟易とした様子で翔子は答える。
「早めに来いよ」
男は言ってからまた歩き始めた。

翔子も男から視線をそらせて、少し間をおいて歩き始めた。

面倒だな、と、翔子は協会を牛耳っている年寄り達の顔を脳裏に浮かべて、苦々しく顔をひきつらせて笑った。

「夢幻回航」第四話

山田正広は世機と沙都子と別れた後に、デスクに戻って残務に取り掛かろうとしていた。
「やる気でねぇな」
などと言いながらティッシュでスマホの画面を拭いていると、メールの通知が表示されているのに気が付いた。
確認してみると、発信元は先ほど調査依頼をした相手だった。
『中村紅葉（なかむらもみじ）永遠の１８才おとめ座Ｂ型尽くすタイプです』
メールの下にある定形の挨拶文にはこの様な自己紹介が掲示されていた。

本当の年齢を知っている山田は、彼女からのメールにあるこの文章には毎回吹き出したいのを堪えるのが一苦労だった。
中村紅葉は沙都子と同年代である。
ただ、見た目は非常に若くみえた。
１８才で通用するかどうかは、見る者の主観とでも言うか、好みと感覚的なものもあるだろう。
どう言うことかというと、１８才よりも幼く見えるのである。
合法ロリと言う言葉が適切かどうかは分からないが、小柄な上に華奢で童顔、それが中村紅葉の容姿だ。
本人は自分の見た目を充分に解っている上で、カラーウィックやカラーコンタクトなどを使ったりしてそれなりに可愛らしく着飾ったりするものだから、始末が悪いのだ。
山田などはたまに仕事で一緒に歩いていたりすると、父親扱いされたり、もっと酷いときには警官に呼び止められる事もある。
山田はそういった事を含めて彼女のことをかなり気に入っていた。
中林紅葉は変わり者では有ったが、頭の切れる女性である。
その点も山田の感性に触れるところである。
メールの内容に目を通す。
中村紅葉の調査の仕方は現代人らしく、まずはネット上の情報から収集にかかる。
そして気になったものを実地で調査していくのだ。
今回のメールはネット上の情報をまとめたものである。
協会も連盟も非公式の組織ではあるし、あまり世間に知られているものではない。
だが、術者仲間にはそれなりの噂の伝達法がある。
連盟も協会もお互いに少しずつではあるが、情報を漏らしているのである。
互いに公式な交流はないのだが、そういった情報交換は、ある程度は出来ている。
今回はそういった非公式情報のまとめと言ったものだろう。
メールにはこうあった。
小林氏の事件には協会の術者が関係しているようです。
名前はまだはっきりとはしませんが、小林氏は個人の伝を使って、協会にもガードを依頼していたらしいのです。
協会は里神翔子の関与も承知で、十分な準備をして対処しているようなので、連盟に手を引けと言ってきているようです。
中村紅葉のメールは、簡単ではあるがそう書いてあった。
まずは何時もどおりのありきたりな報告に、山田正広は笑うしかなかった。
彼女の流儀である。
まずは調査に乗り出してくれたことに安心しておこうか、と、山田はスマホを机の上に置いた。

里神翔子は自分の部屋に帰っていた。
なぜだか夜羽沙都子との戦いを思い出した時に、自分の修行時代を思い出していた。
沙都子の性格と自分の性格や戦い方が似ていると思えたからかも知れない。
彼女は夜羽沙都子に興味があった。
仕事で、敵同士でなければ、会って話をしてみたい存在だと認識していた。
もっと言えば、こんな出会いでなければ、最も良い友人になれたであろうものを、そう思うと、なんだかほんの少しさみしくもある。
インスタントのコーヒーをいれて口にする。
里神翔子は酒を飲まなかった。
飲んでも、昔の悪い思い出のために酔うことの出来ないということもあったし、酒を飲んだらいざという時に戦えないという不安感から、里神翔子は酒を飲まないのだ。
リラックスしたいときは、コーヒーか紅茶を好んだ。
殺伐とした人生に花でも添えたいのか、カップは女性らしい華やかなデザインのものだった。
里神翔子は、ゆっくりとカップを口に当てて、コーヒーを少しだけ口の中に流し込んだ。
そしてため息を漏らした。
彼女はたまにではあるが、自分にはこんな人生以外にももっと別の可能性があったのではないかと思うことがある。
今ではテロリストに協力して、闇の世界で動いているなどの噂の絶えない彼女だったが、はじめからそうであったわけではなかった。
今のようになったのは、理由があるのだが、彼女自身あまり思い出したくもないと思っていることであった。
里神翔子は沙都子との戦闘時の事に思考を振り分けた。
あの女、格闘術はわたしの方が上だった。
だけどセンスは悪くないし、術のセンスはどうだろう。
今回はこちらの奇襲だったが、対等の条件だったらどうなのかな。
次にやったとしたら、わたしが圧勝するけれどね。
沙都子の実力を認めたとかそう言ったことではなく、これは彼女のいつも抱いている覚悟である。
沙都子の実力なんて、たった数十分の戦いだけでわかるものではなかった。
相手が沙都子ではなく、まったくの素人ならば、立ち合っただけでも実力はわかる。
相手との実力差があればそれだけでもわかるものである。
ただ、今回、夜羽沙都子と名乗った彼女と対峠したときに感じたのは、負けるという感じがしなかったのと同じくらいに、勝てるという自信も湧いてこなかったのだ。
実力が伯仲している？

あの技や体術の使い方を見ていると、とてもそうは思わなかったが。
だとすればあの戦いからはわからないポテンシャルが、彼女に隠されているのだろうか。
翔子はコーヒーをほんの少し口に入れて、また考え始める。
沙都子との戦いは今回初戦だったこともあり、様子見、偵察の意味もあった。
なめてかかっていた。
よく調査しないうちから、相手の手の内を見てみようという気持ちがあったのは認める。
相手がここまでの感触を与えてくるとは思っていなかったのだ。
こんな感触は初めてだった。
力押しをしていたら勝てたかもしれないが、でもやっていたら柔らかく受け流されそうな感じがした。
自分とはタイプが違うのか。
攻撃主体型の自分と違うタイプということは、防御型、受け流して攻撃するようなタイプなのだろうか。
記憶に留めつつ、これ以上考えても始まらないなと思考を追い出して、仕事の段取りを確認してから、帰り際に購入したとんかつ屋のテイクアウトであるスペシャルとんかつ定食大盛りをひろげた。
「肉体労働をしたあとはやっぱり肉よね」
独り言を言って、美味しそうにカツを口に運ぶ。
吉住猶は大きく身を乗り出して、沙都子の話を聞いていた。
沙都子は吉住猶のことを訝しがり、スパイなのではと疑っていた。
反面では意気投合したらしく、修行時代の話など披露していた。
吉住猶も聞き上手のようで、次々と過去の話を沙都子から引き出している。
「実はわたしも世機も小さい頃に親を亡くして、妹の槇と一緒に先生に引き取られたのよ」
「そうなんですか」
猶はまるで憧れのスターの身の上話を聞くファンのように、本当に興味深く聴いているようだ。
沙都子も調子付くわけだと、世機も猶の聞き手としての上手さに感心した。
世機もまだ、猶のことを疑っていた。
猶が現れたタイミングも良すぎるし、何を考えているのか得体のしれない里神翔子のような敵の存在もある。
仕事から手を引けと言われているし、お金にならないとわかっている事件に、自分から調査をするような馬鹿な真似はしない。
世機もそういったところは心得ている。
彼らだって正義の味方じゃないから、タダ働きはしないのが心情である。

世機はそんな考えを抱きながらも、何気なく視線が猶の襟元から覗く胸の谷間に視線が行ってしまった。
瞬間に、テーブルの下で沙都子の蹴りが世機の膝にあたる。
何事もなかったように沙都子と猶の会話は続いている。
中村紅葉は三角耳を自作してフードに取り付けたピンク色のパーカーを着て、パソコンの画面を見ながらキーボードを叩いていた。
先に書いたように中村紅葉の調査はパソコンを使うところから始まる。
真偽はともかく噂話の類から集め始める。
ネットを使って調べるだけではない。
独自の調査網と調査のためのノウハウや術を駆使して、事件や人物を調べ上げてゆくのが彼女のやり方だ。
中村紅葉は術者であると同時に名うてのハッカーでもある。
使っているパソコンも、個人が使うにはかなり高性能で高額なものを使用していた。
CPUだけではなくディスプレイにもこだわりがあって、高精細だが小型のワイド液晶を3台つなげて使っていた。
トリプルヘッドディスプレイである。
中央にメインの情報を映し、右の画面にどこから手に入れたのか、山田さんの変死体と調査書類の映像が映し出されていた。
彼女が術師になったのには、他の者たちとは少々違った事情があった。
中村紅葉もやはり世機や沙都子と同じに孤児ではあったが、はじめから術師として育てられたわけではない。
紅葉は幼少時代に軍事スパイのための訓練施設に誘拐されたのである。
子供の頃からスパイとしての訓練を受けて、体術や調査術とハッキングの技術を叩き込まれた。
２歳のときに拐われて、１４歳まで訓練は続けられた。
そして彼女が１４歳のときに初任務が与えられた。
その時の任務というのが、その後の彼女の人生に大きな影響を与えたのだ。
任務というのはある国の重要ポストにある人物の、性的な籠絡である。
つまりロリコン相手にハニートラップを仕掛けるというものだった。
彼女の役目は相手と性交をして、仲間に証拠の写真や動画を録画させるというものだった。
もちろん彼女は拒否したが、薬を使われて、催眠術などにかけられて、人形のように扱われて、任務につかされた。
彼女の容姿は先に書いたようにかなりの美少女である。
それでこのような任務に宛てられたのだ。
相手の男はかなり鍛え上げられた肉体の、大男であった。

肌の色や人種までは彼女の記憶からは欠如してしまっていたが、薬漬けでなくても逆らいきれる体力差ではなかった。
薬や術で自由を奪われていたこともあり、泣き叫んで抵抗することすら出来なかった。
服を引き千切られて押し倒されて処女を奪われた瞬間に、彼女の術師としての才能が発露したのだ。
彼女は薬と催眠術でがんじがらめにされて、叫ぶことすらできなかった。
だが意識はあったから、心が弾けて、それと同時に相手の男の体が弾け飛んだ。
肉片が部屋中に飛び散り、ベッドのシーツや毛布、彼女の破れた服に、彼女の白く柔らかな肌にも、男の肉片がこびりついた。
血の匂いがこもった部屋に、肌についた肉が、まだ生暖かい感触を伝えてくる。
如何に訓練されていたとはいえ、彼女の心は砕けてしまったのだ。
薬や催眠術で感覚を鈍らされていたから、効果がさめて感覚がもとに戻ったときにはもっとひどい状態になった。
この時の影響で、彼女は永遠に終わりのない精神病という状態にまでなってしまったのだ。
統合失調症という病名を付けられて、事件からしばらくは自殺未遂をする様になる。
この惨状を見ていたはずの一緒にいた撮影スタッフも何故か彼女のところには現れずにいたので、彼女は薬と催眠からさめたときに一頻り叫びまわって泣いたあとフラフラと部屋を出たところに偶然に通りかかった呪術師連盟のスカウトマンに保護されたのだ。
そのスカウトマンというのが山田正広の師匠であり上司でもある小鳥遊泉と言う女性である。
山田と中村紅葉は幼少の頃から知り合いだったが、世機と沙都子の様にはならなかったのは、紅葉に男性関係でトラウマとなるような過去が有ったからだ。
修行時代の山田は彼女の心を開くことに苦労したが、山田自身弟を原因不明の事故で亡くしていたので、紅葉のことを妹のように思っていたのかも知れない。
中村紅葉は過去のトラウマを思い出すと、体が硬直したり情緒が不安定になったりすることがある。
今でも精神科の受信は欠かせない。
男性に対する恐怖心も治らなかった。
それを隠すかのように、わざと幼い姿を強調しているのではないかと山田などは思っているが、実は紅葉本人にもよくわからないのだ。
彼女の主治医などは、自分の身を守るために幼いままでいたいという衝動なのだと言っているが、本当にそうなのだろうか。
確かに彼女自身、そういうデザインの洋服などに身を包んでいると落ち着くという事に気づいてはいたので、多分そうなのだろうと本人も納得している。
中村紅葉のもう一つの癖は潔癖症に近いほどに汚れを嫌うことだ。

使用するパソコンは白いケースを好んだが、少しでも汚れがあると中性洗剤を含ませた雑巾で拭き掃除をしてからでないと、仕事に取り掛かることもできなかった。
汚れるのが気になって、仕事に支障が出たら命取りになる。
故に彼女は、攻撃力では群を抜いた才能を持っていたが、バックアップの仕事につくことしかできないのだ。
中村紅葉はパソコンを利用して一通り情報を集めてみた。
しかし思った以上に成果が上がらなかったので、調査の視点を変えてみることにした。
今までは小林さんの事件について調べていたが、協会がどう関与しているかについて調べてみようと思ったのだ。
パソコンデスクの上に置いたスマートフォンに手を伸ばす。
キレイな薄ピンクの筐体に、可愛らしいマスコットのついたストラップが付けられている。
画面の電話マークに指を置くと、表示が切り替わって電話が使えるようになる。
登録された氏名を探してタッチすると、指定の番号に電話がかかる。
あんまりこの手は使いたくなかったな。
中村が思っていると、数コールで相手が出てくれた。
「はい」
落ち着いた女性の声が耳元に聞こえてくる。
「中村です。お久しぶりです」
紅葉も負けずに落ち着いた大人の女性を演出するためか、いつもよりも低い声で応じる。
「どちらの中村さんでしょうか」
電話の相手が言うと、紅葉は歯を食いしばってスマホを持っているのと逆の拳を握りしめる。
知ってのとおりに相手にも番号や登録名が表示される仕組みである。
相手が登録してなければ、電話番号だけが表示されるが、相手が紅葉の番号を登録してあるのはわかっている。何という登録名かもわかっている。
「中村紅葉です」
「中村さん？ですか～」
相手が吹き出したいのを必死でこらえているのがわかる。
「おかしいですね、こちらの表示は”ちんちくりん”ってなっていますよ」
と言って、相手は電話の向こうで思い切り吹き出して笑った。
紅葉は更に拳に力を込める。
「五月蝿いこのデカ女、可愛いあたしに嫉妬かよ～」
「なんですってこの～」
電話の向こうでうなり声が聞こえる。
デカ女と言われた方は名前を槙村紗千（まきむらさち）と言う。

紅葉とは知り合いである。
ある事件を切欠にして知り合った仲であるが、友達というよりも当人同士はライバルと言い合っている。
でも、お互いに嫌いなわけではない。
このやり取りは、いつものお決まりのギャグみたいなもので、二人を知る者は漫才と称している。
「で、何の用なの、紅葉」
紗千は事務的な口調で言う。
「小林陽太郎さんの事件は知っている？」
紅葉も普通に喋り始めた。
「手詰まり？それで私に？」
意地の悪い調子が含まれた問いかけに、紅葉はやり過ごす。
「なにか知っている？」
「なぜ協会が動いているのか、圧力というか手を引けと言っている理由ならば・・・」
「知っているの？」
紅葉は思わず体を前に乗り出す。
「それが全然」
紗千はため息混じりに答える。
「そっか」
紅葉もため息をつく。
槇村紗千は協会側の調査員なのだ。
協会と連盟は敵対関係ではないが、一応商売敵ではある。
だから交流も、公にはやっていないが、個人同士の交流は普通に行われている。
もちろん守秘義務などがあるので、仕事の内容や個人の情報などは漏らすことはない。
紗千が教えることができないのかとも思ったが、感じ取ったイメージからはそういった様子もなさそうだ。
「３日後の午後３時にいつもの喫茶店はどう？」
紗千はまるで恋人をデートに誘うような軽い口調で、紅葉を誘う。
「３日後・・・」
何を考えているのか、そうか！？
「分かった、３日後の３時だね、必ず行く」
紗千は３日後までに調べておいてくれるつもりなのだ。
紗千は女性にしてはかなりの長身で、スーパーモデル並みにスタイルのいい女性だ。
幼児体型の紅葉とは見た目がかなり違う。
スラリとして、スーツの似合うできる女性という見た目である。

インテリっぽいデザインのメガネもよく似合っている。
実際に彼女はインテリで、訳ありの人生を送っている呪術集団の中では珍しく高学歴であった。
外国語も４ヶ国語話せると言っていた。
しかし彼女も順風満帆な人生というわけではない。
両親が国際的に活躍する呪術師であったために、外国暮らしが長く、いじめられることも多かったと聞く。
そのために幼い頃からの友達などいないし、親友と言えるのは別組織に所属する紅葉だけだと、紅葉は紗千自身から言われたこともある。
あまり自分のことを語らない性格であるので、詳しい生い立ちなどは謎だった。
紅葉も紗千もお互いに過去のことはあまり詮索しなかったから、互いに心地が良かったのかもしれない。
まったくタイプの違う二人であるが、性格は相性が良いのだろうと思う。
仕事のないときは都合が合えばよく二人で出かけたりもしていた。
「合うのは久しぶりだな」
軽口を叩ける相手のいない者同士である、出来れば仕事以外で会いたかったなと思いながらも、彼女に無理をさせるのではないかと心配して目を伏せ、通話を終了させた。

「夢幻回航」第五話

事件の進展がないままに、一日が過ぎていった。

神憑世機と夜羽沙都子は今日は表の仕事で忙しかった。
裏の仕事を始めるのは、表の職業であるテクニカルライターの仕事が終わってから取り掛からなければならない。
テクニカルライターと言っても、本を出すようなことはなく、Webライターと言われるネットで記事を発表するライターだった。

日本呪術師連盟と呪術師協会は、呪術者育成の他に生活サポートをするための学校を運営していた。
学校では呪術も教えるが、一般人として生活できるように、普通の学校と同じような勉強も教えてくれる。
そして最終学年まで終わらせて卒業できれば、大卒の資格さえも得られる。
規模は小さいが、そういった教育機関もかなり充実している。

世機や沙都子も連盟の学校を卒業していた。

奨学金制度というか、呪術師となると言う条件付きで、食費以外はほとんど無料で就学できた。

世機にも沙都子にも工業用的な素養があったらしい。
数学などが得意だったが、呪術師にならなければいけないという成約があったから、普通に企業に就職したり、研究機関に入ったりということが出来なかった。

よって、ライターなのだ。

特技を活かして生計を立てたいと思っていた二人は、テクニカルライターとして生きる選択肢をとった。
もっと違った人生もあったのではないか？
世機にしろ沙都子にしろ、そう思わない日はなかった。
命のやり取りを楽しむような変態的な精神状態になどなれるはずもなかった。
ほかと違った生活を送っていると、子供の頃はよく虐められたものだ。
師匠が女性なので、身なりはそれなりのものを用意してくれたし、食事も食べさせてもらった。
気が向いたときにはビデオゲームやおもちゃを買ってやろうかと言い出すこともあった。
沙都子や世機や槇が遠慮して、おもちゃやお菓子をねだることが無かったからだが、
先生はそれを不憫に思ったのか、子供達に気を使ってくれた。
今思えば優しい先生だったのかも知れないなと、世機は思うことがある。
修行は大変だったなと、思い出して苦笑した。

いつものトレーニングを取り止めにして、早朝３時から仕事を始めたので、１２時には終わってしまった。
助手の役目である沙都子はと言うと、こちらは１２時まで眠っていた。
連日遅くまで何か調べ物をしていたようなので、疲れがでたのだろう。

世機は仕事については何も言わずに、「おはようさん」とだけ言った。

沙都子はボサボサに寝癖の髪を直そうともせずに、冷蔵庫のドアを開けて、炭酸水を取り出してラッパ飲みをする。

「おはよう」気怠い声である。

「すげー！」
いつものことだが、世機は沙都子の様格好を見て、感想をもらす。
寝間着の裾がはだけて、実に色っぽい。
「何？」
沙都子が面倒くさそうに応える。

「いや、目のやり場に困ってね」
世機が言うと、沙都子はふ～んと言いながら胸を張り、目を細めて世機を見下ろす。

「いつもじっくり見ているくせに」
この場に他の人間が居たら赤面するかもしれない様なことを言ってくれる。
まあ、じっくり見ているというのは確かなのだが。

「なにか分かったか？」
世機はパソコンの電源を落とす動作をしながら尋ねた。

「里神翔子について調べていたの」
「里神？」
「彼女の関与した事件について、連盟のデータベースにないかってね」
「あったのか」
「数は少ないけれど、いくつかあった」
沙都子はつばを飲み込み、更に続けた。
「1番新しいのは3年前の爆弾テロね」
「リニアモーターカーの爆破事件か」
「そう」
「わからんな～、なんか目的でもあるのかな」
「一応テロリストなんだから、目的はあるんでしょうけど、あの時の声明は仲間の開放だったっけ」
沙都子は3年前の事件と今回の事件がなにか関連があるのではないかと思っているようだったが、本当にそうなのだろうか？

世機はパソコンの脇に置いたコーヒー入りのカップに手を伸ばした。

遅い朝飯兼昼食を食べ終わると、２人は出掛ける事にした。

「小林さんの所へ行ってみようと思う」神憑世機はそう言うと、いつものタクシー会社に連絡した。
沙都子も頷くと、世機の電話が終わるのを待たずに、玄関でスニーカーを履いてから外へでた。

世機も電話を切ると、すぐに後を追った。

外へ出て暫くすると、いつもの黄色っぽいタクシーが、世機と沙都子の近くへ来て止まった。
運転手が窓を開けて手を振っている。
「ん？」
世機は顔を向けると、吉住猶が顔を覗かせて笑顔で見上げていた。

沙都子は猶を見て驚いた様子で、声をかけた。
「偶然？」
「偶然ですよ」
猶は微笑んだ。
「嘘でしょう？」
沙都子の問に、猶は素直に頷く。
「はい、また割り込みました」
「気に入られたのかな？」
沙都子は肩を竦めてみせた。
出会ってからすぐに仲良くなれるタイプというのも居るものだなと2人は世機は思った。

吉住猶は2人が乗り込むと、車をスタートさせた。

「山田さんから例の端末の件が正式に依頼が来ました」
猶が運転をしながら言う。
「山田さんから？」
沙都子も世機も、猶から山田の名前が出てくるとは思わなかったので、少しだけ驚いた。
「山田さんも若い子が好みなのかな」
口の悪い沙都子らしい批評に、世機は少々山田が気の毒になった。

「いや〜、山田さんとは仲良くさせてもらっています」
猶の答えにどういうふうに反応すればいいのか戸惑いながらも、沙都子は思わずに吹き出してしまうところだった。
これは山田をよく知る人の反応だろう。
山田は言動と見かけから人に誤解されがちだが、かなり真面目な男である。
真面目すぎて浮いた話は聞かない。
中村紅葉とのことも知っているだけに、猶のひょうけた答えが沙都子の感性に触れたのだろう。

「なにかわかったの」
「発火の原因ですが、バッテリーが原因です。ごく普通の原因ですが、変なんだそうです」
「なにがへんなの」
「特殊なウイルスが入っていたらしいのです」
「ウイルスが・・・」
猶の話だとウイルスの正体まではわからないということだが、いくつかの発火事件に関係があるらしいというのが調査をした結果らしい。

猶は普段はチームで動いているという。
彼女はまだ見習いであるために、助手や補助的な仕事しか与えられない。
今は紅葉の下で働いているらしいのだ。
中村紅葉の調査チームで見習いをしているらしい。
それで、山田のことも知っていたのかと、世機も納得した。

それにしても人嫌いで有名な中村がチームを持っていたなんて知らなかったな。
世機は中村紅葉とはそれほど深いつながりはない。
沙都子の方も、紅葉とは山田を通してしか繋がりはない。
だが、中村紅葉については術師ならば誰で見知っていると言うほどの有名人なのだ。

中村が術師になった経緯などは、山田やその師匠である がひた隠しにしていたから、知れ渡ることは無かったが、中村紅葉の才能については早い段階からかなり有名だった。
呪術師試験はトップ合格で、潜在能力テストも規格外のランキングだった。
それだけの才能を持ちながら、本人は極度の人見知り（知らない人にはそう見えた）と言うか人嫌いであった。

実戦にと望む者も多かったが、それらをすべて振り切って、調査の仕事を受けている変わり者とレッテルがはられるようになったのだ。

容姿もかなり話題だった。
彼女は当時、モデル事務所や芸能事務所の類がかなりの数スカウトに来ていた。
山田はそれらを追い払うのに、かなり苦労していたのだ。

年齢の同じ沙都子などは羨んでいる訳ではないのだろうが、あんなロリッ子よりも自分の方がよっぽど良いのにとボヤいていたものである。
世機はと言うと、密かに紅葉を可愛いなと思って見ていたが、沙都子の前ではそれを隠していたものである。

中村紅葉はそれほど話題性のある人物なのだ。
吉住猶はその紅葉の元で修行をしているのである。
紅葉と言えば、もう一つ噂がある。
彼女の生い立ちや、呪術師になった切っ掛けの事件を知る者ならば納得できる事なのだろうが、女性の助手しか雇わないのだ。
だから、彼女が同性愛者なのではないかと言う噂がある。
彼女は友達と言える者も女性誌か居なかった。
山田正広との関係は、ほとんど例外的なものだった。

「チップの中に仕掛けがあって、安全性がやばい商品ってことなの？」
「そうなんですよ。なんだかわからんけど、チップにセキュリティーホールがあるんだとか」
「でもそれだと、山田さんが別の機種を持っていたら実行できないんじゃないの」
「それがそうでもないんですよ。この機種に使われているチップって、業界標準っていうか、どの機種にも搭載されているようなメジャーなものなんですよ」
個人の端末を特定するには、どうやるのか、など興味のあるところだな。
IPアドレスからは住所や場所など個人情報は特定できないと言われているけれど、通信しているんだから端末は特定できるのじゃないかな。
世機などはその様に考えている。
何らかの方法で端末を特定したのだろう。
通販サイト？あるいは山田さんも独身男性だからアダルト動画サイトにでもつないでいるときにウイルスでも打ち込まれたか？
おそらくそんなところだろう。
世機の推理はおそらくあたっている。だがどうやってやるかだ。

サイトに協力者が居たとは考えにくい。
世機は通信の監視も方法としてはあるのだろうけれど、現実的ではないなと思っている。
本当にただの偶然ということも考えられる。

IPアドレスの仕組みだと、コンピューターや端末のある国や国内の地域が特定できる。
つまりネットに接続すると、市区町村までは特定されるのだ。
そこからさらにローカルな番号が割り振られて、家庭などの、例えばWiFiルーターなどに割り振られる。
個人情報はわからないと言っても、接続している場所は特定されるのだ。
端末にはGPSも付いている。
まあ、接続しているところが家だとわかるのだから、あとはそれが山田さんの家かどうか調べるだけなのだが、これは通信会社やサイトの運営者などと手を組まないとわからないはずなのだ。

通信会社やサイトの運営者にだって、個人情報を漏らすことを禁じる法律だってある。
まあ、決まりは破られるためにあるのだと宣う者もいるが、大多数の者がこの義務を守っているとすると、こちらから攻めるのは難しいかな。
世機は腕を組んで首を傾げる。

「神憑さん、中村に任せておいてください」
吉住猶は言った。
「中村さんって、噂通りにできる人なの」
沙都子が猶に尋ねる。
「それはもう請け合いますよ」

言っている間に小林陽太郎さんの家に着いた。

小林陽太郎邸は立入禁止のテープが貼られていた。
入り口に貼られたテープが風で舞っている。
鈍い光が揺らいで見えた。

まだ冷たい風が頬をすり抜けて髪を巻き上げる。
沙都子は邪魔な前髪を片手で払うと、テープを剥がさないように注意深く中へ入った。
玄関には鍵がかかっていたが、この間予め手に入れておいた合鍵を使って開けた。

沙都子がポケットから鍵を出したとき、世機は肩をすくめて笑った。
猶もいつの間にか車から降りてきて、沙都子の様子を見て口笛を鳴らした。

沙都子は何食わぬ顔でドアを開いて中へと侵入してゆく。
こんなところを誰かに見られたらどうなるかなどとは考えていなかった。
それよりも事件の真相が知りたかった。
山田からは手を引けと言われているんだぜ、と、世機は内心呟いて、溜息をついた。

猶はこういった行為に興奮してしまったらしい。
沙都子の次の行動に、一挙手一投足に熱い眼差しを向けている。
教育指導としては良くないな、世機は更に深く溜息を漏らした。

３人が中へ入ると、先客が居ることが分かった。

赤い顔をした異形の鬼がなにか見つけたらしく、拾い上げてズボンのポケットにしまうところだった。
猶が鬼との遭遇に驚いて、低く声を漏らした。
その猶の声に反応して、鬼が３人の方向に向き直る。

人間以上のパワーと攻撃力を持つ鬼だからだろうか、３人の敵を認識しても身構えることもなくじっと見据えている。
そして、ニヤリと笑う。

この前の一体だなと世機には分かった。
鬼にもそれぞれに違った気のようなものがある。
鬼たちから受けるエネルギーが、人間のようにそれぞれに違いがある。
世機はこの鬼から受けるエネルギーから、この前戦ったうちの１体であることが分かったのだ。

「この前はどうも」
世機は言ってみた。
「この前のガキか」
鬼は更に顔を歪めて、嬉しそうに笑った。
獲物を見つけた獣の様に、ゆっくりと身構える。
一線交えるつもりらしい。

「猶ちゃん、戦えるか？」
下がって居ろと言わないのが沙都子らしい。
だが世機は猶に戦わせる気がないらしい。
「下がって見学していなよ」
世機は猶を庇うように、彼女の前に立つ。

「私だって戦えますよ」
猶の怯え一つない声に、沙都子は感心して「へぇ」と、声を漏らした。

３人は玄関を背にして、ゆっくりと身構える。

沙都子も世機も戦いやすいように立ち位置を変えながら、攻撃の構えをとる。

立ち合いの睨み合いもなく、鬼がすばやく動いた。
相手の狙いは世機だった。
世機は受け身を取るのがやっと間になった。

後ろに居る猶にぶつからないようにこらえることが出来たのは、世機の反射神経の賜物だった。
普段からの鍛錬が役に立った。
世機が盾になってくれたので、沙都子と猶に反撃をするチャンスが生まれた。

沙都子は気合を込めて手のひらで一撃を鬼に当てる。
沙都子の攻撃の後に、猶は隠し持っていたご信用のスタンガンを取り出して鬼の首元を狙う。
意外なことにこれが効いてくれた。

鬼が怯んだ隙に世機は思い切り体重をかけて、鬼を突き飛ばした。
その際に呪力を送り込む。

「何を隠し持っているんだMr.」
冗談のつもりではなかったが、ついこのような言い回しが出てしまった。
鬼は「フン」と鼻を鳴らして、それでも世機の問に応じてきた。
「お前に答える必要はないな」
悪役お決まりの答えに、猶でさえも吹き出しそうになる。

「口の達者な鬼ね」
沙都子がいつもの札を、ポケットから取り出した。
「口の達者なのはお互いだな」
鬼は素早く間合いを取り、世機に１撃を放った。
３人は狭い部屋の中、上手く避けきれた。

しかし猶は実戦慣れしている２人とは違って、テーブルにスネをぶつけてしまった。
猶は顔を歪めたが、流石に痛がっている余裕はなかった。
鬼は空かさずに猶を狙ってきた。

沙都子が猶のカバーに回って、世機が鬼を攻撃する。
狭い部屋で、障害物がある中での攻撃は、動きが制限される。
戦いが長引けば、障害物ごと破壊できるパワーのある鬼のほうが有利になってくるだろう。
一撃で決められるか？
世機は一瞬で狙いをつけて、気をのせた掌打を当てた。

鬼は呻きながら吹っ飛び、壁にぶつかり跳ね返ってくる。
だがしかし、鬼はタフだった。
咄嗟に体制を立て直した。

沙都子が瞬間に札を１枚放った。
青い閃光が走り、鬼はさらにダメージを受けた。

前回と違って今回は鬼のほうが部の悪い勝負となった。
しかしこの程度でやられてしまうような鬼ではなかった。
それどころか、まだまだ余力があった。
だが今回の任務はもうすでに終わっている。

鬼は戦いに興じていたい気持ちを抑えつつ、隙を伺って受けに徹した。
逃げ出すタイミングを狙っていた。

世機も沙都子もそのことを察したから、逃すまいと、鋤を見せまいと、攻撃の手を緩めなかった。

鬼は猶に狙いを定めた。
鬼の能力の一つに、相手の精神を乗っ取ってコントロールする力がある。
精神波の一種で、自分の精神力で相手の行動を奪うのである。
呪術師ならばメンタル面も鍛錬しているし、このような攻撃に耐性も出来ているのだが、猶はまだ未熟である。

鬼は猶に意識を飛ばす。
沙都子と世機の攻撃を避けながらやってのけたのだ。

猶は精神に流れ込んでくる鬼の意識に抗ったが、数十秒でコントロールされてしまった。
鬼のコントロール能力は、効果がほんの数分しかない。
だが、この数分で活路を開くこともできる。

猶は世機に向かってスタンガンを突き立てた。
世機は虚を突かれたようになり、うずくまってしまった。

沙都子の視線も席の方に向いたのを確認してから、鬼は素早く玄関のドアを突き破って外へ逃げ出した。

「夢幻回航」第六話

鬼の支配が切れたのだろうか。
鬼が外へ逃げ出してしまってから、猶は脱力してくずおれてしまった。
沙都子は猶を抱きとめた。

猶はほんの数秒で意識が戻った。
「鬼の意識が流れ込んできて、やつの目的がわかりました」
「？」
「やつの目的は封筒に入った手紙です。手紙の中に書かれていることは、仲間が横領したお金の流れです。どうやら過激派やテロ組織に流れていたようなのです。小林さんはその証拠を掴んでいたらしいのです」
猶は一息に言葉を並べてから、また気を失ってしまった。

コントロールされている時に、鬼の思考が流れ込んできたということか。

世機は記憶を探ってみる。
確かコントロールされる側に思考が流れるなんてことはないはずなのだけれど、なにか原因があるのかな。
猶の能力？
不確かな要員だけれども、これだけ細かく言えるのはどういうことか。
まあ、精神病の中にはこういう細かい嘘をつく者も居るらしいからな。
でも、猶が嘘を言ったり病気だったりすることはないと思うのだが・・・。

「しかし、どうしようか、コレ」
沙都子が辺りの参さんたる様子を見回して、額に手を当てた。

遠くからサイレンの音が聞こえてきた。
騒ぎを聞きつけて、誰かが通報でもしたのかも知れない。

鬼も世機たちも結界を張らなかったから、騒ぎを見られでもしたか。
とにかくモタモタと時間を浪費するわけには行かなかった。
急いで壊れた玄関ドアから外へ逃げ出した。

猶が気を失ったままなので、車は仕方なく世機が運転することにした。
沙都子も運転したがったが、猶の介抱をしてもらうことにした。
オレが触って怪我の確認なんて出来ないものな！
世機はそそくさと運転席に潜り込んだ。

猶はしばらくしてから気がついた。
外傷はなかったようで、気がついてからも痛がったりしなかった。
露出している肌からは、血が流れたあとや傷などはないように見えた。
沙都子は猶を楽な格好にしてあげた。
狭い車の後部座席に足をくの字に曲げて、猶を寝かせたのだ。
そして膝枕で優しく頭を庇ってあげた。

「ベルトできないから気をつけてね」
沙都子は言ってから猶を支える手に力を入れた。
「分かっているって」
と言ってから世機は車をスタートさせた。
電気自動車なのでスタートはトラブルもなく上手くいった。
音も静かで、スムーズな加速だ。

このモデルは、高性能の水素発電機を搭載しているので、燃料さえあれば電池切れの心配もなく走行ができる。

「先生の所へ行くか」
世機が言った。
この先生というのは沙都子と世機の師匠ではない。
全日本呪術師連盟のお抱え医師である岩本佐治（いわもさじ）のことである。

「佐治先生の所は、ここからだと４０キロはあるよ」
沙都子が猶をシートから落ちないように押さえながら言った。
「あそこは慣れているってのもあるけれど、なんか他の先生には任せたくない気がするんだよね」
「霊的な感？」
「というかやっぱり慣れなのかな」
「嫌な感じがする？」
「そうだな～」
こういった世機の感はよく当たるのだ。
モヤモヤするとかイヤな感じがすると言った時の世機の感覚的な判断は、信用に値すると沙都子は思っている。
その感覚で何度も窮地を救われている。
だが、当の世機はと言うと、その感覚に頼ることもなく、あくまで理性的に物事を処理しようとする。
今まではそれが世機の持ち味となっているのだが、今回は吉と出るのだろうか。

沙都子も予感のようなものを抱いてはいる。
しかし明確な不安ではないので、彼女は口にしなかった。
だが今回の相手に対しては少し危うい気がしてならない。
何が危ういのかそれも予感的なものでしかない。
だが、２度も３度も先手を取られていることから、楽勝で勝ちきれる相手ではないという思いが沙都子の脳裏にも浮かぶ。

沙都子は猶から視線を離して、ぼんやりと窓の外を眺めた。
明確な不安ではないと言ったが、事件の先が切りの向こうに隠れているようで何も見えていないのが気に入らなかった。
流れ過ぎる車窓の景色を見ていると、早くこの状況をなんとかしなければならないと思う。

世機はタクシーのナビ機能は使わないで目的地を目指していた。
もちろんナビは切っておいたのだが、いつの間にか自動的に画面が表示されていた。
通知音が響いたので、沙都子と世機の注意がナビの画面に向いた。
そういえばこんな機能もあったんだっけ？
世機は画面に写った丸メガネの可愛らしい女子の顔に見覚えがあった。

「こんにちは、山村紅葉だよ、よっろしくね～」
まるでロボットの音声。
いや、これは本当に合成音声での挨拶。
通信機能。
「紅葉さんがなにかようでも？」
沙都子が答える。
世機は運転に集中しないといけないので、対応は沙都子に任せることにした。

カタカタカタと、パソコンのキーを叩く音が響く。
「業務連絡です」
またしても合成音だ。
しかも言葉がふざけた言い回しに聞こえるような抑揚の付け方である。
「業務連絡ですか」
沙都子はイライラする気持ちを悟られないように、落ち着いたトーンで言葉を選んだ。

また打鍵音が響く。
「この事件に協会がどの様に関与しているかですが、少しだけわかりました」
本当にこのロボ音声は人を苛つかせるな、と、沙都子は思いつつも、紅葉の次のメッセージを待った。
「協会は小林さんからお金を奪った組織を追っていたらしいのです」
「里神翔子等を追っていたという事ですか」
またキーを叩く音が響く。
「詳しいことはまだ分かっていませんが、協会は敵ではないということです」
「あなた方はどこへ向かっているのですか？」
紅葉は一気に続けて、さらに沙都子たちに問いかけてきた。
「ドクター佐治のところよ」
沙都子が答えると、またカタカタカタと音が響く。
「ではそこに、協会からの協力チームに行ってもらいます」
「こちらで鬼との接触があったのだけれど、分かったことを伝えておくわね・・・」

沙都子は猶が倒れる前に言ったことをそのまま伝えた。

「わかりました。協会の人にも伝えたほうがいいでしょう。ご苦労さまでした」
紅葉の合成音は、ひょうけた調子を終始保ったまま通信が切れた。
沙都子は紅葉の態度に腹を立てたが、前に会った時はもっと非道かったのを思い出して、それでもマシになっているのかなとも思った。
多少ではあるが、紅葉の事情を知っていたので、思うところはあっても、本人には言わないでおいた。
だが、今度直接合うことがあったら、そのときには言ってやろうかなとは思っている。
通話が終わり、紅葉が画面から消えるのを見て、沙都子は紅葉の容姿がが可愛らしくて、その事が癪に触っているのを意識しないようにしている自分に、笑ってしまった。

「楽しそうだな」
自分の心中など知らない世機の言葉に苛立ちを覚えながらも、沙都子は協会からの協力者のことをどう戦略に入れるべきか思いを巡らせてみる。
「会ってみないとな」
「？」
「頼りになるやつだと良いけれどな、協会の人たち」
どうやら世機も同じことを考えていたらしい。

いつの間にかドクター佐治の診療所の近くまで来ていることに、沙都子はやっと気がついた。
ドクター佐治の診療所は、郊外の森の近くにあった。
鬱蒼と茂る森を後ろに、廃校となった小学校を買い取って改装した診療所が建っていた。
小学校の建物だあから、診療所としてはかなり広い。
病院と言ってもいいくらいの大きさはあった。

沙都子と世機の２人は猶を車に中に残して、病院の中へと入っていった。
中央のかなり広い神殿のような石造りの玄関を入っていくと、受付と書かれた窓口と、少し広くなった廊下に６個ほどの長椅子を置いただけの待合所があった。
廃校と言ってもコンクリートと石造りのしっかりした建物である。
廊下の照明は、節電の意味もあって消灯していたが、窓からの明かりだけでも充分に明るかった。

廊下の先に診察室と書かれた看板があった。

教室の一角を板で仕切って改装しただけのものであったが、内装と色調はかなり洗練されているように思えた。

開け放たれた引き戸を潜ると、中で医師がタバコを加えていた！
「受付は通ったのか？世機」
ガッチリとした体格の標準的な身長の男だった。
「受付は誰も居なかったよ」
「またサボっているのか、あいつ」
医師は良い、タバコを灰皿に押し付けた。
灰皿も溢れそうなくらい吸い殻で一杯だった。

沙都子はさも煙たそうに目を閉じたり開いたり、口元に手を当てて軽く咳をしてみせたりて、反対の掌で煙りを払う仕草さえしてみせた。
「診察室でタバコなんて、あんた本当に医者なの？」
沙都子はまだ煙たそうに言った。
それからタバコの匂いに我慢がならないと、臭そうに鼻をつまんだ。

「なんだ、沙都子、居たのか、オレはがさつな女は見えねぇんだ」
ドクター佐治の言葉に、沙都子のこめかみがピクリと動く。
「本当はアンタの所になんて来たくないんだけれどね、患者さんよ」
「どこに居る」
患者と聞くと、それでも医者の心が動くのか、顔つきが変わった。
眼光も幾分鋭く見える。

３人はストレッチャーを用意して、車の所へ向かう。

猶を車から引き出してストレッチャーに乗せると、診察室の更に奥の処置室に連れて行った。

「本当にあいつはどこへ行ったんだ？」
ドクター佐治はぼやいた。
「なんの話をしているんですか」
世機が佐治に尋ねる。
「助手を入れたんだけれどね」
「助手？アンタが？」
沙都子が言う。

「アンタのことだから、巨乳の美女でも金で引っ張ってきたの？」
「馬鹿言うなよ！ちゃんとした弟子だよ」
佐治は少し魔を置いて、さもさも残念そうに、「男だよ、お前好みのイケメンだぜ、沙都子よー」
「イケメンね、それは楽しみ」
こんなやり取りをしながらも、３人は上手く連携して備え付けのベットに猶を寝かせる。

ドクター佐治の診療は、普通の診療とはわけが違う。
心霊治療という類のもので、普通の医師のように器具や薬など使わないのだ。
主に気の流れを見る。
更には霊気というものを見ていく。
生体エネルギーのようなものを利用したり、体のエネルギーが流れやすいようにして、霊障を治してゆくのだ。

ドクター佐治はじっと猶を見ていたが、フウと溜息をついて肩の力を抜いた。
「こいつは単なる霊振だな」
「霊振」
世機が尋ねる。
「霊振ってのはな、霊波の干渉だな。操られたときにでも、霊波が共振を起こしたんだよ。彼女はその衝撃で気絶しているだけだ」
「その時に、相手の記憶など見えることがあるの？」と、沙都子。
「あるな、その子の能力にもよるが、あるよ」
やはり猶の能力なのか。

「しばらく寝かせてやりな、その間、ゆっくりしていきなよ」
ドクター佐治は２人に言うと、休憩室へ案内した。
どうせ客など来ないから、良い話し相手が来たと思っているのだろう。

この診療所はいわばお祓い所のようなものである。
世機たち実践部隊が仕事をしたときにその場では対処できないほどの霊障を負った一般人や術師たちが治療に来るところである。
たまに伝を頼って霊障を治療に来る者も居るが、それ以外は本当に客など来ないのだ。

佐治がお茶を持って来てくれた。
「お茶菓子がほしいね」

沙都子が少々贅沢なお願いをしてみる。
「ねぇよ、そんなもん」
ドクター佐治がぶっきらぼうに答えた。
「ねぇのか、残念」
沙都子は笑いながら答えた。

ドクター佐治とはかなり長い付き合いである。
佐治のほうが５つばかり年上で、修行時代に怪我をすると、まだ見習いの佐治が２人を治療してくれたのだ。
修行時代は難しい相手は先生が相手をしてくれた。
沙都子と世機と慎は雑魚しか相手をしていなかったから、霊障も軽く済んだのだ。
治療師佐治の格好の練習台だった。

「同盟本部から連絡は来ているよ」
佐治が言った。
「相変わらず紅葉ちゃんは可愛いね」
鼻の下が少しだけ伸びている気がする。
佐治はゆっくりとお茶を入れ直す。

世機は紅葉が可愛いというところに頷いてしまってから、沙都子の冷たい視線を感じて思わず背筋を伸ばした。
「かわいい、ね！」
トゲのある言い方に、世機は思わず笑ってしまった。
「協会の人はいつ来るの」
世機がお茶をすすりながら聞く。
佐治も一口お茶を飲み込んで答えた。
「もう少し待ってろや」
「ねぇ、あんた達ってさ、協会とも付き合いがあるんでしょ」
沙都子は佐治に尋ねた。
「ああ、治療師は少ねぇからな」

協会、連盟ともに治療師の育成には力を入れているのだが、ヒーラー能力はなかなか稀有で見つけられない。
そこへきて更に戦闘職よりも人気がなかった。
ヒーリング能力者は戦闘時にも役に立つので、治療師にはならずに戦闘職につく者も多かった。

そんな人気スキルの持ち主である佐治だが、彼が治療師になったのにはそれなりの事情があった。

佐治の家は普通人の家系だった。
霊能力とは無縁の家系だったのだ。
だが、父親は医師で、母が薬剤師だった。

子供の頃から父親の営むクリニックで手伝いをしていたのだが、佐治が高校生くらいの時に一人の子供が左足に出来物ができたと言って診察に来た。
父は不在だったが、出来物くらいならばと軽い気持ちで患部を見た。
その時に患部から立ち昇る黒い霊気が見えてしまったのだ。
そして何も考えなしに、ただ身体が動いた。
感覚だけで患部に手を添えて撫でる動作をしていた。
すると見る間に患部が治り始めたのである。
佐治自身目を見張る体験だったという。
黒い煙のようなものがモクモクと上がり、それとともに出来物が治ってゆくのである。

出来物を治してやってからふと子供の顔を見ると、ニッコリと笑って、眼の前からスッと消えてしまった。
その時の子供が女の子だったか男の子だったか、佐治はハッキリと思い出せないという。
あとで治療師の師匠に聞いたら、神仏にでも気に入られたのだろうと言う話だった。
佐治はその時から奇妙な感覚が目覚めて、霊感のようなものが発露した。
更に心霊や呪術の関与する事件に巻き込まれる事も多くなって、治療師の師匠と知り合い、今に至る。
佐治の父親の経営するクリニックはと言うと、彼の妹が女医として継いでいる。

神霊に導かれてこの世界に入ったものは居るには居るが、珍しい存在であることのかわりはない。
だが、特別視されるわけもなく、佐治も普通の治療師として修行している。
それでも特別なことはあった。
佐治のところには比較的難しい症例の霊障や怪我をした患者が来ることが多く、ドクター佐治といえば、術師の世界ではちょっと有名な存在になってゆくのである。

佐治がタバコに火を点けようと口に咥えると、咥えたタバコを沙都子が取り上げる。
佐治は「チッ」と舌打ちしてもう一本、ポケットから取り出したタバコの箱から取り出す。

沙都子は素早くそれも取り上げる。
「おい、タバコくらい吸わせろよ」
佐治が非難の目を沙都子に向けたところで、来客があることを知らせるブザーが低く鳴った。
「チッ」
佐治はタバコの箱をポケットに仕舞うと、頭をかきながら立ち上がった。

協会からの協力者が来たのだ。
佐治が連れて戻ってきた。

人数は２人、こちらも男女のペアである。
男は如月淳也（きさらぎじゅんや）と名乗った。
身長も体格も標準的なものである。
容姿も沙都子の好みではなかった。
女は如月順子（きさらぎじゅんこ）と名乗った。
こちらは身長が沙都子とほぼ同じくらいで、女性としては高身長だった。
体つきは沙都子よりも華奢に見えた。
年齢は見た目ではよくわからなかった。

身体から漂うオーラが、歴戦の雰囲気を伝えていた。

「椅子が足りねぇな」
佐治は一同を小上がりの畳に座るように促した。

「夢幻回航」第七話

里神翔子と協会の関係が語られた。

里神翔子は元々は協会所属の呪術師だったらしい。
協会員の師匠に育てられたが、彼女は協会の教育機関を使わずに普通の高校を卒業した。
この時に付き合いのあった同性の友達がテロ事件に巻き込まれるのだがその友達を助けようとして、
組織に接触を試みた時に、思想に感化されたらしい。

この話を聞いた時に沙都子が里神に抱いたイメージは、元々素養があったのだろうと言う物だった。
完全に思想が彼女の気質とマッチしているのだろう。
技に迷いがない気がしていた。

何が彼女をそっちの世界に連れて行ったのか、沙都子には少しだけだがわかる気がした。

こういった暴力の絡んだ世界に居ると、何が正義か分らなくなる。
それに戦うことに溺れて行ってしまう。
まるで麻薬のような感覚を味わうときがある。
激しい戦いのあと、高揚感で身を焦がしてしまい、抜けられなくなってしまうのだ。
普通、人を傷つけるのは禁忌であるが、禁を犯す喜びを覚えてしまう、そういった感覚が常に付き纏うのだ。

里神翔子はそういった世界にはまり込んでしまった人間のように感じられた。
里神にとってそちらの世界は魅力的だったのだろう。
思考を打ち切り、会話に集中する。

「こちらの調べた、相手組織の名前です」
如月淳也が組織の名前を言ったあとだった。
沙都子は聞きそびれたが、世機が脳内のメモにしっかりと記憶させておいただろう事を期待して、次に集中する。

どういった経緯で協会が事件に関わってきたのかが話された。
よれによると、小林さんの件以前から、協会は里神の組織について調べていたらしいのだ。
そこへ依頼が来た。
渡りに船とばかりに協会はこの事件に関わってきた。
里神のことについては協会にとってはガンのようなものだったのだろう。
協会にとってもテロ組織と関わる元協会員などは放おっておける存在ではないのだ。
拘束して、警察にでも引き渡すつもりだったか。

とにかく協会と里神翔子の関係についても語られた。
もちろん全てが語られたわけではないだろうが、おおよその関係はわかった。
それだけでも収穫だった。

世機は協会員2人の体躯から繰り出す技を想像してみたが、うまく想像できなかった。
気になるところではあるが、どうせ聞いても教えてはくれまい。
技は術師にとっては命。
体術は身を守るための手段というばかりではない。
体術は技を決めるための方法でもある。
だから手の内などは聞いても教えてはくれないのだ。

「別々に動くというのですか」
世機の声が、沙都子の思考を現実に戻した。
「ええ、そのほうがお互いにいいのではないかと思いますよ」
如月淳也がお茶をすすりながら言った。
のんきにお茶など飲みながらとは、やはり何かズレている気がする。

「しかしそれではなんのために此処へ？」
と、世機。
「連携はします。もちろん情報の共有も」
今度は如月順子のほうが、沙都子と世機に交互に視線を送りながら答えた。
「ネットのアドレスだって教えちゃいますけど」
順子はわざと少し色っぽい仕草で世機を見る。
からかっている。
沙都子と気が合うかもなと、世機は微笑む。

沙都子はムッとしたが、他には何も反応しなかった。
順子もこの場をややこしくするつもりがないので、からかうのはもうやめにしたようだ。
世機も、相手の如月淳也も、心なしかホッとした表情が浮かんだ。
ドクター佐治はヤレヤレという表情である。

「クライアントの小林さんとはどういった関係ですか」
世機が淳也に聞く。
「小林さんの兄弟が、彼の勤務する会社に居るって知っていましたか？」
「その弟さんからの依頼で動いていました」
言ってからのどが渇いたのか、お茶をすする。
淳也の様子からすると、直接動いていたのは彼らだなと、世機も直感でわかった。
話しぶりから察したのもあるが、やはり感が働いたというべきだろう。

「弟さんが居たのですね。本人からは何も聞いていなかった」
世機は自分の不覚を悔やんだ。
「実は弟さんにもお金を貸していたようです」
「弟さんに」
「はい、200万円ほど」
「弟さんの名前は何というのですか」
「名字は同じで、名前は直之さんです。直之さんの名前は小林さんのリストには載っていないはずです」
リストというのはおそらく小林さんの教えてくれた借金トラブルを起こした人物のリストのことだろう。

「身内のことなので、教えなかったのかも知れませんね」
調査をし始めたばかりなので仕方がないとは思ったが、そんな事も知らなかったのかと言われているみたいに思えて仕方がなかった。
世機は目を伏せて聞いていたが、またゆっくりとまぶたを開けた。
気合を入れ直す。

そうすると、考えを改めないとな。
小林さんの弟である直之さんが真犯人、呪殺の依頼主だという事も考えられるわけだ。
推理を位置から立て直さないといけないな。
世機は頭の中の靄が少しだけ晴れた気がした。

「話は済んだかね」
ドクター佐治は２組みを見比べて、なんとなくではあるが、よく似たペアだなと思った。
心なしか服のセンスも近いようである。

それにドクター佐治は如月ペアとも付き合いがあった。
治癒師、治療師はこの業界も人手不足である。
協会と同盟の術師ばかりではなく、海外からも引き合いがあるのだ。

海外から、特に隣の国からも、ドクター佐治の治療師としての力を求めて患者が来る。
世機や沙都子は何度もその人脈に助けられた事がある。
あとで如月ペアのことを聞いてみようかな、世機は脳内メモにインプットした。

だが、そのチャンスは意外なことに相手側からやってきた。

打ち合わせと言うかちょっとしたお話ではないかと思うのだが、２チームの会合が１時間程度で終わってしまった。
このまま帰るのもなんだか寂しいとでも思ったのだろうか、如月淳也が神憑世機にプライベートな話を振ってきた。

「お二人はどうしてこの世界に？」
世機は手短に生い立ちを話してやった。
如月2人を信用したわけではなかったので、本当に手短に話した。
「そちらのお二人はどうして・・・」
沙都子が切り返してくれた。

如月淳也と如月順子は、呪術師の家系に生まれたのだそうだ。
2人は兄弟で、淳也が弟だという。
年は同じ。
ということは双子だ。
もちろん一卵性ではない。

両親は高名な術師というわけでもなかったので2人は普通の子供と同じ幼年期を過ごしたらしい。
小説や漫画にように両親が殺されたとか、悲劇的な展開もなく、普通に呪術協会の運営する学校へと進んだようである。

如月姉弟の両親は未だに健在で、呪術師として活動しているらしい事も語ってくれた。
世機と沙都子は余計なことだと思ったのだが、如月姉弟からは愚痴も漏れた。
いつも姉弟2人でつるんでいるために、恋人同士に間違われる事が多いという。
互いに彼氏彼女ができないから、その事が問題なのだとか。

世機は、そんなの悩みでもなないのじゃないの？と内心思いながらも、「離れて仕事をしたらいいのでは？」
と言ってみた。
「姉弟特有と言うか双子だからか、わたしと姉は相性が抜群なのですよ」
この場合、相性とは霊力や気力のことだろうか。
「男と女の姉弟というのもあるのかも」
沙都子が言う。
「そうですね。困ったものです」

本当に困っているのかなと思うような表情を浮かべて、如月順子が口を開いた。
なんとなく順子の性癖がわかった気がして、沙都子と世機、それとドクター佐治はニヤリと微笑んだ。
淳也はなんのことかわからないと言った素振りで、3人を無視した。

この様子を見て、沙都子はこの2人を信じてみてもいいかなと思い始めてきた。
如月姉弟の話が終わると、あと5分ほど雑談をしてから猶のところへ行った。

猶はまだ寝ていた。
寝顔が可愛い、とか思ったことを沙都子には悟られてはいけない。
世機は猶を一瞥すると、佐治の方に視線を移した。
「しばらく放っておくしかないな」
佐治は猶を見ながら答える。
「話を聞いてみたいのですが」
順子が言う。
「そうだね」
淳也が相槌を打つ。

沙都子がこれからどうするのか尋ねたい様子で、視線を世機に向ける。
世機もどうしようかと思っていたものだから、二人して顔を見合わせることになった。
「この子は霊震盪とでも言う症状なのだ」
ドクター佐治が説明を始める。
この我の他の4人が聴き入る。
「霊震盪というのはな、霊体の共鳴現象だ」
「相手の霊体や意識に触れて共鳴を起こして、力負けしてこうなったのだ」
ドクター佐治が手短に猶の状況を説明する。
「さっきと違うんじゃ？」
沙都子が突っ込む。
「判断が難しいんだよ」
ドクター佐治はしれっと言って、あかんべへと舌を出しそうな顔で沙都子を見た。

「そうなんだ」
沙都子が言う。
「この症状は珍しいんだ」
ドクター佐治は少し考えてから、「この子、感応能力とかあるのかな」と言った。

「感応能力、テレパシーのことですか」
順子が尋ねる。
「というか、霊媒のような力かな」
「巫女の気質ということですか」
今度は淳也が質問した。
「近いが、彼女のは意識してやるのじゃない。無意識に同調してしまうから、テレパスのようなものかな」
佐治が答えて、更に続けた。
「テレパスでも此処まで共鳴するのは珍しいんだよ」

「へぇ〜、猶ちゃんはレア能力者なんだ」
沙都子はちょっと嬉しげに言う。
愛弟子を見る師匠とでも言うところか。
師弟関係を結んだわけではないが、沙都子は猶の指導役を買って出るつもりで居るから、そういった気持ちになるのかも知れない。

「衝撃にもよるが、半日くらい芽が冷めないかもな」
と、ドクター佐治。
「じゃあ、タクシー会社から、彼女の身内にでも連絡を取ってもらわないとな」
世機がタクシー会社に電話をして、猶の状況と容態を説明した。
会社の方から同盟にに連絡を取ってもらったが、世機の方からも山田に連絡して、紅葉にも連絡を取ってもらった。
紅葉からは無理にしても、山田の方から家族などに連絡が行くだろう。
猶の住所や電話番号なども聞いておくのだったと悔いた。
沙都子のやつも聞いていなかったのには驚いたが。

「任せてもいいのかな？」
沙都子が言った。
「車はここに置いておいていいのかな」
世機が佐治に言う。
「ああいいよ」
「あとでタクシー会社の人が様子を見に来るそうだよ」
世機は言うと、タバコを吸い始めたドクター佐治にしかめ面を向けた。

「それにしても助手さんは一向に姿を見せないですね」
世機が言う。

「あいつはもう来ているよ」
ドクター佐治が不思議なことを言う。
先程から人が出入りした気配はない。

「人が出入りしたら気が付きそうですがね」
世機が言う。
「込み入ってきそうなので私達はもう引き上げます」
しばらく黙って様子をうかがっていた如月淳也が言った。
如月姉弟の片割れ、順子も頷く。
2人は猶の様子を確認してから廃小学校の跡地から出ていってしまった。

如月姉弟が出ていってしまってから、沙都子と世機はドクター佐治に助手さんのことをしつこく尋ねた。
ドクター佐治は頭をかいてから、困ったように唸った。
「どう説明したらいいのかな」
「なにか不都合でもあるの」
沙都子が更に問い詰める。
「なんていうかな」
佐治が頭を掻いた。
「幽霊なんだよ」
「幽霊！？」
沙都子と世機が同時に声を上げる。
「正確に言うと霊体、幽体」
佐治が面倒くさそうに言って、手にしているタバコを灰皿に押し付けた。
「幽霊って」
沙都子は意味不明とばかりに両掌を上にして少し上げて見せた。

「まあ、使い魔ってところさ」
ドクター佐治が言う。
「式神とかそういった類ですか」
今度は世機が聞く。
「ああ」
「式神は禁止されているんじゃ〜」
式神のような神霊を使役するのは禁止されていた。
世機がその事に気がついて尋ねる。

「そうなんだが、実はある事件でオレが引き取ることになった式神なのさ」
佐治は思い出しながらポケットの中のタバコに手を伸ばす。
沙都子はそのタバコを素早く取り上げると、手元に引き寄せた。
「なにすんだよ、返しな」
不快そうにドクター佐治が沙都子からタバコを奪い返す。
「やめなよ～」
と、沙都子。
「うるせぇんだよ」
ドクター佐治はタバコを吸うのをやめて、タバコの箱をポケットにしまった。

「お、来たな」
3人の視線が集まる真ん中らへんに青白い光が、蝋燭の火のようにチラチラと灯った。
ドクター佐治以外の2人は、初めて見るので少しだけ身構えた。
「すみませんでした。辺りに怪しい気が居たものですから」
頭の中に声が響いてきた。
沙都子と世機は更に驚いて、思わず耳を覆ってしまった。

「驚いたかい？」
ドクター佐治が意地悪く笑う。
「喋る式神？」
と、沙都子。
「わたしは使い魔ですが、ただの使い魔ではないですよ」
頭の中に、また声が響いた。
「西洋の魔術師、呪術師たちはサーヴァントと呼びますが、使い魔よりは利口です」
頭の中の声は更に続ける。
「わたしの名前はキルケーといいます」
サーヴァントである幽霊はキルケーと名乗った。
キルケーって、聞き覚えがあるな。
世機は記憶をまさぐる。

キルケーって、ギリシャ神話の魔女ニュンベーだったかな。
女神とも呼ばれる存在。
イシュタル相当の女神だったか？
「あなたは女性なのか」
世機は声に出して尋ねた。
「わたしが女か？この状態じゃ子供も作れませんが、魔女と呼ぶ者たちも居ます」

キルケーは答えた。
ざんねんながらか彼女？は青白い炎のようにしか見えないから、その表情はわからなかった。

「あなたは魔女なの？」
今度は沙都子の番。
「わたしが魔女かどうか、この名前を女神と言う人も居ます」
誤魔化す知恵のある使い魔か。
沙都子も世機も凄いものを見てしまったと思った。

呪術師の世界では、よほど上位の霊でない限り、これほどの知恵を使い魔には与えない。
ということは、名前通りの高位霊ということになる。
ひょっとしたら本人ということも？
まさかな！
と、世機と沙都子は思った。
本物だったら凄いことになる。
なんせ女神級だから。

「猶を診てどう思う？」
ドクター佐治がキルケーに尋ねた。
キルケーは少し迷ったのか、間を置いて答えた。
「彼女の状態は、本人の能力によるものだと思われます」
頭の中に声が響くというのは、気持ちの悪いものだ。
テレパスや霊媒師や、精神疾患の統合失調症の患者はこのような気持ちの悪い感覚を味わっているのだなと痛感した。

キルケーは更に続けた。
「彼女は稀有の感応者です。多分霊媒としても最高の気質です」
「ただ、気になるところは今このときにも奴らの気が彼女に取り憑いているというところです」
キルケーの言葉に、ドクター佐治が動いた。

佐治は猶のところに急いだ。
他もあとに続いた。

ドクター佐治は、猶の額に手を当てると、念を込めて送り込んだ。
猶の体がビクンとハネ上がり、何度か体が上下した。
猶の体から薄黒い煙のような気が立ち昇る。
その煙のキルケーが吸い取ったように見えた。
「こうやってエネルギーを補給しないといけないのです」
食事のようなものか？
キルケーはやっぱり魔女の名にふさわしいもののようだ。

「サンキューな、キルケー」
ドクター佐治が言う。
キルケーが吸い取らないと、邪気を払うのが面倒なのだ。
「猶ちゃんは大丈夫なの？」
沙都子が聞く。
「当分はな」
と、ドクター佐治。
「当分？」
「ああ当分だ」
ドクター佐治は続けた。
「完全じゃねぇ。おそらくリンクがつなかがっている。しばらく置かないと、また同じやつに接したら、乗っ取られるかもな」
佐治の言葉に、これ以上猶を事件にかかわらせるわけには行かないのだなと、沙都子と世機は理解した。

ドクター佐治の処置が終わって３０分ほどしてから、猶はやっと目が覚めた。
猶は大きな欠伸をしたが、ドクター佐治はそれが普通の反応だという。
猶は暫くぼーっとしていたが、次第に意識が戻り、正気を取り戻した。
「もう遅いし、泊まっていけ」
佐治が猶に言う。
このまま返してはなにかあるかも知れない。
佐治なりの気遣いであった。
猶もそれが分かったのか、それともまだ体調が優れないためか、入院を承知した。

玄関に人が入ってくる気配がした。
どうやら猶の会社の人が様子をうかがいに来たらしい。
声がしたので、佐治が応対に出る。
そして、猶の会社の上司を猶の居るこの部屋に案内してきた。

「夢幻回航」第八話

猶は結局ドクター佐治の所に入院となってしまった。猶の上司は事情を聴いて、猶の容態を確認してから帰っていった。

沙都子と世機も家に戻ることを決めた。

猶のことは心配だったが、佐治に任せておけば大丈夫だろう。力の抜けた足取りで、ゆるゆるとドクター佐治の病院をあとにした。

廃校の跡地の病院をあとにして、玄関を出たところで、うす暗くなってしまった空を見上げた。昼間の時間が短くなる季節だとはいえ、佐治のところに居た時間がそれだけ長かったという事だ。この辺りはまだ夜空に星が見えるほどには、光害の影響がが少なかった。空には一番星が瞬いていた。沙都子は無理矢理に思考を切り替えようと、明るい調子で「今晩のご飯は何」と、世機に尋ねてみた。世機は意地悪く笑うと、「今日はおめぇの番だよ」と言って沙都子の方をポンポンと叩いた。

「レトルトのカレーでいい？」「明るく言ってもだめだね、ちゃんと作れ」世機は容赦なく言ってのけた。沙都子の料理嫌いは子供の時からだが、それは師匠の稜華（りょうか）の影響でもある。なにせ２人の師匠である稜華は家庭的な事が苦手で、修行のためと称してすべて世機にやらせたような人である。沙都子と槇は師匠と一緒になって、「女だからって家事をやらなければいけないなんて間違っている！」とか言い出す始末だった。

師匠は弟子たちに公平に仕事を割り振ったが、沙都子と槇の２人が師匠の真似をして、世機に仕事を押し付けてくるのだ。それでも槇の方は年頃になってくると、料理をおぼえ、家事をやるようになった。でも沙都子はあまりそういったことには興味が出ることはなかった。まあ、それでも最近は台所には立つようになったのが。

そんなことを思い出しながら歩いていると、眼の前に電車の駅が見えてきた。しかし不便だね。世機はつくづく思う。車やバイクならば、簡単に帰宅できるし、目的地に移動できる。なぜ師匠は電車やバスを好んだのだろう。敵からの攻撃を避けたいというのならば、猶の車のようにしても良いはずである。

そう言えば師匠は、電車やバスの待ち時間に考え事ができるって言ってたかな。思考をまとめるのに丁度いい隙間時間だって言っていた。オレも先生に倣ってやっているわけではないが、そういった用途に使っている。音楽を聴いたり本を読んだりというのは、あまりやらない。

もちろんその程度の時間では、ゆっくりと思索に費やせるものではない。あくまでもまとめの時間。その時にあったことをコンパクトにまとめて、頭の中で整理するための時間。そういった使い方しか出来ない。充分に思索を巡らせるのは安定したねぐらに帰ってから、軽く酒でも飲みながら、というのが師匠の稜華からの影響である。

師匠の稜華はよく酒を飲んだ。夜になるとグラスを傾けながら、本を読んだり、なにか調べ物をしたり、連盟に提出する書類などを仕上げていたものだ。そんな姿を子供の頃から見ていたので、沙都子も槇も、そして世機も、酒は自然に飲むようになり、師匠のように夜の寛いだ時間を持つようになった。

太らなかったのは、日々の鍛錬と、節制のおかげか。

沙都子は暮れゆく車窓を眺めていた。この辺は田舎なので、電車に乗る人数も少なくて、楽に座れる。シートにもたれ掛かり、首を回して世機を見やる。世機は肩や首を回してコリを解しながら、関節を鳴らしたりしている。沙都子も真似をして、肩を回してみるが、なんだか落ち着かない。猶のことが頭をよぎる。心配だったが、ドクター佐治はああ見えて意外と名医の名で知られている。彼の伝説は、枚挙につきない。だが、猶とこの事件の関わり方というものを考えて、猶と関わらなければならないか。猶はどう思うだろう。一緒に仕事をしたがっていたし、どうすれば良いものか、沙都子は注意しなければならないと思った

人が少ないから、世機は目立たないようにスマホを取り出した。メッセージを送るだけだから目立たないようにする必要はないのだが、同盟支給のスマホは色がエグい！どうしても目立ってしまうので、世機はコレを使うのを遠慮したい気分だった。紅葉と連絡を取って、猶の事を直接伝えたほうがいい気がした。猶は紅葉のグループの構成員であるから、それが筋だろう。連絡先は登録されていなかったので、山田にメッセージを送って、つなぎをつけてもらった。

山田によると、紅葉は極度の人見知りというか人嫌いなので、よほど仲良くなった者以外は連絡先やアドレスの類は一切教えないのだという。よくそんな状態で仕事が出来るなと思ったが、そこは山田がうまく執り成して居るのだろう。女性に苦労させられると

いう点で、世機は山田に親近感があった。

数十秒後、山田からメッセージが入った。山田によると、世機のアドレスを教えたから、紅葉の方から連絡するということだった。紅葉からの連絡を待つ間、普通の人々と同じように、ネットのニュースをチェックした。

沙都子は子供のように窓辺の夕日を眺めていたが、世機がスマホを取り出したのを見て、何をするのか興味があったようで、世機の手元のスマホの画面を眺めていた。「紅葉ちゃんに連絡？」「ああ」「貴方好みじゃない。ドキドキする？」時々こういった意地悪な表情を浮かべる。オレを試しているのか？世機は「フッ」と、息を漏らした。「バカ言ってんじゃねぇよ」もう若かりし頃と違って、沙都子のこのような態度に照れるような精神状態ではなかったが、ほんの少しだけ嬉しかった。

沙都子は破天荒なところのある女である。自分が見てやらないとなと、世機は思っていたが、沙都子はそんな世機に甘えているように見えた。恋人同士と言うよりは、兄妹に近いのかも知れない。肉体を重ねても、籍を入れるまで踏ん切りがつかないのも、そういった関係性もあるのかも知れない。沙都子の妹の槇などは、早く結婚しろとうるさく沙都子に言っていた。「おねぇちゃんが結婚しなきゃ、わたしが行けないんだからね」と、会うたびに言ってくるらしい。

事件とは関係ない事だが、沙都子との事はなんとかしなければと、世機はいつも心のどこかに抱いていた。この事件が解決したら、考えてみるか。そんな事を考えていると、スマホの通知が出て、紅葉からのメッセージが入ったことを知らせた。

メッセージツールのアプリを動作させる。今回はメッセージテキストなのもあってか、タクシーのときのようないらない自己紹介は継いていない。可愛らしいアバターの画像が脇に出て、吹き出しでメッセージが表示される。”こんばんは、かな？”世機は気の利いた反応をしようと思ったが、思いつかなかった。それでも返事を入力する。”こんばんは、先程はどうも””面白くないこたえ。で、今回は何が聞きたいのですか”紅葉の反応に、世機も苦笑する。”猶さんのことです。貴方にも誤っておかなければと思ったのです”” どうせ猶が押しかけたんでしょ”紅葉は猶の性格なんて把握済みとでも言うように吐き出した。”あの子は昔からそういうところがあって、でも噂通りの貴方方の実力ならば、守れたのじゃない？”紅葉のメッセージに、世機は返答できなかった。”貴方方を責めるのは違うってわかるの。でもあの子の性格ならばまた、事件に首を突っ込む。だから守ってあげてください。頼みます”謝るつもりが、守ることをお願いされてしまった。世機はハッキリ言って返事に困ってしまった。猶をこの件にかかわらせたくはないという事を、

紅葉に相談しようと思っていたのだ。だが、紅葉は世機に守ってくれという。弟子の修行のため、とでも言うことか。世機は少し考えてから、”わかりました。出来る限りのことはします”と答えた。猶は”お願いします”とだけメッセージにあらわし、接続を切った。

世機は本当に猶の事をどうしようか考え始めたが、やめることにした。なるようになるさ、そう思って思考を切り替えた。

しばらくすると、２人の降りる駅に到着した。電車内にアナウンスが流れた。ゆっくりと電車が止まり、ドアが開いた。ホームには客が何人か待っていたが、降りるほうが優先という暗黙の了解はちゃんと活きている。沙都子が先に立って降り、続いて世機が降りた。2 人の載った車両からは、沙都子と世機の2人しか降りなかった。

ドアが閉まり、電車が再び動き始める。薄暗くなって照明が照らすホームを歩きながら、世機は沙都子の肩を抱き寄せた。衆目など意識していなかった。本当に自然に、世機の身体が動いていた。沙都子はチラと世機の顔を伺ったが、厳しい表情を見て、何も言わずにされるがままに任せた。

「ラーメンでも食べてく？」沙都子は世機の肩に頭をもたせかけて、ほんの少しやさしい口調で言った。

猶は中村紅葉のお気に入りの一人だった。彼女のチームは女性だけで構成されていたが、彼女が女性好きの同性愛者というわけではなかった。彼女の過去に起因するトラウマが、男性を嫌う要因を作っていると言うだけだった。山田は長い時間をかけて紅葉との関係を築いてきた。紅葉も山田正広にはそれなりの信用と信頼を置いていたから、連盟の、彼女との連絡係は山田が全て行っていた。同じ師匠と言うだけでなく、山田は美少女だった紅葉に対して、他の男のようには好色な態度は取らなかったのだ。山田はイケメンというような男ではなかったが、そういったことは行動で表せる男だった。

紅葉は猶のことが気になって、山田に連絡を取った。世機から連絡をもらって、おおよその経緯と、猶の容態と、ドクター佐治のところで入院ということは聞かされていたが、それでも自分で見ないことには安心できずに居たのだ。

中村紅葉は山田とだけは肉声で話すこともあった。もちろん女性同士ならば、肉声で話すことのほうが多いのだが、妙齢になっても、男性に対する恐れと言うか嫌悪の気持ちだけはどうしても取れずに居た。一生結婚は無理かと自分でも思っているほどだった。

だが、山田との関係は良好だった。恋愛関係に発達しないのは、山田にとっては少々悲しい結果だったが、あれで居て、山田はプラトニックなのだ。

山田が電話に出た。プライベートで使う、山田のスマホだったが、仕事中でも紅葉からの連絡は、山田は必ず受け取っていた。

「どうした？紅葉」山田は電話では中村紅葉のことを紅葉と呼び捨てにしていた。兄弟弟子だし、妹のようなものと公言していたし、山田の性格もあって、山田が紅葉と呼び捨てにするのを、周りの紅葉ファンも認めている様子であった。まぁ、山田のことだから、認められなくても呼び捨てにしていただろうけれど。

「猶のこと」「ドクター佐治から連絡を受けているよ。彼は名医だし、大丈夫だろう」「でもやっぱり心配」「行ってみるか？見舞い」さり気なく紅葉を誘ってみる。山田も猶のことが気になっていたが、あんまり大人数が押しかけても、猶の妨げになりのではと思っていたので、山田にしても遠慮がちだった。「迎えに来てくれる？」紅葉が気さくにこう言えるのは山田だけ。山田もわかっていたが、それを特権とは思っていない。紅葉への感情が処理できなかった時期には、地獄のような日々と感じていた。今は、山田もそれなりに、紅葉との関係を楽しんでいた。

「１８時でいいか？」山田は休憩所で、タバコを灰皿に押し付けた。今から出かければ間に合うかな。

「いいよ」紅葉が答えた。「わたしの家まで来てくれるの？」「いいよ」山田が答えた。「猶の見舞いが終わったら、ラーメンと餃子が食べたい」紅葉は子供のようなことを言い始めたが、山田は笑って承知した。

こちらは里神翔子。

里神は組織からのつなぎを、駅前のベンチでスマホを片手に待っていた。

駅の周りにはカップルも多く、里神翔子の気持ちを逆立てた。

里神も女である。浮いた話もなかったわけではない。それどころは、結婚もしていた。結婚当初はお腹の中に子供もいた。

相手の男は仕事上知り合った同業者だった。里神と同じように、世をすねて、裏の組織に身を投じた人物だったが、２人は結婚と、彼女の妊娠を切っ掛けに、引退を決意していたのである。世情も安定したし、仕事自体減っていたというのもあった。だがしかし、裏世界はそんなに甘くはなかった。

彼女やその夫に恨みを持つ者も多く、命を狙われたのだ。

家に爆弾が仕掛けられて、彼女が買い物から帰ってきた時を狙って、夫とともに居るところを爆破されたのだ。その時に彼女の夫は彼女を庇って、覆いかぶさるようにして息絶えて、爆風と衝撃と、精神的なショックもあり、里神翔子は流産してしまった。

それ以来自分が抜け出すことは許されないのだと思い込み、さらなる深みへと落ちていってしまうことになったのだが、その時の思い出が、カップルを見ると蘇ってきて、自分ももっと違った生き方が出来たのではないかと思って、苦しい思いがその身を焼いた。

手元のスマホがブルブルと震えて、着信を知らせてくれた。里神翔子は急いでイヤホンタイプのヘッドセットを耳に装着して、画面上のボタンに手を添えた。

ワイヤレスタイプのヘッドセットから、クリアーな音質で、男とも女ともつかない中性的な声が響いてきた。「おつかれ、翔子」聞き慣れたその声は、実は翔子にもその正体はわからなかった。おそらくこいつがリーダーなのだ。翔子はそう思ったが、あえて詮索はしなかった。金さえ貰えればいい、翔子はそう思っていた。だから声の主にも大して感情はない。

「何の用なの？」「君のことを嗅ぎ回っている連中のことは知っているよね」声は静かに言った。「協会の人たちでしょう」「そう、その協会と連盟が、小林氏の事件で手を組んだのだ」「やりづらいわね」翔子が言う。声がククと静かに笑い声を響かせる。「いや、我々の計画が勧めやすくなったと言うべきだろうな」「計画ですか」「この国を牛耳る計画さ」「まだそのようなことを考えておられたのですね」「わたしがこの組織を立ち上げたのもそれが目的だったからね」翔子が組織の誘われたときの勧誘の文句。最近ではどこまでが本気なのかわからなかったが、このリーダーは本気なのだろう。

翔子は夫と子供を失ってから、死に場所を探して生きてきたように思う。果たしてこのリーダーは、自分に死に場所を与えてくれるのだろうか。翔子は暗い思いに取り憑かれ、意識がよそへ向いてしまうのを、必死でとどめた。

「我々のエージェントが２人、協会の中に居る。彼らに動いてもらって、協会と連盟を潰す」声は淡々と聞こえるように言う。ただ端々に感情が漏れているのは、声の張りからも推測できるが、この電話の相手は若いのかも知れない。少なくとも自分と同じくらいかと、翔子は思っている。

「エージェントの名前は？」「それは君にも教えられないな」「連携が取れないんじゃない」「向こうには君のことを教えてある。と言っても君はもともと有名人だからな」声はそう言うと、また、低く笑った。「用はそれだけなの？」「鬼が書類を回収する時に、またあの連中と鉢合わせになったそうだ」「あの連中？」「君が戦ったあの連中だよ」

声は幾分楽しそうな調子だった。翔子は沙都子の顔を思い浮かべた。敵対心よりも、こんな自分じゃなかったら、いい友達になれたのではないかと、そんな感触を抱いたのを思い出す。沙都子に対してはなぜか親近感があった。だが、組織が本気で連盟や協会の相手をするのだったら、彼女とも今一度戦わなければならない。今度やりあったら勝てるだろうか？彼女もその相棒も相当に強い。「君は一旦こちらへ戻ってきてくれ」声は続ける。「君の投入タイミングはわたしが考える。君は切り札の一つなんだ」複数ある切り札か。死に場所を求めている翔子には、温存される立場は望んだものではないが、それが雇い主の判断ならば、仕方があるまい。「わかったわ。待機ってことね」「ああ、その時になったら存分に働いてもらうよ」本当に死にたいのならば、自ら命を絶つことも出来ただろうが、翔子のは自殺の意志はない。あくまでも戦闘中の死、それが戦士として自分に課した十字架だった。翔子はスマホを仕舞うと、ゆっくりと立ち上がった。そしてフラフラとどこへともなく歩み去った。

「夢幻回航」第九話

紺色の軽自動車が、6 階建ての集合住宅が建ち並ぶ一角に止まった。ドアが開き、ドライバーシートから降り立ったのは、山田正広だった。建物にはそれぞれ番号が振られていて、2 と書かれた建物に、山田の足は向いていた。

いつもよりも少しだけ身形を整えているあたりが、山田らしからぬところであったが、紅葉からはいつも身嗜みについてダメ出しを喰らっているものから、山田としても、紅葉に合う時はそれなりに気を遣う。

紅葉がそのような事に注意を払う男性が、山田だけだというのは、紅葉ファンの羨望の眼差しを受けた。山田は大して意識もしていなかったが、妬みを受ける材料ではあった。本人は浮いた気持ちなどほとんど無かったのだが、まわりの注意を惹いていることは、山田にもわかった。

最上階の 6 階フロアの一番端に、紅葉の部屋はあった。ドアベルを鳴らして、紅葉を呼び出す。

「いるか？」山田は声をかけたが、中からは返事がなかった。その代わりに物音がして、1 分ほど待っていると、ドアが開いた。いつもの着ぐるみファッションではなく、シックなよそ行きに着替えた紅葉が顔を出した。

紅葉は上目遣いに山田に言った。「どう・・・かな？」こういった仕草が、紅葉ファンが彼女に求める姿なのだろうが、こういった反応が見られるのは山田の特権だった。「良いんじゃねぇか？」山田はまるで妹にでも言うような感情しか表さなかった。

2 人は連れだって建物を出ると、山田の乗ってきた軽自動車に乗り込んだ。はこれからドクター佐治の所へ行こうというのだ。猶の容体を見るというのを口実に、山田は紅葉を誘い出すのが目的だった。男女の感情は遠い昔に薄れていたが、山田はことあるごとに紅葉を誘った。

まだ危うさの残る彼女の精神状態が気になっているのもあるが、山田にとっても妙に気の合う相手だったからだ。普通の出会い方をしていたら、この不釣り合いに見える容姿の二人は、案外と良い関係になれていたかも知れない。

山田は紅葉がシートベルトを着けるのを確認してから、車の始動スイッチを入れた。

「ごめん、クスリを飲まなきゃ」紅葉はクスリを取り出すと、３錠一度に、水なしに飲み込んだ。彼女は精神科に通っていたが、その事実を知るのは山田だけだった。山田は度々、紅葉の服薬を目にしていたが、そのたびにもどかしい気持ちになった。こういった病気には、ドクター佐治の治療もあまり効果はない。紅葉は霊的なもので病気になったわけでは無かったので、普通の病院に通院する必要があった。紅葉のことを哀れむような感情ではなく、やりきれない、こみ上げてくる何かがあった。

山田は思い出したように、紅葉に言った。「そう言えば、ドクター佐治に連絡をとっていなかった」紅葉は薬の空き袋をポーチの中にしまうと、スマホを取り出した。山田は紅

葉の様子を見て、「ドクター佐治のアドレスが入ってんのか？」と、尋ねた。紅葉は、他人にはなかなか見せない表情を、山田には見せる。ちょっと意地悪い表情を浮かべると、「妬ける？」と言いながらおどけてみせた。「馬鹿言ってるなよ。早く連絡しろ」「ハイハイ」紅葉はアドレス帳から、ドクター佐治の電話番号をタップした。

電話に出たのは、ドクター佐治本人ではなく、助手のキルケーの方だった。この助手、実は紅葉がある事件で知り合って、行く場のなくなった彼女を、ドクター佐治の所へ紹介したのだ。

「お久しぶりです」男女どちらともつかいない中性的な低い音声が流れた。キルケーのものだった。紅葉は幽霊でも電話に出ることができるという事に、改めて驚いた。「お久しぶり、キルケー」「わたしだとおわかりですか？」「ドクター佐治はそんな声じゃないもの」「猶さんの事ですね」「これから行っても大丈夫かしら」「ドクターもわたしも、これからの予定はありませんよ」キルケーの声に、紅葉は、ありがとうと言って、通話を切った。「大丈夫だって」紅葉が言うと、山田は頷いた。

山田たちがドクター佐治の病院に着くと、佐治が迷惑そうに頭を掻きながら応対してくれた。「まったく今日はどうなってるんだ？患者を休ませてやれよ」ドクター佐治の言葉に、山田正広と中村紅葉は苦笑いした。

いつの間にか紅葉の脇に、キルケーの光があった。紅葉や山田はもちろんキルケーの接近に気がついていたが、キルケーにはもちろん悪意はないので、放っていおた。だが、キルケーは魔性の存在である。どんな行動原理で動いているかなど、人間の知るものではなかった。紅葉はキルケーにそっと微笑んだ。

ドクター佐治が、猶の泊まっている病室に案内してくれた。この病院は廃棄になった学校を再利用したものだが、入院患者のための病室も、教室や準備室などを改装しただけのものだった。

この病院は、ドクター佐治が自前の資金で開業したものだ。佐治は連盟で修行したものだから、連盟の会員が多く利用しているが、病院自体は連盟のものではなかった。

ドクター佐治に案内されて、個室と表示された部屋に入ってみると、案外と良く出来た内装に驚かされる。ドクター佐治がこだわって、資金をケチらなかった部分である。落ち着いた、木目調の床と、壁も普通の病院と違って、落ち着いた感じの淡い茶色のものだった。木と土の家をイメージしたのだと、ドクター佐治から聞いたことがある。

間仕切りがあって、それなりにプライベート空間が確保できるようになっていた。他の入院患者は居なかった。佐治は奥へと、窓際へと進んでゆく。猶のベッドは窓際だった。入院患者が一人も居なかったので、特等席なのだろうか。鬼からの襲撃があることも想定したら、窓際は危険な気がする。山田も中村紅葉もそう捉えたが、ドクター佐治にはなにか考えがあったのだろう。猶の気持ちをリラックスさせてやろうとか、そんなところか。

猶はベッドの上に座って、夜空を眺めていた。３人に気がついて、向き直る。その目が異様に輝き、突然ケケケと不気味に口をひろげて、怪奇な音で、笑い声を上げた。佐治が身構えた。山田も紅葉も体勢を整える。

「ショックが始まりやがったな」「ショック？」紅葉が言う。「人間の精神が魔に触れると、侵されるんだ」「治るの」「ああ治せる。だがこれは、どうしても２人の協力が要るかな」佐治が、ゆっくりと心霊治療の体勢に入ったことが、中村にも山田にも感じ取れた。

「これからひと暴れしてもらうぜ」ドクター佐治は２人に目もくれずに、猶を見据えて、言葉だけを２人に送った。２人は無言で頷く。山田も戦闘訓練は受けているし、修行時代は師匠について、実践をいくつも経験していた。ただ、実力が一歩だけ及ばずに、実践部隊での活躍をすることはなかったが、普通の人間よりも場馴れしている。中村紅葉に関しては、その実力は折り紙付きだ。

「何をやればいい？」と、山田。「術で縛り付ければいいの？」今度は紅葉だ。佐治は頷いた。「２人掛かりで頼むぜ」佐治が言い終わる前に、猶のからだが宙に浮いた。「ケケケケ」異様な笑い声と、気の流れが辺りを包む。病室の照明が、チラチラと瞬いたかと思うと、点滅を始めた。猶が攻撃を始める前に、ドクター佐治が動いた。それと同時に山田正広と中村紅葉が動きを縛り付ける術を放つ。

戦闘が始まった。２人掛かりで行動を縛っているのだが、それで緒はも猶はもがいて攻撃を仕掛けてくる。紅葉は気配を感じて身を躱すと、背後の仕切りが裂けた。間一髪と言った所か。だが、紅葉の息は乱れなかった。

猶はまた、奇怪な笑い声を上げて、フーッと深く息を出し、また吸い込んだ。これは発作のようなもので、一般的な戦闘とは違う。紅葉もわかってはいたが、実際に見たのは初めてだったので、驚いてしまった。山田も紅葉も、呪縛に集中した。

ドクター佐治は、両足を踏ん張ると、右手に気合いを込めて、右足を踏み出した。それ

と同時に、右手で猶に掌打を打った。さらに同時に気を乗せて、一気に流し込む。

猶が苦しげに呻いて、反対側から何か黒い影のようなものがゆらりと浮かび上がる。まだか！ドクター佐治は、さらに気を流し込む。まだ効かない。

猶の反撃が始まった。先ほどの見えない斬撃が、爪痕のように仕切りや壁、床を切り裂いた。さしずめ沙都子や世機などが居たら、修理代が大変ね、などとジョークも出ただろうが、ここに居るのは、戦闘のプロではない。とは言え、３人はギリギリのところで攻撃を避けることが出来た。本当にギリギリだった。佐治は、服の一部を裂かれて、皮膚からは少しだけ血が滲んでいた。致命傷はないというだけか。

紅葉は咄嗟に山田をガードする術を放ったが、佐治にはほんの少し術をかけるのが遅れてしまった。「すまねぇな、だけど、オレよりドクターを頼むぜ」山田が顔を歪ませて、紅葉に向かって言う。「わかった」紅葉は猶を睨みながら、頷いて見せた。

この場の気が見える人だったら、猶の身体から紫色の淡い光が迸っているのが確認できるはずである。山田からは赤い気が、ドクター佐治からは青い気が、攻防を繰り広げている。紅葉からは透明な、少しだけ白っぽく見える不思議な靄のような気が、辺りを包み込むように伸びていた。

この場で一番の能力の持ち主が、隣にいる小さな女性だとは。山田はチラと紅葉を横目で見たが、不思議と情けないとは思わなかった。紅葉の弱いところも知っていたし、自分はそれをカバーする力を持っている。山田はその事をわかっていた。気合いを込めて、猶を押さえ込む。根比べだな！体力勝負。山田やドクターは多分耐えられるだろうが、紅葉はどうだろうか。能力は、彼女の方が上。だが体力はどうだろう。実戦経験が少ないのも気になるところだ。山田は見かけによらずに、そんなことを気にかけられる策士タイプである。頭で戦闘するタイプなのだ。

ドクター佐治が気を溜めているのがわかった。一気に勝負をかける気だなと言う事が、山田と紅葉にもわかった。時間稼ぎ。紅葉がさらに呪縛を強める。

それでもまだ、猶は抵抗して、呪縛を解こうと暴れ回る。普通の鬼ならば、これだけやれば黙らせられる。

「ありがとよ」ドクター佐治が言うと、猶を殺してしまうのではないかと言うほどのフルパワーで、気を乗せた掌打を打った。また、反対側から黒い影が浮き上がる。今度は猶の

身体から引き離すことが出来た。影がなおも、猶の身体に取り憑こうと、張り付く素振りを見せる。ドクター佐治は大きく息をすると、さらに気合いを込めた。

佐治の一撃で、紫色の猶の気が影を包むように伸びて、影を呑み込んで消滅させてしまった。

身体から流れ出ていた気は治まり、猶はベッドの上に崩れ落ちた。床に落ちないように、ドクター佐治が手を差し伸べた。

彼女を寝かせつけてから、佐治は大きく溜息をついた。

「鬼のパワーと言うよりも、この子の力だな」佐治は誰にともなく呟いた。「紅葉ちゃんには劣るが、凄いパワーだな」佐治は言ってから、脱力して、近くにあった椅子に座り込んだ。「今日はもう大丈夫だよ」「今日は？」山田が言う。「変なのが襲ってこないかぎりという事だよ」佐治は言って、苦い笑いを見せた。

佐治やキルケには防ぎきれないって事か。山田は紅葉の方を見る。「ラーメンと餃子の店ならば、この近くにもある」紅葉は山田の言っている事を察して、少し考えてから返事をした。「出前は頼めないの？」山田はフッと笑って、ドクター佐治に視線を向けた。佐治は山田の意をくみ取って、意地悪く笑った。「病室でイチャつくなよ？」紅葉が真っ赤になって全力で否定したものだから、山田はほんの少し心に傷を負った。その様子を見て佐治は、「すまねぇ」と言って。頭を掻いた。

如月淳也は車を運転しながら、今後の自分たちの方針を考えて見た。だが、運転中のこともあり、あまり集中できなかった。

如月順子は淳也に運転を任せながら、自身は窓の外を眺めながら、思索に耽っていた。協会は、里神翔子に対して、順子達が思うよりも寛容な処置を求めてきた。警察に引き渡すのではなく、自分たちで捕らえよと言うのである。何故かという事は明らかにはならなかったが、里神がテロリストと行動を共にするようになる切っ掛けが、協会になるという噂もあったことから、そのような事実を隠蔽するためのものなのではないかと、淳也などは考えているようであった。

如月順子もその辺りのことは気になったが、むしろ里神翔子の事について、個人のことについて興味があった。里神順子。腕の方は確かなようであったが、協会からの情報は、隠蔽されているような気がしてならなかった。年の頃なら自分と大差ない女が、どう

してテロなんかに染まっていったのか。子供や連れ合いとの関係も言われていたが、勇名をはせた彼女が、本当に宗旨替えするのだろうか。順子にはわからなかった。同性の順子にもわからないのだから、淳也にはわかるはずもなかった。

淳也は協会事務所に報告に変える前に、コンビニエンスストアに寄ろうと、車を走らせた。

７の文字の目立つコンビニエンスストあがあったので、そこへ車を止めた。「何か買う買い？」順子に促す。順子は少し面倒くさそうな表情だったが、自分も降りて、食事や飲み物を購入することにした。店の入り口付近には、未だに灰皿が設置されていて、何人かが店の前でタバコを楽しんでいた。

順子はあからさまに嫌そうな顔をして、タバコを吸う連中を避けて、店の中へと入っていった。淳也はそんな順子を、微笑みながら見ていた。淳也も、順子の後から、自動ドアをくぐると、店内に入っていった。

淳也が店内を見回すと、見知った顔が１つだけあった。淳也は順子を小突いて注意を促す。相手は順子も見知った顔であった。

前の事件での関係者だった。当時は１８才の女の子であったのだが、３年経った今は、妙齢の女性に変身していた。まぁ、化粧が上手くなったと言ったところだ。

雑誌を立ち読みしているところへ近付いていって、二人して声をかけた。「相良さんですね」「お久しぶりです」如月兄妹が言うと、相手は今初めて気が付いたようで、声をかけられたことにも驚いて、ビクリと肩をふるわせた。「お久しぶりです」相良と呼ばれた女性が、マンガ雑誌から視線を離して、二人の方を見た。身長は廃りと同じくらいの、女性としては高身長で、モデルも勤まりそうなスタイルだった。

淡い水色の上着に、ジーンズがよく似合った、モデルでも務まりそうな美人だった。「あのときはお世話になりました」相良さんが言い、頭を下げた。如月淳也と如月順子は、「失礼しました。では、お元気で」と言って、一礼して、相良さんから離れた。その際に、相良も一礼して、また、雑誌の立ち読みに戻った。

「相良さん、美人になったね」順子は淳也に言った。もちろん揶揄う調子が含まれていた。

淳也は否定したが、相良さんが淳也の好みのタイプであることは、身近にいる順子が一番よく知っていた。淳也と順子は、それぞれに別の種類の弁当を買い、急いで車へと戻った。

「協会に行って、休憩室で食べよう」順子が言う。「そうだな」淳也も相槌を打った。淳也は車を教会の建物に向けて走らせた。

「夢幻回航」第十話

如月姉弟が車を走らせていると、ビルが立ち並ぶ影から、何かが飛び出してきて、結構大きな音をたてて車に打つかった。淳也は車を止めて、確認のために外へ出てみた。まだ、周りに人が多く、車も数が多かった。宵の口。というか、まだ時間は２１時位だった。

順子は窓から顔を出して、確認する。「淳也、どうしたの」

如月淳也は車の周りを見回したが、何も打つかった形跡はなかった。後ろから来たトラックが、邪魔になるとクラクションを鳴らしたので、淳也は急いでシートに戻り、車を移動させた。

なんだか嫌な予感がしてならない。今のは、ただに衝撃ではなかった。霊的なもの？順子の方の、今の衝撃に違和感があったらしく、印を結んで何かを唱え始めた。防御の方は、姉がやってくれるから、淳也は安心して運転に専念できた。

暫く車を走らせていると、郊外に出た。仕掛け時はここだな！淳也も順子も身構えると、やはり敵は仕掛けてきた。

左側方から白く輝く光が４条奔る！順子がそちらに意識を飛ばして、イメージの防壁を張る。如月淳也はただ真っ直ぐに、ハンドル操作を謝らないように気をつけながら走行する。

光が車にあたった瞬間、物理的な衝撃とは違う、独特な衝撃波と、バラスの割れる時の音が響いた。凄まじい轟音がした。耳をふさぎたい衝動を押さえながら、如月淳也と如月順子は必死で絶えた。

また同じ方向から、今度は２倍の光の筋が飛んできた。一点集中攻撃！淳也は直感して、攻撃を避けようと、車を加速させた。いくら姉が防壁を展開しているとはいえ、連続して攻撃を受けたのでは、防壁が持たない。先程の一撃は、そう思わせる力があった。

あと６キロも走れば、彼らの家に着いてしまう。そうなれば、有利に戦闘できるが、周りの民家を巻き込むことになる。如月淳也と如月順子は、それだけは避けたいと思っていた。

どこか開けた空き地でもなかったか？淳也は必死で頭の中を検索する。

と、目の前にイベントホールの、かなり広い駐車場が目に飛び込んできた。仕方ない！ここで決めるか。幸いにして、ホールの駐車場まで、車はなく、人通りもなかった。薄暗い街灯だったが、淳也の目にはそれで充分だった。

「順子、行くよ」淳也は姉を、姉さんとは呼んだことがない。順子も淳也を弟と呼ばなかった。２人はいつも名前で呼び合っているものだから、よく、夫婦か恋人に間違われたものだが、今回の淳也のセリフも、どこか場違いな響きである。

「いいよ」受ける姉。

駐車場に乗り入れる時に、スピードが出ていたために、車の腹をこすってしまった。「チッ」淳也は舌打ちをし、自分のドジを呪うだけの余裕は、今はまだあった。

駐車場には何台か車が止まっていたが、淳也はお構いなしに自慢のドラテクを披露して、攻撃に転じた。攻撃担当はもちろん姉。

次の光を、淳也がドリフトで躱すと、姉が車の窓を開けて、光の飛んできた方角に自分の札を放った。淳也は上手く駐車している車の間を縫って、車を走らせた。不思議なことに、淳也が車を疾走させても、誰１人外の様子を確認するために顔を出す者も居なかった。おそらく誰かが結界でも張ったのだろう。しかしこれだけ大きな結界を張るってのは、相当な潤部ガイルだろうに。淳也はそう思いつつも、今は攻撃を避けて、姉が少しでも有利に攻撃できる位置取りを探し回った。

「淳也、そこの広いところで９０度右にターンさせて！」順子の声が飛ぶ。淳也は軽く加速させて、急ハンドルを切って見せた。順子は車の天井に腕を伸ばして身体

を固定させている。タイミングを計って、先に取り出していた札を、半分の６枚ほど、中に放った。

順子の札は、沙都子のとは少し違って、自立して敵をサーチしながら追いかけるように出来ているのだ。札は弧を描き、それぞれの的に狙いをつけて、散っていった。札が散った先は３カ所。少なくとも３人の敵が居るという事になる。

札は２枚ずつ一組になって軌道を描いた。敵が最大何人かなどと言う事は、順子は考えないようにした。見えない敵にすくんでしまっては、勝てる戦いも勝てなくなってしまう。如月淳也は違っていた。淳也は、札の散っていった方角を確かめながら、敵の位置や人数を、おおよそ予測してみた。その予測によって、車の動きを計算して見せた。

順子は彼のそうした戦略眼を褒めて、「あなたが弟で無かったら、抱きついてディープキスでもしてやるわ！」などと言い始めた。「遠慮しとく、キモいし」淳也はさりげなく嫌な顔をして、姉のジョークを躱しつつ、敵からの攻撃も、見事に躱して行った。

「そんなだから、彼女いないんだよ～」順子は札をもう一閃放ちながらも、まだ淳也に絡んでくる。「自分の姉とディープキスするくらいなら、アザラシにキスしてもらった方が、いくらかマシだろうさ」淳也も負けていない。姉が放った札が、全て敵にヒットした確信を得てから、車をまた駐車場から路上へと出した。

まだ敵が追ってくる気配があった。手傷は負わせたはずだが、それでも気配だけは迫ってきていた。暫く出鱈目に車を走らせて様子を見たが、やはりまだ数人の気配がした。３回、光が攻撃してきた。全て躱しきったところで、急に空気が変わって、人気も多くなってきた。結界が切れたのだとわかって、二人はやっと安堵の溜息を漏らした。結界の外では術は使わないのがルールであるから、敵もルールに縛られているのならば。攻撃はないはずである。

あの札は、一撃必中の札で、当たれば暫く動けなくなるくらいの衝撃があるはずなのに、何故敵は追撃できた？順子は自分に落ち度はなかったかと、自分なりに確認してみた。人数が目算よりも多かったのだろうか。それとも、敵の耐性が高く、札による攻撃では効果が無かったのか？様々な要因があるが、どれも想像の域を出なかった。順子は思考を打ち切り、コンビニで購入した、ストローを差し込むタイプのコーヒーを、チュウチュウと音を立てて吸い始めた。

淳也はその様子を見て、姉が相当にいらだっているのを感じた。彼女の攻撃が、ここま

で無力だったのを、淳也は今まで見たことがなかった。淳也は、このまま協会に寄らずに家に帰ろうと、姉に提言したが、順子は黙って窓の外を眺めて、ストローを吸い続けた。

それにしても、敵の正体くらいは確認したかったな。この感触だと、里神翔子では無いだろうという事は、淳也にも順子にもわかっていた。強い敵が何組も居るのではないかという、世機の予感は的中していたわけだが、順子にとっては今回のは、少々屈辱的だった。

順子の実力は、沙都子よりはほんの少し上と言った所だが、それでも、術師の中ではかなりの手練れだった。淳也にしてもそうである。手練れであることには、まわりの者は異を唱える者は居ないだろう。そう言った者達である。それが、退治でき損ねたのである。今回の敵は、本当に難敵なのかも知れない。

淳也はしばらく適当に車を走らせて、やっと自宅に戻る気になった。車をしばらく乗り回して、回り道をしたのは、敵の尾行が気になったのと、このまま帰っては、順子が考え事に集中していたので、邪魔したくなかったのである。彼女は行動派でいて、実は知性派の一面も持つ。活発な性格なので、緻密さを持つという一面はなかなか他人には評されないが、いつも近くに居るだけあって、淳也はよく彼女を理解していた。言動は、少々ガサツではあるが、よく気のつく一面を持つ。まあ、ガサツさが目立つので、見た目はそんなに悪くないと言う者もいるが、恋人らしき影すらもなかった。

そういった見えない面も知っているから、もし自分が弟でなかったとしても、順子には言い寄ることもないだろうけれど。弟の感想などは知らぬ様子で、順子はじっと窓の外を眺めていた。１時間ほどそうして走ってあげたが、頃合いだと、淳也は車を自宅に向けた。何事もなく、３０分ほどで自宅に着いた。

如月淳也と如月順子も、沙都子や世機と同じ様に、協会の寮とでも言うべき、系列の経営するマンションに住んでいた。建物の建築様式や、方位に関する考え方なども、連盟のマンションと似たところがある。霊的な防御などを考えた設計になっている。呪詛を防ぎ、悪霊や悪鬼の侵入も容易ではない、そのような術を施しつつも、建物としての外観の違和感がなくなるように設計されている。

故に、少しだけだが、機能的に使いづらく感じてしまう部分もあった。それは、慣れだけで克服できる程度のものだった。如月姉弟は独立して仕事を受けるようになってからずっとこのマンションに住んでいる。他に引っ越そうと思わないのは、霊的、呪的な防

御仕様の建物など一般には存在しないからだ。このような仕事をしていれば、休める場所を作るのは大変なのだ。呪的な守りという他にも、他の術師も住んでいるから、困ったときには協力体制が取れる。実はこれが、一番大きな利点なのだ。管理費などを含めた家賃は決して安くはないが、それでもここに住み続ける最大の利点なのだ。

呑気なものだが、マンション敷地脇で、畑を耕作している呪術師が居て、彼は作業中だった。この、呪術協会の持ち物も、意外に規律はゆるくて、敷地の空いているスペースを、申請さえ出せば、この様に使いこともできる。野菜づくりなど、呑気なものだと言われそうだが、呪術的には非常に重要なのだ。呪術もやはり、体力や気力の弱っているときには効果が出やすい。つまり、気力体力を充実させておけば、防御力もアップするというわけである。だから、若い呪術師の中にも、畑を営むものが多い。それと、畑を作るもう一つの利点は、食費のことを減らす効果も期待できる。心身と経済的に利がある。

意外に思われるかも知れないが、実はこの如月姉弟や、沙都子や世機も、作物を栽培している。もっとも、本格的な畑というわけではなく、少量の野菜ではあった。さらに術者は呪い返しの意味もあって、植物を身近に置いておく。それと、動物を魔除けの一部として飼っておく者もいる。故に、マンションはペットOKなのである。ペット好きの術者は、絶対に別の所へ移りたくなくなるのだ。

如月姉弟は、姉の順子が、動物を飼育するのがヘタで、世話が面倒といい、動物を飼っても結局淳也が世話をする事になってしまうから、動物は飼わないことに決めている。弟の淳也は、動物を飼いたいとは思っていなかったので、姉をあきらめさせるのに苦労したのだ。

如月順子は、仲間の術師がペットのハスキー犬を連れて歩いているのを見て、笑顔を作って近寄っていった。動物を見ると、疲れが吹っ飛ぶとか、クサクサした気持ちが癒やされるとか言っていたな。淳也はそんなことを思い出した。また飼うと言い出さなければ良いのだけれど……。順子は立ち話も早々に、早速大きなハスキーに抱きついて、撫で始めた。「よーしよしよし」ハグして撫で回している。そういうことを男にでもやれば、その性格でももらってくれる人が居るだろうにと、淳也などはそう思ってしまう。それは反対に、順子の方も、思っていることだった。淳也がもうちょっと、愛想が良くて、自分から離れてくれれば、いっその事嫁でももらってくれれば、自分も安心して結婚でも何でも出来る。そう思っていた。

順子はしばらくハスキー犬を愛撫してから、飼い主にお礼を言って、挨拶をしてから、

身体を離した。「気は済んだ？」淳也。「気なんて済まないよ〜」これで、可愛らしく言っているつもりなのだから、淳也はなんだか呆れてしまった。しかし、姉を可愛いと思ってしまう。プッと吹き出す。

「行くぞ？」淳也の声に、順子は口をとがらせて、小声で何事か呟いた。淳也は無視して先に歩みを進めた。順子も仕方なく、それに従う。「絶対に、ハスキーにする！」順子は決意を呟く。もちろん淳也に聞こえるようにだが。当の淳也は、やはりそう来たかと溜息をついたが、なにも反応せずに、無視して、建物の中へ入っていった。

「絶対にハスキーにする！」順子は再度、音声のレベルを上げて言葉を連ねた。子供かよ……。淳也はおかしくて笑い出しそうになるのを、必死でこらえていた。

それにしても今回の敵は何か違うな。いつもの仕事と、何か違う。連盟との協力の件だってそうだ。いつもならば、協会だけで解決しようとする。何か、事件の裏側に潜む別のものがあるのだろうか？そう考えると、なんだかしっくりくるような気がする。その、裏に潜むものとは？淳也には、それが何なのか、まだ想像も出来なかった。順子は嫌うだろうが、相談してみるかな。

順子は時代が違ったら、一軍の将にでも成れるほどに、豪胆な一面を示すことがある。男の淳也でさえも舌を巻く、そう言った性格を持っている。強情な一面もある。淳也は意識してはいないだろうが、彼は姉のような女性に惹かれるようである。だから、姉との関係は、居心地の良いものなのだ。なにも知らない者が二人を見たときに、二人の関係が恋人のように見えたり、感じたりするのは、二人の相性が、ひじょうに良いためである。故に、離れたくても離れられなくなってしまい、淳也も順子も、そういった関係をなんとかしたくてしょうがなかった。だから、順子は淳也からの相談などは、かなり嫌がった。

淳也もわかっていたが、仕事だから仕方がない。ほんの少しの邂逅だったが、神憑世機はどう考えて、どうやって切り抜けて行くだろう。世機の顔が思い浮かび、淳也は自分が弱気になっているのでは無いかと、少々不安になった。淳也と順子は３階の自分の部屋に辿り着くと、ドアのロックを解除して、中へ入った。

中は整然としていた。と言うか、殆ど物が無かった。生活感が薄い部屋だった。わざとそうしたわけでは無い。この二人には物欲があまりなかった。姉の順子は洋服や、女性の喜びそうな小物などには一切興味が無く、全力で、動物だけを愛していた。如月淳也の方は、それにもまして金銭感覚が発達して、無駄な物は一切購入しなかった。驚

くことに、家計簿などは、淳也がつけていた。ただ１つだけ、淳也には趣味があった。それが車である。淳也の車は改造がされていた。淳也が何年もかけて中古車を改造し、登録申請を出し、自分で作り上げた車だった。車の改造と、ドライブやレース参加などが、唯一の散財方法だった。

淳也の車は、呪術的にも、猶の車以上に素晴らしい防御策が張り巡らされていた。その気になれば、AI での自動走行よりも安全な、使い魔を使った自動運転なども出来るように、自分の使い魔を仕込んであった。ただ、運転が大好きな彼は、戦闘時以外は、この使い魔を使ったことはない。

淳也はこの事件の裏には何かが潜んでいるのではないかという、自分の意見を、姉に披露して、反応を確かめてみた。「裏に、確かに今回は、いつもと何もかもが違う。里神の組織も暗躍してはいるけれど、それだけだったら、連盟との協力なんてあったかしら」嫌うかと思ったが、至極真面な反応に、淳也は驚きを隠せなかった。「だとしたら、どんなヤツかな。里神の組織に命令、もしくは依頼したヤツって事でしょう？」淳也は頷く。「里神の今居る組織って、実はそんなに大きくないのよ」順子は語りはじめる。「協会と連盟が協力しなければいけない相手……、外国の術師の組織？考えられるね」淳也はその考えまでは到らなかった。てっきり里神と同じテロリストかと思っていたが、その方が、連盟との協力の協力というのは納得がいく。順子に聞いて正解だったな。淳也は姉の意見に耳を貸す気になった。

「夢幻回航」第十一話

外国の魔術、呪術系の団体も、表向きは正常な団体であるから、ある程度はインターネットで調べられる。Web でコマーシャルを打つのは、この業界でも、極めて常識的な手段である。淳也は自分の部屋で、パソコンに向かって調査をしていた。ネットの噂はあてにはならないが、何もないところに噂は立たないものである。それ故に、調査の取っ掛かりになるのではないだろうか。

淳也が、テーブル上のパソコンのキーボードを叩いていると、姉の順子が、食事を用意して、持ってきてくれた。この辺りは沙都子とは大きな違いである。順子は意外と家庭的な一面も兼ね備えている。戦闘スタイルの荒々しさからは、想像することは出来ないだろうが、こういったところが、淳也がなかなか彼女を作らない原因かも知れない。姉が何でもやってしまうので、一緒にいると、本当に楽なのだ。シスコンとブラコンのコンビと言って、仲間にからかわれたりする原因でもある。

「ありがとう」淳也はご飯と焼き魚と、味噌汁のことをお盆に載せたセットを受け取る。順子は自分の分も取ってきて、淳也の部屋で一緒に食べようということらしい。淳也は構わずに、パソコンで調べ物を続けていたが、順子が、「一緒に食べましょう」と言って、箸をつけたので、淳也もパソコンから手を離して、食事を始めた。

「どう？」「ん？」淳也は食事のことを聞かれたのか、調査のことを聞かれたのか、判断に迷った。「食事、今日のは鮎よ。めったに売っていないんだからね！」と、順子が言ったものだから、ああそうかと思い、淳也は答えた。「美味しいよ。それにしても順子は料理がうまいのに、どうして…」途中まで言いかけて、順子の顔色が変わったので、不味いことに触れたのだと気がついて、それ以上言葉にするのをやめておいた。

何度も書くが、この姉弟は、互いのことを名前で呼ぶ。姉弟だが、淳也は順子を姉と呼ぶことはなく、順子は淳也を弟と呼ぶことはなかった。その分二人の信頼は厚く、互いを仕事のパートナーとして信頼していた。だがその様子は、周りの人から見れば、恋人や、夫婦に見えるわけである。不思議なことに、２人はその関係を解消しようとは思わなかったから、あらぬ噂もたてられた。２人が、姉弟で、如何わしい関係なのではないかと、そういった噂もたてられていた。２人はそれを知っていたし、それでも何も手を打とうと言うことはなかった。

「どうなの？」今度は調査の進み具合だろう。「まだ始めたばかりだよ。それにネットだけじゃ、ろくな情報も手に入らないよ」淳也はため息混じりに答えた。順子もがっかりした様子で、溜息で、それに答えた。

順子は「食べてからにしよう」と言って、鮎に箸をすすめた。本当に美味しい鮎だった。さすがに市内で、鮎の養殖をやっているだけの事がある。二人の住む市では、海水魚の陸上養殖も行っている。

温泉地も近くにあって、塩分やミネラル分などの利点があり、ふぐの陸上養殖も行われている。ふぐにはテトロドトキシンという神経毒があるが、ふぐ自体に毒性があるのでは無く、摂取する食べ物によって、ふぐの体内に毒がたまってゆくのである。つまり、毒を発生させない食べ物を与え続ければ、毒のないふぐが食べられるのである。このやり方で育てると、ふぐの肝などが、安心して食べられるようになるのだ。

たまに二人して食べにいくのだが、それがこの二人の、唯一の贅沢だった。この姉弟、本当に仲が良すぎて、近親相姦を疑う者も居たが、その辺のモラルは、この二人は守

れている。というか、本当に仲の良い友達的な関係である。

鮎に舌鼓を打って、ご飯を平らげて、味噌汁まで堪能し、淳也は満足して、箸を置いた。順子も自分の料理に納得のいった様子で、ごちそうさまを言ってから、箸を置いて、後片付けに入った。

淳也は満足したら、急に眠気がさしてきたので、パソコンを閉じて、居間に移動した。テレビで一日のニュースをチェックするのが、彼に日課だ。

順子にばかり家事をやらせているように見えるが、実は交代でやっている。ただ、淳也が担当の時はレトルトが多くなるので、順子はそれを嫌って、自分でやってしまう事が多くなるのだ。淳也も料理などは出来るが、面倒くさがりなので、結局レトルト食品である。順子は、美容と健康は食事から！と言う考えにはまっているために、自分で作った食事を摂る事が最良と思っているのだ。その辺りは、やはり、沙都子とは違う。

先ほどの相手は、おかしな気質のエネルギーを含んだものを、攻撃に使っていたな。順子は先の戦闘を思い出して、また、自分なりの分析の世界へと脳を稼働させていた。相手は何者なのか。よく戦う鬼とは違った、魔の気質を持つものと言った所か。

こんな世界に居ると、魔のものと接する機会が、常人よりもはるかに多い。でも、順子が今までに戦った相手とは、明らかに何かが違っていた。攻撃の仕方にも違和感があった。鬼ならば、自らの肉体の頑強さを知っているので、先ず前面に出て戦闘を行う。だが、今回の相手は、身を潜めての戦闘である。

淳也のテクニックもあって、今回は幸いにも攻撃を綺麗に躱していたが、おそらくまともに食らっていれば、常人ならば即死を免れないような攻撃であった。おそらく順子でも、かなりの痛手を負っていたであろう攻撃力。それなのに、相手は身を隠して攻撃してきた。その辺に、攻略の糸口がありそうである。

順子なりの推測だと、多分当たっているのではないかと思うのだが、防御力が弱い、身体が頑強ではない、力勝負にでもなれば自信が無い、と言うところだろうか。そうなってくると、戦い方も違ってくる。攻撃を上手く躱すか、防御策さえとれれば、攻め手はいくらでもある。順子の目は、うつろにテレビを見ながら、頭の中は次の戦闘のための戦略を考えるのにフル稼働していた。

里神翔子は、作戦のための根城にしているマンションの部屋にいた。明かりを薄暗くし

て、3 面あるパソコンの画面を眺めていた。世機と沙都子のデータを見ているのだ。プロフィールを確認して、攻略の糸口を探っていた。

鬼たちは、また違った仕事をしているようだ。ここに居るのは、里神翔子一人だけだった。

玄関の鍵が開けられる音がして、別の仲間6だ人ほど入ってきた。かなり大きくて広い物件を借りてはいたが6 人も入ってこられると、かなり手狭に感じる。里神翔子は、あからさまに嫌な顔を見せて、新たな客を迎えた。部屋を明るくPCの電源を落とした。自分が何に悩んで、何をしようとしているのかを、他人に見られるのは面白くなかった。

６人の背格好は、同じように見える。そう見えるように、全員が、灰色の、大きめなパーカーを着込み、同じ色のかなり余裕のあるズボンを履いていた。

男か女かは、見ただけではわからないようにしている。そのための服装でもあった。

里神は、この薄気味悪い連中に、声をかけてみる気になった。「首尾はどうだった？」６人のうちの一人が、目深にかぶったフードを取り払い、顔を晒した。色白の、赤髪の、里神よりも少し若い感じの女性だった。色が白いから、余計に髪と唇の赤が目立った。身長は１６８センチ程度で、スレンダーな体型をしていた。シャープな顎に、鋭い釣り目の、癖のある美人だった。里神はまた、面白くなさそうに言った。「協会の奴らの実力はどうだった？」「逃げられた」女は答えた。こいつがリーダーなのか？里神はこのチームと組んだ仕事は初めてだった。

「実力を聞いたんだけど？」「実力はかなりある。場数を踏んだ戦士だ。攻撃が、ことごとく躱された」女は機械的に言った。事務的を通り越して、まるでコンピュータの音声を聞いているように無機質で、無感情で、機械的だった。

「６人がかりでもだめだったの？次は、頑張ってね」里神は嫌味のつもりで言ったのだが、この女にはこたえなかったようである。女は里神を無視して、中央のソファーに座った。それを合図に、他の５人が、ソファーに座る。

まったくいけ好かない奴らだ！里神がこの連中に、好印象を抱かなかった。女の名前は、里神には知らされていなかった。ただ、コードネームが知れていた。コードネーム赤髪の吸血鬼。それがこの女の二つ名だった。

この女のほかは、フードを外さなかった。あくまでも、正体を隠しておきたいということなのか、それとも、無個性を演出したいのか？なんの意味がある？自分たちは、完全なるチームで、統率が取れているとでも言いたいのか？里神翔子は、非常にイライラしながら、応対していた。

「今回は、殺るのが目的ではない」赤髪の吸血鬼は、眼光を鋭く、遠くを見つめるようにして言う。「様子見が目的だった？」言って、里神は、笑った。椅子の背もたれに、両腕を引っ掛けて、だらりと脱力してみせる。やってられないわ！と言いたげに、嫌味ったらしい態度を見せた。

自分でも、世機と沙都子に勝ちきれなかったのが悔しいのか、本当に苛立って、落ち着かなかった。いつもならば、たとえ負けていたとしても、これほどまでには、気持ちが逆なでされることはなかった。戦っている最中に、沙都子に対して奇妙な親近感があったが、自分に近い戦い方をする彼女に、次第に苛立ちを覚えるようになっていったのだ。半身を見つけたような、好敵手とでも言うか、そういった相手に巡り合った気がして、だから勝ちきれないのが苛立った。

その苛立ちを、赤髪の吸血鬼に向けていた。この女も、実力はありそうだが、沙都子ほどには興味はわかなかった。それほどの魅力は、赤髪の吸血鬼にはなかった。里神は、お酒が飲みたくなったので、ウイスキーの瓶と、冷蔵庫に冷やしておいた炭酸を、グラスとともに持ってきて、自分でグラスに注いだ。

「アンタたちもやりたいんなら、奢ってやるはよ」里神は声をかけたが、赤髪の吸血鬼をはじめ、パーカー姿の者たちは、答える者は居なかった。「つまんない奴ら！」里神翔子は声に出して言ってから、グラスに注いだ文を半分まで飲み干した。高級なウイスキーだったが、今日は大して美味しく感じられなかった。それから、コイツラをどこに寝かせようかと、頭を回したが、パーカー姿の者たちは、休ませてもらう、と言って、勝手に空いている部屋に入っていった。なぜそこが空き部屋だと分かったのだろう？などと不思議がるほど、里神は事情がわからない女ではなかった。こういった仕事をやっていると、妙に感が鋭くなる。多分そういったもので、コイツラも感が鋭く働いたのだろうくらいに思った。

そして、あることに気がついた。「ちょっと、あんたら、ひと仕事したんなら、風呂くらい入りな！最低でもシャワーくらいは浴びなよ！」「お前は私達のママか？」赤髪の吸血鬼の声が聞こえた。

一方、沙都子と世機も、酒を飲みながら、2人で何かを調べていた。連盟のデータベースを使って、鬼の術について、珍しい事例を特にピックアップして調べていた。それともう一つ。里神翔子について、もう少し知っておく必要があった。

相手について知ることは、戦略の一つである。この2人が、若手のうちから注目されたのは、術の実力だけではなく、こういった細かな調査、戦略などに寄るところが大きい。地道な努力が、生き残るための秘策、彼らの師匠の教えである。師匠の教育が2人には充分に染み付いていた。

「沙都子、なにか分かった？」世機が、相向かいに座って、ノートパソコンの画面を見つめている、沙都子に向かって言葉をかけた。沙都子は左手で頭を掻きながら、「ぅぁー」と声を上げた。「パソコンじゃだめ」「よく、あのチンチクリンはこんな仕事やってられる！」中村紅葉のことである。沙都子とは合わない性格。いや、案外合っているのかも知れないなと、世機は思っていたが、本人たちは合わない性格と思っているのかも知れない。見た目も全然違うし、仕事にスタイルも違う。人生観、人間に対する考え方が違っているのだから、当たり前と言えばそうなのだろう。

「そっちは？」沙都子が世機に声をかける。「全然だね」世機は、自分で注いだウイスキーを、ソーダで割ったものを、口にした。術師には、酒を愛する人が多い。酒は人生を豊かにする、などという理由ではない。緊張した状態を、強制的に弛緩させるためである。体の力を適度に抜き、精神の緊張を解すために酒を飲むのだ。だから、決して、酔いつぶれるために飲むわけではない。千鳥足になって、不覚を取るような飲み方はしない。飲むときも、グラスで２～３杯といったところだ。一般的に、呪術師は、集まって飲むこともめったにない。沙都子は寂しい集団と言っているが、自分も、世機以外とはあまり飲むことはないのだから、自身も寂しい集団の一人なのだ。

「ひとつだけ、分かったことがある」世機が、パソコンを眺めながら言う。沙都子は世機に視線を向け、次の言葉を待った。「猶ちゃんをやった鬼だけど、精神感応型もいるらしい」「精神感応型って」「テレパシーのようなものを使えて、人を操る者もいるらしいんだよ」言ってから、パソコンのディスプレイを、沙都子の方に向けた。沙都子も、世機の発見した記事を、じっくりと読んだ。

「厄介ね」「厄介だね」精神攻撃で、操られでもしたら、戦いが不利になるどころか、互いを殺し合う結果になるかも知れない。さらにその場で、自殺させられることになるかも知れない。そんな事になったら、戦いようもない。精神の方はそれなりに修行で鍛えて

はいるが、どれほどの効果があるかわからない。もっと自衛策を講じなければ、戦えないということだ。

「精神系の得意なやつって居たっけ？」と、世機。「居るじゃない、とっておきのが！」沙都子が素早く切り返してくる。「いたな！」世機も返す。２人は同じ人物を思い出していた。「槇！」ほとんど同時に声を上げた。沙都子の妹、世機にとっても妹のような兄妹弟子でもある。沙都子と結婚すれば、義妹ということになる。

槇はこういった精神攻撃や、メンタル強化の防御策が得意戦術だった。槇ならばうってつけだ。頼んでみようか。「連絡取ってみる？」沙都子が言う。「受けてくれるかな」世機は少し、自信がなかった。彼女は今、表の仕事がかなり順調で、大変忙しいのだ。それに、もともとこの世界があまり好きではなかった。常々抜け出したいと言っていた。だから、沙都子は彼女を巻き込みたくはなかったし、世機もそうだった。だが、背に腹はかえられない。

沙都子は電話機に手を伸ばしたが、時計を見て、通話ではなく、メールにした。メッセージを送信する。この時間、多分槇は仕事の真っ最中だ。手芸の本を出版するとか言っていた。記事にする作品を作っていたり、手順を撮影することが忙しいらしい。沙都子はこの間、槇に電話した時に言っていたのを思い出したからだ。

３０分ほどしてから、返事があった。時間指定が書かれていた。忙しいから、明日の１５時位に自分の部屋に来いと、メッセージにあった。仕事に参加してくれるかどうかわからないが、アドバイザーが出来たのは、心強い。ネットでの調査、リサーチなど役に立たないとばかりに、２人はパソコンを閉じて、残ったウイスキーを飲み干し、眠るまでの残り時間を、２人で堪能することに決めた。世機と沙都子は、久しぶりに濃密な夜を過ごした。戦闘の前になると、昂ぶってしまう者もあるが、２人の場合は少し違っていた。強敵を前に、互いが今生の別れになるのではないかという不安から、求め合うのだ。今回の敵は、今までのものとは違って、どこか得体が知れなかった。そして２人は、ベットにも行かずに、そのまま毛布にくるまって、ソファーで寝てしまった。

「夢幻回航」第十二話

世機は自分の霊感を鍛えるための修行を欠かしたことはない。毎朝決まってトレーニングをする。それが彼の日課だった。軽いジョギングから始まって、軽く筋トレ、それからみっちり、独自の体術をトレーニングして、それから、霊力を高めるトレーニングであ

る。沙都子もトレーニングをやるが、練習メニューは違っていた。それぞれに合ったトレーニング法があるのだ。沙都子もランニングはやるし、筋トレと、体術は世機と組手もやる。だが、霊感強化は別々のトレーニングだった。

今は、沙都子と組手をやっていた。ただ、２人のトレーニングは、道場ではやらない。連盟お抱えのマンションも、武術の道場までは完備していなかった。むしろ実戦形式で、広い大地がトレーニング場だった。だから、受け身を間違えれば、怪我の絶えない練習になってしまう。それ故に、緊張した、濃密なトレーニングが出来るというものもいる。練習で怪我をしたら、仕事に差し支えると言って、２人は道場を作ってくれと働きかけていたが、連盟は良い返事をくれなかった。

毎朝、１時間程度の組手をやる。時間が短いから、練習の密度は濃いものにしている。２人が何年もかかって、練りに練った練習法である。体術の練習は、もちろん道着など着用するわけではない。２人に言わせれば、道着を着た練習など、実践的ではないというのが持論だった。だから、普段着に近くて、わざと動きにくい、大きくて、ゆるく余裕がある服装が、２人の練習着だった。

さらに世機は独自に、ブルースリーのジークンドーや、ロシアのマーシャルアーツのシステマを、独自に組み入れた格闘術を開発していた。ジークンドーはブルースリーが実際に、世界チャンプになった、ブルースリー自信が編み出した格闘術である。世界各地に布教団体があり、創始者の弟子達が、ブルースリーの教えを伝えている。システマというのは、ロシア軍の正式採用のマーシャルアーツである。共産圏のマーシャルアーツはかなり激しいが、このシステマは、練習初回に、ナイフで皮膚を傷つけたりして、どこまでやられても死なないかというのを、体感でおぼえるところから修行が始まる。世機はこれをおぼえるために5年を費やし、道場へ毎日通って習得したのだ。もちろん仕事帰りに通っていたものだから、修行はかなり大変だった。

そうまでして格闘術に拘るのは、世機の才能ばかりでは無い。本来彼は、こういったことが好きなのだ。地道なトレーニングで力をつけてゆくのが好きなのである。だから彼は、言葉付きも軽い感じを受けるが、実は非常に勉強家でもあるし、調査や推理は、足で証拠固めをする、金田一耕助や明智小五郎のようなタイプである。決して、シャーロック・ホームズのような天才肌では無かった。見た目よりも意外に泥臭いタイプなのだ。

沙都子も世機も、毎日トレーニングを欠かさなかった。余程、体調が悪くて出来そうにない時はさすがに休んだが、それ以外は、毎日トレーニングを欠かす事は無かった。朝四時に起きて6時までの2時間が、彼らのトレーニング時間だった。毎日の日課とし

て、習慣化してしまったので、やらないと、かえって落ち着かない。だから毎日続ける事が出来た。

トレーニングが終わり、二人は交代で、シャワーを浴びた。まだ事件の概要すらつかめていないので、本格的にどう動くべきか、協会側の助っ人との顔合わせが住んだとは言え、まだなにも決められない状態だった。小林さんがどうやって殺されたのか。呪術だろうとはわかっても、どういう手口でやったものなのか、それさえもわからなかったのだから、同じ呪法をかけられたら、どう対処するべきなのか、対策すら出来ていなかった。

沙都子は不安を拭うように、バスタオルで濡れた体を拭った。世機は気合いを入れるべく、シャワーからの温水で、顔を擦った。シャワーを終えてから食事をし、朝の情報チェック。いつものルーティンが始まる。

それから、メールのチェックである。パソコンをひらいて、表の仕事用のアドレスからチェックを開始し、最後に連盟がらみのアドレスをチェックする。二人は、相手のよって個々にメールアドレスを使い分けていた。ごく仲の良い山田などの個人メールは、個人用のアドレスを使っていたが、仕事用は、アドレスを使い分けていた。こうする事の利点は意外に多い。まず仕分けが簡単である事。相手ごとに違うアドレスを使うから、そもそも仕分け作業もいらなかった。目的のアドレスの受信箱をチェックすれば良いのだ。

さらに、相手によって分ける事で、要件を整理しやすくなる。世機はそう思っていた。普通なら、メールアドレスを増やすと、その分プロバイダーに追加料金を払わなければならなかったが、呪術師連盟は、インターネットプロバイダーまで運営しているものだから、メールアドレスは格安で何個でも作る事が出来た。まったく都合の良い系列企業を従えた団体である。世機も沙都子も恩恵を用いながら、呆れるほどの商売っ気に、舌を巻く事もあった。なんせ近所のスーパーまで、連盟運営の関連企業であるのだから、本当に驚かされる。

「調査も進まないし、今日はリフレッシュしたいな」沙都子が甘えた事を言ってきたので、世機はそれもそうかと、彼女の提案を考えて見た。「どこへ行く？」「わたし、欲しいものがあるのよ」沙都子の言葉に、世機は背筋を震わせた。まさか、スッゲー高価なバッグとか？財布の中身を頭の中で確認してみたが、沙都子の要望はどうやら違っていた。
まあ、こちらの方が沙都子らしかったが。「バトル用のナイフが欲しい」「そんなの売ってるか？」「研二さんのところで仕込んでもらおう」

五月研二、呪術師御用達の刀剣職人。戦闘用のナイフだって作る刀鍛冶である。呪術師には特別な許可も無いから、大型ナイフなんて持ち歩いていれば、警察官に見つかったら銃刀法違反になりかねない。だが、案外かくして持っている者も居た。だけど、ナイフとは･･･。沙都子の戦闘スタイルとはずいぶん違う。

「ナイフなんて使うの？」「ちょっと興味があるだけよ、見て見るだけでも良いの」敵への警戒心はわかるが、彼女が武器を持ちたいというのは、めずらしいな。「いつもの札じゃ、不安なのか？」世機の問いに、沙都子は頷く。だが、ナイフと言えば肉弾戦。本当の意味での殺し合いになる。それが嫌だから、二人は刃物や銃器を武器にする事はなかった。その暗黙の禁忌を犯そうというのか。ここは制止しておくべきかな。世機は思案のしどころだった。

「どんなナイフが欲しいの？」世機が訊ねると、沙都子は迷ったような素振りを見せた。「そうね、術の施してあるやつ」「どんなのが良いの？」「護符みたいなのがいい」「高くつくな」

世機は料金を計算して言った。呪文つきの武器というのはかなり高価なものになる。ナイフ１本で１００万をくだらないものもあるのだ。沙都子のスタイルだと、おそらく両刃（もろは）のダガーのようなものではなく、本当のバトルナイフ。登山ナイフのデカいヤツが欲しいのだろう。山刀みたいなものを考えているのかもしれない。ブレードの刃の付いていない部分に、焼き付けや彫りで呪文を刻んだものが欲しいのだろう。だが、呪文など、気分的なもので、効果など無いのは呪術師であれば誰でも知っている。沙都子はなんでそんなものを望むのか。アクセサリーのようなものなのか。だが、彼女にはそんな趣味は無いはずである。

「そんなもの、何に使うんだよ」世機は、沙都子の目的が理解できずにいた。沙都子はニッと笑って、世機の見た。笑顔が、まるで悪戯を思いついた少年のように見えた。「一つだけ、効果のある呪文があるのよ」その手のもので、効果のある呪文というと、目くらましくらいのものだが。世機はその事を沙都子に言うと、更にいたずらっ子のような顔を見せて笑った。「お楽しみよ」意地悪い笑顔である。本当に悪い顔をする。こういった時には、本当に悪人面になるのが、沙都子である。だから沙都子は嘘が下手なのだ。表情に出てしまう。故に、交渉ごとなどの仕事の時は、いつも世機が役割を担っていた。

「何を企んでいるんだよ」「だから、お楽しみだって」「いつからそんなケチになったんだ？」「昔からだけど、何か？」本当に教えてくれる気が無いようなので、世機は諦めて、話題を変えた。

「ナイフを見た後だけれども、オレも用があるんだが、付き合ってくれるかな？」「なに？どんな用なの？」「いつものところだよ。明日は大事な日だろう」沙都子は世機に言われて思いだしたようである。明日は先生の命日である。あの事件があってから、もう１５年経つ。沙都子と世機のプロとして一人前になった思い出のデビュー戦でもある。そして、２人の師匠である先生の命を奪った敵との戦いの記憶。

「そうだったわね」沙都子も師匠との思い出に心を馳せたか、心此処にあらずと、遠い目をした。

二人の師匠である稜華（りょうか）の事を思い出していた。当時、世機と沙都子と槇の人は、稜華のことを師匠とは呼ばずに、先生と呼んでいた。稜華が、大したことは教えていないから、師匠でなくても、ただの稜華でも良いよと言ったのだが、それじゃあ、先生で良いよね、と言いだして、呼称は先生になったのである。最初に言い出したのは、槇だったか。

先生の死んだ直接の要因は、鬼のリーダー格である幽鬼神との一騎打ちであった。事件の首謀格の幽鬼神と、運悪く出くわしてしまった先生は、その弟子を庇うために戦って、散っていった。

世機は一部始終を見ていた。壮絶な戦いだった。呪術師の集団に取り囲まれて、命からがら逃げ出してきた幽鬼神が、なんとか逃げ延びようと、死力を尽くして仕掛けてきたのである。１０人相手に戦っても、後れをとらない化け物鬼である。世機たちも稜華の支援のために、必死に術を使ったが、善戦虚しく、師匠は倒されて、しまったのだ。

だが、師匠の稜華も、ただでは死ななかった。幽鬼神を道連れにして、壮絶な相討ちだった。幽鬼神の一撃を、腹に喰らい、内臓のはみ出した状態で、相手の動きを止めてから、渾身の一撃を決めて、霊力を送り込み、相手の命を絶ったのである。まだ１５だった世機は、戦闘が終わってからも、身がすくんで動く事が出来なかった。結界の中の出来事だったが、強力な結界が効力を無くすほどの激しいバトルに、事態に気が付く一般人も多く、阿鼻驚嘆の場景であった。

世機を一番驚愕させたのは、相打ちを決めたはずの相手が残した、呪いめいた言葉であった。「必ずオレは蘇って、お前の弟子も殺し尽くす」幽鬼神の言葉は、いつまでも世機の心に暗い影を残した。地の底から響いてくるような、怨嗟の情念の籠もった呪文となって、今でも世機の心を侵食しているのだ。世機はこの時から、度々悪夢に襲

われる様になった。沙都子や槇は師匠の最後を見ていない。師匠の指示で、２人を安全な場所に避難させてから、気になって自分だけで、稜華の元に戻ったのである。

稜華は、戻ってきた世機の姿を目にした時に、ほんの少し安心した表情を浮かべた。そして、「なんで戻ってきたか」と、厳しく世機を叱った。世機は泣き出したいのをこらえて、自分の母としての役割もこなしてくれた女性の最後の戦いを、必死でサポートした。稜華は最後まで、世機を褒める事はしなかった。年長者で、プロの自分の意見を無視して、危険な戦闘地帯に戻ってきた弟子を、厳しく叱りながら、最後の実地訓練を、世機に課した。

世機は師匠の最後の指示を的確にこなして、彼女をサポートした。激戦の末に疲れ果て、立っているのも辛い状況でも、歯を食いしばって耐えた。そして最後の瞬間。幽鬼神の鋭く尖った右手が、師匠の左脇腹をえぐり、穴が空いて、腸がだらりと地面に垂れた。その右手を、稜華は左手一本で、巻き込むようにして押さえ込み、次に自分の右手を幽鬼神の心臓の辺りに打ち込んで、一気にエネルギーを爆発させた。幽鬼神は一瞬白目をむいて仰け反り、呪いの言葉を吐いて、絶命した。

世機は何が起こったのか、理解するのに時間がかかった。そして、稜華の死に顔を見た時に、涙が溢れた。親を２度亡くした、子供の心の少年が、泣きじゃくって、血肉だらけの師匠の体を抱きしめていた。慟哭、そんな言葉が浮かんでくるような、激情に任せた感情の爆発だった。世機の帰りが遅いので、心配になってやってきた沙都子や槇も、その様子を見て、悟った。

彼らにとっては２度の親の死を目の当たりにしたのだ。精神がおかしくならなかったのは、日ごろの訓練のたまものだった。３人は抱き合って、血まみれ肉まみれになって泣いた。

結界がまだ完全に切れてしまう前に、連盟の処理班がやってきて、鬼と師匠の死体と、３人の子供を保護してくれた。３人ともにもう師匠の元で修行をするのは辛いと言って、早めに呪術師の学校へ入れてもらう事が出来た。稜華が３人に残してくれた金と、技術や精神力、それと、それなりに楽しい思いも出来た、様々な思い出とともに、沙都子、槇、世機は学校での訓練に入って行く事になった。世機は苦い思い出をかみしめながら、沙都子と２人、２キロ先の武器屋まで歩く事にした。

この辺りはまだ田舎である。田園風景や、自然の残る懐かしい光景が広がる。だが流石に夜に星が眺められるほどに田舎ではなかった。まだ夜とはほど遠い時間だ。昼前

である。

世機は沙都子を先に歩かせて、自分では、彼女の２メートルくらい後ろから、フラフラと歩いていた。沙都子はまるで世機の所在を確かめるように、度々後ろを振り返りつつ歩いて行く。年齢的には仲の良い夫婦に見えるだろう。ただ２人は子供がいないし、結婚もまだ済ませていなかった。何か切っ掛けが欲しいのだろうけれど、ズルズルと状態を維持していた。早く結婚しろと言ってくれるのは、沙都子の妹の槇しかいない。親代わりになる者ももうなく、そんな事もあって、結婚まで踏み切れないでいる。世機だけではない。沙都子だって切っ掛けが欲しいのだが、彼女は世機が言い出すのを待っているのだ。乙女心と言うよりも、意地になっているのだろうと、妹の槇などは分析している。

そんな事を考えながら歩いていたら、３０分もかからずに、目的の武器ショップに着いた。作業服専門店を思わせる趣である建物の中には、散弾銃まで揃っていた。ここは狩猟用品も扱う、本当に武器の専門店であった。店の中を一通り物色して歩いていると、見覚えのある顔が、商品陳列していた。この店の店長であり、呪術師学校を首席卒業の強者女子、西園寺時子だった。彼女は沙都子よりも頭２つ小さくて、華奢な体つきは、男子生徒の羨望の的だった。つまり、沙都子のコンプレックスを刺激するのに充分な人材だった。

西園寺時子は、２人を見つけると、「いらっしゃい」と言って、可愛らしく笑ってみせた。彼女には嫌みな気持ちなど微塵もなかったが、沙都子はどうもそういった感じ方はしていない様子だった。

「夢幻回航」第十三話

武器ショップのオーナー兼店長である西園寺時子は、小柄なメガネっ娘だった。丸顔に、色白の、愛嬌のある女性だった。美人とは言い難かったが、相手くらいは居るのだろうなと思わせるほど、可愛らしい女性であったが、このメガネっ娘、実は沙都子よりも５歳年上だったし、さらに、既婚者でもあった。子供が３人ほどいるのだが、とてもそうは見えない。沙都子はそういった所にも敏感だった。

西園寺時子と、夜羽沙都子は、合う度に、いつもじゃれ合っていたが、仲が悪いというわけではなかった。端から見れば喧嘩にしか見えないそれも、本人達はスキンシップだと言っていたし、実際に、沙都子は時子とよく連絡を取り合っていた。ちびっ子とか、デカ女とか、互いの事を呼び合っている割には、本当に姉妹みたいに仲の良い２人だ

った。それは、実の妹である槇もうらやむほどの間柄だった。

「あれー、店長の西園寺時子さんはどこに居るのかなー」沙都子が意地悪そうな声かけをした。時子はそれに気が付いたが、あえて無視を決め込む。
「ミジンコみたいに消えて無くなったかな？」沙都子は本当に意地が悪い。いじめっ子の素質がある。二人の間柄を知っていたから、世機は笑いをこらえるのに必死だった。西園寺時子は、額に青筋を立てながら、それでも、沙都子の言葉に耐えてみせる。きっと、上手い切り返しを考えているのだ。その間に、沙都子はもう一撃。「出て来ないと、踏み潰しちゃうかも」そう言って、時子に近付いて、軽くぶつかる。

時子が切り返しに手間取っているので、相棒の沙都子が助け船を出してやったのだ。それも、最悪の助け船だった。予想通りに西園寺時子は、最低の切り返しを入れてきた。「てぇーな、あーいてぇ、折れちまった！」言ってる本人が、はめられた事に気が付いて、赤面した。沙都子は笑い出して、「お前の頭は大きさだけじゃ無く、ミジンコ並みか？」と言って手を叩いた。

西園寺時子はまるで火を噴き出しそうな真っ赤な顔になって、まるで頭から湯気でも出そうである。地団駄を踏む姿が、少女のようでいじり甲斐がある。沙都子はそういったつもりで、時子を構って遊んでいた。時子の方が年上なのだが、それを感じさせないのは、容姿だけではなく、性格や言動もあった。

沙都子は、本当は羨ましかったのかもしれない。子供の頃から、身体が大きかった事もあり、同年代の小柄な女の子が着るような服装に、あこがれも抱いていていたから、時子や紅葉のような存在は、憧れだったのだ。反対に、紅葉や時子の方も、沙都子のような背の高い、スレンダーな、格好いいタイプの女子に憧れていたから、互いにおあいこと言ったところか。

「ね！御守り付きのナイフってある？」沙都子が親しげに尋ねる。「御座いますよ。こちらです」時子は事務的に言って、手近なナイフを一本手にして、沙都子に見せた。
ナイフを見た瞬間、沙都子はすべてを悟った。値札を注意して見ると、予定額よりも、０が２個ばかり多い。沙都子の目が、鋭く光る。時子の奴、１円だってまける気がない！ーさらに事務口調で、別のナイフを薦めてくる。時子の口元がニンマリと微笑む。まけてなんかやらん！目がそう言っていた。

沙都子は「チッ」と、舌打ちして時子を睨んだ。時子は、フーッと溜め息をつき、仕方がないなという表情で肩をすくめて見せた。「仕方がない、このナイフ、１２万円で良いわ」

と言って、定価通りに価格を指定する。あくまでも、割引価格にする気は無いらしい。今度は沙都子が溜め息をついて、時子に、仕方がないなと言いながら、肩をすくめて見せた。「仕方がない、そのさっきのナイフ、値引きなんてしなくて良いよ。６万円で買ってあげる」と言いながら、財布から現金を取り出して、チラ見せする。時子は真っ赤な顔でそれを否定して、値札を指さした。

いつまでこの漫才が続くのだろうかと、世機は興味の尽きないところだが、この二人のやりとりは、いつまでも続きそうなので、割って入る事にした。
「どれを購入するか、話しはついたかい？」「ついていない」「ついてない」世機の問いかけに、二人は同時に答えた。息がピッタリな相棒同士のように、素晴らしいシンクロぶりである。世機は苦笑を交えつつ、早く決めろよと、心の中で呟いた。心の声がもし外に漏れてしまうと、沙都子や西園寺時子と間に歪みが生じると思うと、思った言葉も口には出来なかった。

「沙都子はどんな能力の武器が欲しいんだ」世機は早くこの場を抜け出したいと思っていたから、質問を浴びせた。「防御と攻撃を兼ね備えた物が欲しいのよ」防御と攻撃。防御護符と、攻撃力増大か。普通、武器に付与される能力は、複数という事はあり得ない。防御なら、防御だけである。なぜならば、武器は、それ自体攻撃力があるから、付与するならば、攻撃力増大か、防御である。防御に関しては、シールドに当たるアイテムを持つのが普通であるから、防御と攻撃の護符を同時に使う事は、先ずあり得ないのだ。

「難しいよ」時子は真顔で言った。沙都子とのじゃれ合いは、一時停止いたらしい。やっと真面な話が出来ると、世機は喜んだ。
「難しいって事は、出来るの？」沙都子が言った。沙都子は実は、時子の武器制作者としての実力を、高く評価していた。彼女に不可能と言われたら、諦めるつもりで来た。だが、彼女は難しいと言った。出来ないではない、難しいと言ったのだ。つまり、難しいが、やってやれない訳ではない。つまり、作れるという事だ。世機も沙都子も、時子の実力を知っていたが、今回はさすがと言うほかは無かった。

「どのくらいで頼める？」沙都子が言う。沙都子の言うのは、制作期間の事だが、時子は別の意味に取ったらしい。「料金なら、１２万プラス工賃で１６万円でどう？」「高すぎるよ、友達のよしみで、もう少しまけてよ」沙都子は食い下がったが、時子は意地悪く首を振った。

「守銭奴！」言ってみたが、時子の返答に、沙都子は何も反応できなくなってしまう。

「あんた、この前、１３万のお札のセット１２０枚、どうせ自分で書けるし、仕方なく在庫処分に付き合ってあげるって言って、半額に値切ったじゃない？それでおあいこよ。お札もかけない術師だって言いふらされたくないでしょ？」この言葉に、沙都子はぐうの音も出なかった。時子は勝利の笑顔を浮かべて、反対に沙都子は苦虫を噛みつぶした。

「決着が付いたかい？」世機が声をかけると、２人は揃って声を上げた。「わたしの勝ち！」と、時子。「決着なんて付いていないわ」と、沙都子が、ほぼ同時に声を発した。漫才に決着は無いのか。世機は苦笑を隠しきれなかった。

沙都子は、時子が最初に出したナイフを手に取って、これが良いと言って、時子に手渡した。刃渡り３０センチの、戦闘用、と言うよりも、狩猟用のサバイバルナイフである。こんな物を持っていれば、間違いなく銃刀法違反である。沙都子はこれを選んだ。
時子が二番目に出してきたナイフは、刃渡り２５センチ程度だったが、こちらも間違いなく銃刀法に違反する。職質されて見つかれば、即逮捕である。沙都子は、これらのナイフを二つとも買いたいと言った。

一つは、３０センチの方は防御呪文で、２５センチの方は一撃必中の呪文が良いと、注文を出した。それと、あと一つ、沙都子から時子への注文があった。それは、なんのために武器として、ナイフを買うのかがわからなくなってしまうほどの内容だった。「ナイフの刃を、まるめて欲しいの」沙都子が何を言ったのかを説明すると、ナイフの刃を、切れないように潰して欲しいと言う事であった。どうしてこのような事を頼むのだろうか。それは、先ほどの銃刀法と、それ以外には、彼女の戦闘スタイルに、切れ味抜群の、ナイフの刃は、必要無かったのだ。
殺さずの誓いというわけでは無い。
得物に刃が付いていると、彼女の霊力が削がれてしまうのだ。
沙都子の力には、そういった縛りがある。彼女は、武器が持てないのだ。制約とか、そういった類いのものではない。単純に、沙都子の力は、武器と相性が悪いのだ。ではなぜ、そのような状況なのに、武器をほしがるのか？その使い方は、鈍器としてと言うのと、相手の目を眩ますための、フェイクとして、牽制として、役に立つのでは無いかと思ったからだ。

だから、沙都子は武器をほしがった。そして、どうせ持つならば、防御とその他の能力を与えられたら良いなと、そういった必然性である。

世機にも時子にも、その事はわかっていたので、先ほどの漫才になったわけである。

時子も、この業界に入ってきたのには、それなりに辛い過去というものが有った。沙都子も世機も、そういった過去を持っていたが、時子にも、もちろんあった。時子は多くは語らなかったが、沙都子や世機よりは凄惨な事件がらみの、トラウマでも残りそうな事件に関与していたらしい。
もっとも、時子はその事件の時は未成年の１３歳程度であったから、当然加害者と言う事は無かった。紅葉と違って、性的な事件というわけでも無い。猟奇殺人事件の被害者。監禁されて、殺されてしまう寸前に、保護されたと言う事であった。
監禁されている間に、次々と殺されてゆく仲間達の死体を見せつけられて、１３歳の少女が正気を保てるはずも無かった。彼女の場合は、紅葉と違って、病院に通い続ける事も必要無かったが、それでも重い障害を、脳に与えた。精神科に毎月通う事も無かったが、時々、悪夢にうなされた。

発見してくれた警察官が、術師の知り合いで、偶然に、彼女の救出劇の時に、警察官と術者が一緒だったので、時子を見た瞬間に、彼女の才能に気がついなのである。
実は、そのときに一緒だった呪術師というのが、沙都子や世機の師匠である稜華であった。稜華は、その時既に、沙都子や世機、槇を指導していたから、手一杯だという事で、時子は稜華の師匠に委ねる事になったのだ。

稜華は弟子の３人を連れて、たまに師匠の元を訪れていたので、４人は面識があった。子供の頃はよく術比べをして遊んだ者である。幼馴染み。数少ない幼少期からの友達同士だった。だからという事も有って、沙都子はもう一度、値切り交渉をやってみた。普通だったら、友達の店で値切り交渉というのも気が退ける物だったが、時子の方も少し暗いまけてやっても良いのではないかと思った。

沙都子の財政が逼迫しているのは、世機にはよく理解できていたから、沙都子のしつこいくらいの食い下がりに、笑い出したいのを必死でこらえていた。本来経済観念は、女性の方があるとは言われているが、沙都子には、軽い浪費癖があった。浪費癖と言っても、それほど深刻なものではなかったが、無視できる程度の物でも無かった。故に世機が、彼女の口座に制限を決めて、管理は世機がやっていた。

「わかったわ、あんたは友達だものね。２本で１６万。これ以上は、こっちも生活があるから」時子は言った。これだけまけても、術の付与と、刃の加工代はしっかり出ている事から、かなり儲けがあるのだろうと思ったが、そうでは無かった。殆どは人件費である。この場合、店長である西園寺時子が加工を全て行っていたから、彼女の工賃だった。

西園寺時子としても、自分の腕を安く売ってしまうような事はしたくなかったから、如何

に友達といえども、そんなに簡単には、割引価格で作業をしてあげる事は出来なかったのである。互いに納得の出来る価格帯であった事から、西園寺時子の提案で、沙都子は妥協する事にした。

契約書にサインする前に、細かな仕様や、オプションの違いを指定して、契約書にサインした。西園寺時子は、抜け目なく手をすり合わせて、スマホの電卓アプリで数値を叩いて提示した。

沙都子は仕方なく頷いて、財布から現金を取り出して渡した。
今時、キャッシュレスじゃ無い決済法を取るわけは、クレジットなどにしておくと、いつ死ぬかわからない仕事なので、支払いが滞る事があると言って、カード会社が承認してくれないのだ。故に、この業界では、プリペイドカードが主流であり、デビッドカードもまた、主流の一つだった。沙都子はカードを嫌ったので、出来るだけ、現金で払うようにしていた。
それは、西園寺時子にとっても、大変都合が良かった。実はこの、西園寺時子の運営するサバイバルショップは、殆ど仕事の片手間のような物で、いわば趣味のような物で、大して利益も上げられていなかった。沙都子もそれはわかっていたが、自分の財政難と、西園寺時子への信頼と、それに何と行っても、先ほどのような、漫才のような駆け引きが楽しくて、ついついこのショップに足を運んでしまうのだ。世機もその事については招致していたので、今回もなにも言わなかった。

契約を済ませて、用事も片が付いたので、沙都子は時子を食事に誘った。気が付いたら、ランチタイムをとうに過ぎていた。時子は店の戸締まりもせずに、すぐ隣の喫茶店に、２人を連れ出して、一緒に軽食を取る事にした。この喫茶店は、呪術師連盟などとは関係の無い、普通の経営者が営む、ごく普通の喫茶店だった。いくら連盟が大きな組織と言っても、それほどの福利厚生は無かった。

３人は、ドライカレーを頼んだ。大盛りの選択が出来たので、３人は、大盛りを注文した。サービスに、コーヒーが一杯付いてきた。湯気の立つ、熱いコーヒーに舌鼓を打って、カレーも平らげて、一息ついたところで、沙都子が今関わっている事件のあらましを語って聞かせた。

西園寺時子は、沙都子に言葉に、じっと耳を傾けていたが、里神翔子の名前を聞いて、沙都子がナイフを必要としている理由を理解した。鬼との戦いでは無い。鬼との戦闘は、沙都子には必殺の武器もある。師匠からならった、彼女専用の大技。だが、里神翔子に対しては、決定打は無かった。世機や沙都子の師匠である稜華は、鬼や化け

物の倒し方は教えたが、対人戦闘は、あまり教えてはくれなかった。何が違うのかというと、力加減である。鬼はモンスターであるため、殺してしまっても、死体もすぐに消えてしまうし、罪にはならなかった。だが、人間は、加減を間違えると、殺してしまうか寝ない。だから、殺さないためにも、戦い方を工夫する事が必要なのだ。でもどう戦うつもりなのだろう。戦闘経験の差から、沙都子の野郎としている戦術が、今一つ理解できていないところがあった。

西園寺時子は、武器制作のためにも、もう少し、沙都子の要望や、やりたい事の意味を確かめておく必要があった。どんな事を質問しようかと考えながらの食事は、西園寺時子に取っては、あまりおいしいものではなかった。だが、考えないわけにもいかず。それに、沙都子が心配だったから、せめてもの応援に、満足のいく武器くらいは用意してやりたかった。西園寺時子は、食事を終えると、ポケットに隠し持っていたメモをとりだした。

「夢幻回航」第十四話

「実戦で役に立つ物が良い」沙都子が言った。
「と言うと？」西園寺時子が、質問を返す。
「打ち合った時に、刃こぼれしない、本物のバトルナイフが良い」儀式的な、呪力重視のお飾りナイフはいらないという事だろう。打ち合った時にと言うのは、ナイフ戦を危惧しているのだろうか。

里神翔子は、体術もかなりのものだ。
本格的なバトルを想定しているという事だろうか？
実は、沙都子の考える想定事項は、そんなものではなかった。

猶が攻撃を受けた時に、相手の鬼の強さに刃が立たなかったのを考慮しての事だった。鬼の皮膚に傷をつけられるだけ業物を望んでいるのだ。

「鬼とやり合えるだけの物がいるのでしょう？」時子は流石に沙都子と付き合いが長いだけあって、彼女の意図をおぼろげにでは有るが、理解した。さすが相棒！とは言わなかったが、沙都子は話が早く済みそうだと安心した。しかし、そう簡単にはいきそうもなかった。
「それだと、さっきのナイフだと、硬度と耐久力のバランスが悪い。もっと考える必要がある」時子は、スマホを取り出して、カタログのPDFファイルを表示させた。「うちにある

在庫だと、物理攻撃で、鬼を傷つけられるような協力なのは、多分置いてないはず」指をスライドさせて、表示を変更する動作をしていたが、時子の指が止まった。

目的に合ったナイフを発見したのだろう。「これなんかどうかしら」薦められたのは、刃渡りが30センチもある山刀であった。
山刀とは、どちらかというと、ナイフではなく、なたに近い物で、確かにこれならば、鬼の硬い皮膚にも傷を付けられるだろう。
そのデータと、画像を見た沙都子は、少し顔をくもらせた。
「これは酷いのじゃないの？」沙都子が感想を述べた。「お気に召さなかった？でも、攻撃力は最高。それに、あなたの性格とスタイルにはピッタリなんじゃないのかな」最後の一言は、沙都子への宣戦布告か。
また漫才が始まるのかなと、世機は期待して眺めていたが、沙都子は相手の誘いにはのらなかった。

少し考えてから、納得したのだろうか？頷いて答えた。
「任せるよ」「不満がありそうだけれど、承りますが？」「今回は、あなたに任せる」沙都子の反応に、時子は意地の悪い笑顔を見せて、少し上目遣いに沙都子を眺める。「殊勝なあなたを見るのも悪くはないけれど、少しおとなしすぎない？最初の勢いはどうしちゃったのよ」本気で心配しているのかどうなのか、時子の言葉からは想像が出来なかった。

沙都子は世機に意見を求めるように、視線を送ったが、世機は2人の間に入っていける自信が無かったので、合図を見送った。沙都子もあまり期待していなかったらしく、時子に理由を話す事を決めた。「予感みたいなものが有って、今回の敵はかなり強敵になるのではないかと思っているのよ」「予感？どんな」どんなと聞かれて答えられるようなものではなかった。理由か。沙都子は考え込んでしまった。見かねて世機が助け船を出す。
「予感なんてのは、危機感や不安感の現れみたいなものさ。だから、理由なんてないんだよ。時子さんだって解るだろ？」世機に言われて、時子は肩をすくめて見せた。
「自信家の沙都子が、しおらしい事を言うものだから、ちょっと聞いてみたかったのよ」黙り込んでいた沙都子が、再び会話に参加してきた。
「まあ、確かにわたしらしくないか」言って、顔をパンパンと叩いた。そして、「これにして、これがいい」と、鉈のような物を指していった。

この山刀ならば、攻撃力はあるだろうが、いつもはスタイルを重視する沙都子が、これほど恐れるなんて、余程の恐怖感があるのだろう。時子は沙都子のこんな所を見た事

がなかった。それだけに、彼女の要望に出来るだけ応えてやろうと、持てるだけの商品知識を駆使して、候補をいくつか挙げた。

結局、沙都子は一時間ほど試行錯誤の後に、メインの武器は最初に薦められた山刀と、サブの武器には、１０本セットの小型ナイフを選んだ。
それと、いつもは使う事がない、特殊なお札を３００枚注文した。そして、注文が終わり、契約を済ませてから、沙都子はある事に気が付いて、愕然とした。「お金が入るかどうかわかんないんだった！！！」今回のスポンサーは、とっくに亡くなっているし、連盟が、仕事を継続するかどうかも判断保留だった事を思い出して、そして時子から受け取った請求書の金額を見て、頭を抱え込んでしまった。世機はその様子を見て、ハハハと、乾いた笑いを浮かべた。西園寺時子は、してやったりと満面の笑顔で、「まいどあり～」と言ってスマホをポケットにしまった。沙都子は時子をにらみつけ、世機にもガンを飛ばした。

戦いを制した時子は、機嫌がよかった。「コーヒーでもいかが？」にこやかに、二人にコーヒーをすすめる。沙都子はまだ不機嫌で、頬を膨らませて、テーブルの上に肘をつき、ティースプーンでコーヒーを掻き回す。
「このナイフだけで勝てるかな。もう少し考えないと」沙都子は深刻な顔で、コーヒーを口にした。

「夢幻回航」第十五話

沙都子は財布の中身と、武器の性能を考えながら、バランスの良い買い物をしたのかどうかと心配になってきた。心配になった、と言うよりも、まだ不安だった。
力が足りていないのでは無いかと不安なのだ。

世機は沙都子がこんなに不安がる様子を見るのは、初めてだった。少なくとも、仕事を、本格的に始めてからは、こんな事は無かった。修行が終わったばかりの頃、仕事をやり始めた頃の沙都子を思い出して、世機は懐かしくなった。
可愛くなったと言えば、沙都子が怒るか？
世機は自分の方もパワーアップしていた方が良さそうだと思っていたが、装備の相談を、西園寺時子に相談するべきかと思った。

西園寺時子は、二人を見比べていたが、商機を感じ取ったか、世機に視線を向けた。
世機はやはり自分も装備を調えるべきか、相談するかと、時子に話しかけた。「西園寺

さん、オレにも何か、使えそうな武器はある？」
時子はゆっくりと目を閉じると、頭の中を検索して、さらに状況を判別してくれたのだろう。

「沙都子の様子と、話しから分析して見ると、世機ちゃん、あんたにもいるかもね、武器が」武器に関しては、この女は信用できる。世機は彼女の言葉を聞く事にした。
「あんたの体術だけだと、キツそうだね」「わかるか」「徹しだけじゃ、効かなかったのでしょう？」「そうだよ」世機はそういった。

徹しとは、格闘技の技を繰り出す力の伝わり方を言う。
打撃の衝撃波を体内に効率よく伝える技だが、世機はこれが得意なのだ。だが、里神翔子の仲間の鬼には、あまり効いていなかった。その事に気が付くとは、さすがに西園寺時子。

「何か良い道具でもあるのか」「はい、ありますよ、お客様！」時子の目が円マーク！ドルマーク！！世機は「ハハハ」と、軽い笑いを発しながらも、時子の薦める武器に興味が出た。

「あなたは、ぶった切るような凶暴な沙都子とは違って、棒とかヌンチャク系が良いのかもね。多分性格的にも合っていそう」時子の言う事に納得してしまう。こういったところが、この女の凄いところだ。
世機は思った。
霊能力の一種か？こういったことへの感は、時子はすぐれていた。

「沙都子が怒っているよ」目のつり上がった沙都子が、時子を見て睨んでいる。時子は知らん顔で無視して、世機に話しを続ける。

「呪文つきの棒でも使って見る？それとも・・・」時子はカタログを捲っていく。世機はそれを見ていたが、あるページで、感が働いた。「ちょっと、これ」
オレが指さしたのは木刀だった。呪文が彫られた木刀。「これか、いいかもね」時子も納得した様子だ。

「でもこれ、準備が大変よ」「準備？」「念を込めるんだよ。自分の気というか念を込めておく必要がある」「具体的には？」「気を込めて、手の平で撫でるんだ」なんかイヤラシいなと、世機は思ったが、口にすると、この美少女風オバさんは気を悪くしそうなので、世機はグッとその気持ちを抑えた。

「夢幻回航」第十六話

「いくらだ？」世機は西園寺時子の様子が見たかったので、聞いてみた。西園寺の目が、円マークかドルマークか、兎に角お金の事しか頭にない状態になる。

「まいどあり」反応からすると、きっともの凄く高価なのだろう。沙都子も気が付いて、世機の腕を引っ張る。
「今月ピンチなのよ？」お前が言うか？と、世機は突っ込みたくなったが、黙っておいた方が、今後のためだなと、納得する。沙都子はもっと高価なものを購入したのだ。
だけど、ピンチって？その程度の貯蓄なのか？まだ大丈夫だろう？世機は沙都子を睨む。
沙都子は口笛を吹いて誤魔化す。
おいおい、かなり貯めておいたはずだが？冗談だろ？スマホでチェックして、沙都子が自分をからかっているのを確認して、一安心した。「両方とも、在庫がないから、後で届けるよ」「自宅でいいんでしょ」西園寺時子の瞳は、円マークに染まっている。

「お支払いは、後日で良いのかな？」沙都子が恐れ気もなく尋ねる。オレも、固唾をのんで返答を待つ。「もちろん、後でも良いわよ」と、西園寺。
「分割は？」世機も食い下がる。
「もちろん一括のみ」西園寺時子は明るく答える。「で、お幾らになるのかしら？」引きつった笑顔で、沙都子が笑う。「２３４万３６２３円税込よ」時子はニッコリと、これ以上にないくらいの極上の笑顔で答えた。

世機は頭を抱えて、沙都子の顔はさらに引きつる。おいおい冗談かよ！今回は、入ってこないかもしれないんだぜ？もちろん収入の事。雇い主は死んでいるし、連盟や協会の仕事になると、お金が発生しない事もあるのだ。

今回の件は緊急事態であると見止められれば、私財で戦わないとならない場合だって有る。

本当に！あとで連盟に、山田に聞いてみよう。沙都子と世機は一応請求書をもらう事にした。

経費で落ちるとは思わないけれど、彼らの財布は有限なのだ。それに、私財をなげうっ

て戦う理由は少ない。
意地だけで武器は揃えてみたが、もらえるものならば、もらっておきたいのが人情だ。
「世知辛い世の中だな」時子がしれっと言ってのけた。時子はコーヒーと軽食の他に、ケーキも追加注文した。笑顔が絶えない。
この美少女風おばさまの笑顔がこんなに忌々しく感じたのは、何年ぶりだろうか？
沙都子の顔がさらに引きつり、世機は溜息をついて、さらにこちらも追加で店の自家製ケーキを発注した。沙都子も仕方なくそれに付き合った。本当に、西園寺時子の一人勝ちと言った所か。沙都子も事態を諦めて、溜息をついてコーヒーを一気に飲み込んだ。

「夢幻回航」第十七話

沙都子は渋い顔を隠しもせずに、不機嫌そのもので、帰り道を歩いていた。世機も眉間にシワを寄せて、仏頂面である。

西園寺時子に言いくるめられた感じで終わってしまった武具購入は、大変に痛い出費だった。

今回は採算が取れないので、このような金額の買い物などしたくなかったのだが、仕方がないと諦めるほど、割り切れた感情もなかった。

「時子、今度何かおごらせる」沙都子がボソリとつぶやく。世機も頷いたが、彼はまた、別のことを考え始めていた。霊感とでも言うのか、ふいに如月姉弟のことを思い出していた。

果たして、連携して戦うことになるのだろうか？淳也も順子も相当の手練と見えたが、実力はわからなかった。呼吸を合わせるにしても、相手の技だってわからないのだ。本当に実戦で合わせてみないとわからない。未知数の戦力。それは、相手にとっても同じことである。どういった戦略を練り込んでいくか・・・。

考えても仕方がないことなのだが、世機という男は、こういった気配りが細かすぎて、むしろ沙都子のほうが男なのではないかとよく言われるほどだった。

だが、今回は、沙都子の方もいろいろと思考を巡らせている様子である。

いつもならば頭の中で何回かシミュレートしてみて、戦い方を練りだす世機であったが、今はそれをやるのにも、味方についても、敵側の戦力についても、わからないことが多すぎた。答えを容易に見いだせないでいた。「ねぇ、アイス食べたい」沙都子が唐突に言い始めた。

世機ははじめ、沙都子が何を言い出したのか理解できずに、沙都子に視線だけを向けた。

「あそこにアイス屋さんが居る」沙都子の指さした方角を見ると、アイスクリーム売の屋台が出ているのが見て取れた。来るときはなかったが、いつの間に出来た？世機はほとんど何も注意を向けずに、ただアイスの屋台を眺めた。

白い、改造された車の後部に、屋台の本体があり、その中でアイスクリームを作ることが出来るようだ。「太るぜ」世機の何気ない嫌味に、沙都子は眉を寄せて反感の意を顕にしたが、何も口に出さずに、アイス食べようと、世機の袖を引いた。「小銭がないよ？」世機が言うと、沙都子がすかさずに答える。

「大きいのだったらあるの？」意地の悪い・・・。
「自分で出せよ」「わかってるって」と頷く。
「おごってやるよ」沙都子はなんだか無理にはしゃいでいるのではないかと思った。でもなんで？別にどれほど不安があるわけでもなさそうだし、まあここしばらく表の仕事も含めて忙しかったから、こういった時間も居るのだろう。
世機も、対して深く考えないで、アイスクリーム売の屋台に向かって歩き始めていた。

「夢幻回航」第十八話

アイスクリームの移動販売車は、ポップなデザインの牽引車だった。
屋根は水色で、外壁はごく薄い黄緑で、デザイン性の良い文字で店の名前が書かれていたが、世機のところからは読み取ることが出来なかった。

沙都子は何も考え無しに不用意に近付いていったが、世機は何時も初めての場所や店に行くときは慎重だった。

世機は店に感じていた違和感が何なのか、少しだけ気が付いた。

沙都子のあとから近付いて見ると、店内にも付近にも、店員の気配すら無かった。沙都子も店員を探している。
「店員さん！」沙都子は声をかけてみたが、返事は無かった。
「店員さん、居ませんか？」さらに大きめの声で、沙都子は呼びかけた。
裏に回って声をかけたが、だれもいる様子は無かった。
さすがに沙都子も様子がおかしいと気が付いた様子で、世機の隣に来て、首をかしげている。

世機は、自分の嫌な予感が当たったのではないかと暗い気分になった。
今回自分たちが調べている事件とは関係ないかも知れないけれど、怪異はどこにでも潜んでいるものだ。今回もばったりと行き当たったのかも知れない。

世機は相手の気配を探ってみたが、霊感にはなにも感じなかった。どんな相手だろうと迎え撃つ準備は出来ている。世機はそのつもりで毎日気を配り、鍛錬してきた。今回はいつもと違う違和感が付きまとっている。

その時、何かがピンときて、脳裏に映像が走った。
世機は守護神と言っていたが、彼には丸顔の少女が取り憑いているのだ。その霊の顔が脳裏に一面に浮かび上がり、その意味を理解するよりも早く、世機の身体が反応していた。

沙都子の身体をひっつかみ、思い切り後ろに飛び下がった。そして沙都子を押し倒し、自分はその上に覆い被さった。
沙都子は何が何だかわからないが、世機が理由も無くそんなことをしないのを知っていたので、されるままにしていた。
３０秒くらい経ってからだったか、轟音が響き、炎とともにアイスクリームの屋台が黒煙を上げて吹き飛んだ。

大きな破片が世機の上にも落ちてきたが、幸いにも大した怪我も無く、爆音が治まってから立ち上がって様子を確認することが出来た。世機は沙都子の手を引いて起き上がらせる。

沙都子は突然の出来事に、呆然としたがすぐに立ち直って武器を手にした。こういう時の彼女は、普通の女子とは違って頼もしい相棒だった。世機も気配を探りながら、さらに辺りを見回して、戦闘に備えた。

あくまでも素の構えである。こういう時は構えを取ると素早い反応が出来ない。だから自然体に構えるのだ。ゆっくりとこちらに向かってくる影を見たときに、二人は注意をそちらに向けた。

――――――第二巻につづく！

＜おわりのはじまり＞
これはわたくし酎ハイ呑兵衛としての処女作です。
オッサンなのに処女作ですという冗談はさておいて、若い頃に菊池秀行に憧れていたのを思い出し、このような作品を書いてみました。
まったくのお目汚しですが、読んで頂けたならば嬉しいです。
そして感想を頂けたら、なお一層の励みになります。

酎ハイ呑兵衛

この作品はnoteで発表したものの２０話までの内容をまとめたものです。

わたしの運営するサイト
http://komitsu690327.site/